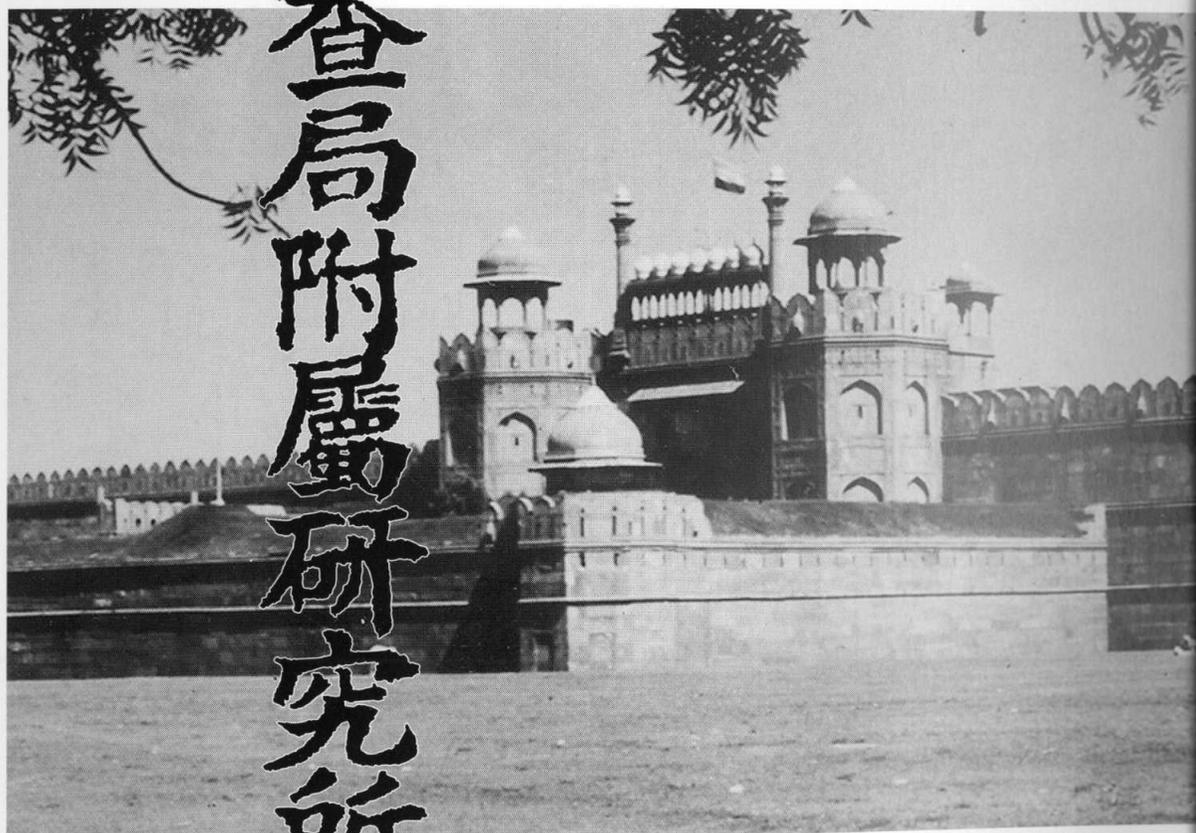
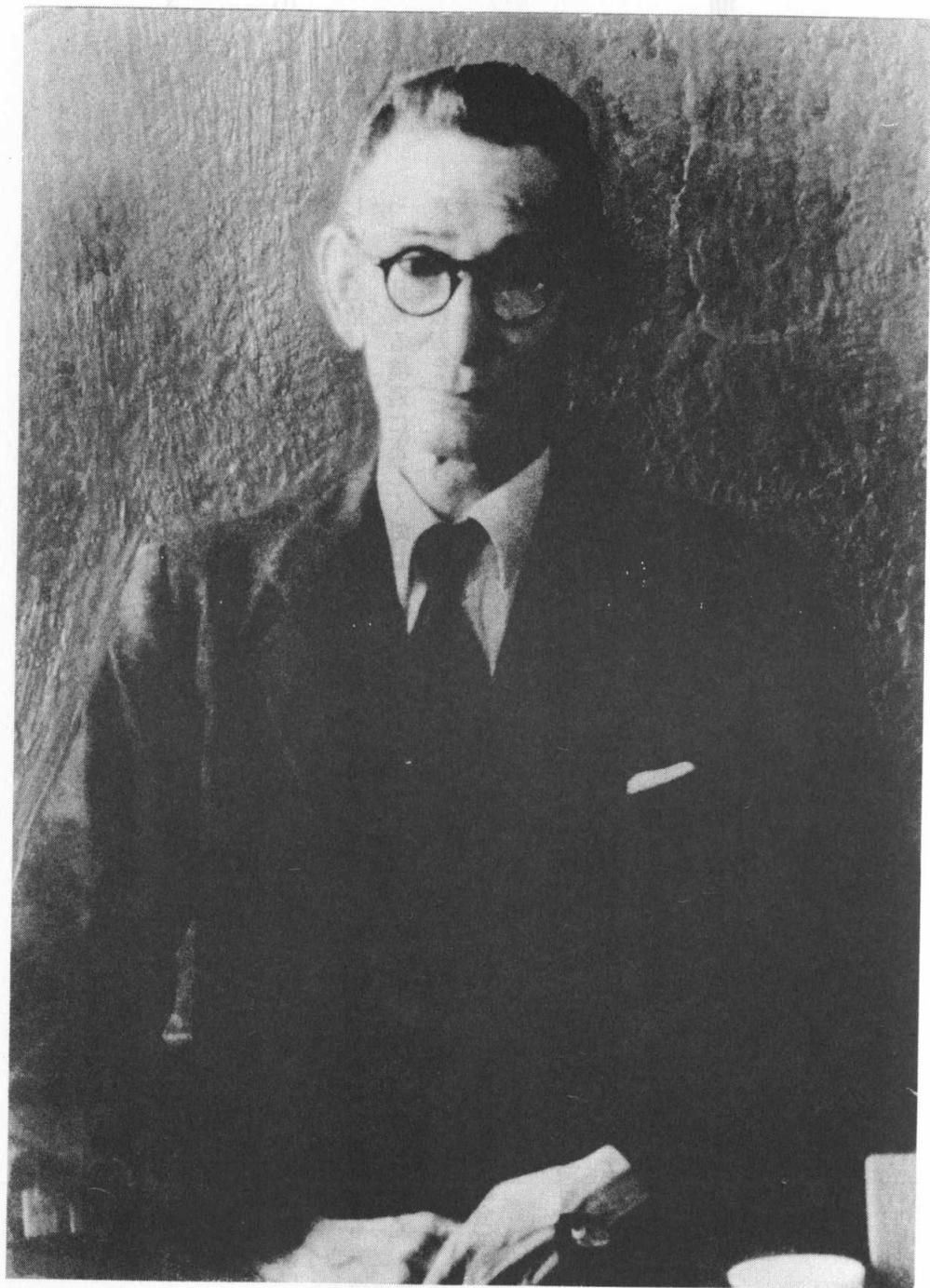


東亞經濟調查局附屬研究所



デリ・レッドフォード



102
恩師 大川先生

大川所長訓話

「二年間の寮生活は武道で言えばその型を学ぶ如きのもので、それに実をなし、真の美しい果を結ばせるのは、その後の絶えざる努力にある。二年間の体得せる根本精神をもつて、凡ゆる境遇に正しく処し、種々の仕事に専念して、その中から現実に深く触れた真の調査報告をしてもらいたい。」(5・36)

(昭十四・十二・八、柴田・加藤赴任送別会)

「諸君は南方政策の礎として、任地の研究調査に、日本の眼・耳・手足となると共に、日本人として日本の真の姿を南方民族に知らしめるべき魂の実践者たらねばならぬ。」(6・37)

(昭十五・四・二六、第一期生卒業式)

大川所長 訓話

東亞經濟調査局附屬研究所 目次

東亞經濟調査局附屬研究所 1

まえがき 1 序 2 設立 3 採用 8 教育 17 寮歌 31 寮生活 34

卒業 38 名簿 39 現地派遣(ビルマ独立義勇軍・印度国民軍・仏印戦線) 48

解散 56 受章者 60 結び 61 あとがき 66

南方會 68

発会 70 懇親旅行会 74 慰霊祭 80 鎮魂譜 90 会計 96 結び 97

大川周明顕彰会 98

みんなみ 102

発行 102 みんなみ歌集 105 瑞光 114 著書 115 結び 115

みんなみ目次集 117 あとがき 134 索引 135 資料 141

凡例

- 1、正式漢字名は「東亜經濟調査局附屬研究所」である。
表紙漢字は、研究所使用のゴム印を写したものである。(五十八頁)
- 2、敬語は省いた。失礼を御許しこう。
- 3、肩書き、職位は在任時のものである。
- 4、褒章、著書など、「みんなみ」に記載されているものを挙げた。
- 5、(数字)は、「みんなみ」号、頁を表す。
例(7・28)は(みんなみ7号28ページ)
- 6、「みんなみ」は国立国会図書館にISSN 0910-4917として国際的に永久保存として納めてあります。
- 7、写真、資料を提供された方には深く感謝致します。
- 8、記事内容を御希望の方には写しを差上げます。

東亜經濟調査局附屬研究所 通称大川塾

「研究所の目的は二つあり。

一つは調査報告、二つは日々の生活を通じて現地の人に対し、日本人及び日本の姿を無言のうちにも明瞭に示すことである。

正直と親切がモットーであり、これが完全に出来れば大人物である。」(7・28)

(昭和十五年五月一日、第三期生入所式、大川所長訓話)

まえがき

研究所は、満鉄、外務省、陸軍参謀本部の協力事業として昭和十三年に創設された。その構想、運営は全て大川先生の生涯の目標であり、先生は日夜直接指導していた。(1・2)

その規模の壮大は、アジアの歴史を動かすものであったが、大東亜戦争の敗北によって全て灰燼に帰した。ここにその概要を記して記録とする。

序

「人は其の事業よりも大である。此の世における仕事の大小は、決して人間の価値を定める最後の標準でない」
大川先生の言葉である。
〔安楽の門〕一〇二頁

人類三千年の歴史の中で、人間がなした最大の事業は、近世欧羅巴の世界制覇と現代復興アジア即ちアジアの独立である。後者の栄光は、五人の「亜細亜建設者」と、孫文、蒋介石の七人に負うところ大きい。「彼等が自ら陣頭に立って亜細亜を正しき方向に導けるものは実に彼等の莊嚴なる魂に外ならぬ」(「建設者」序文)。彼等は亜細亜のみならず、世界の歴史を正しき方向に導いた。彼等は永遠にアジアの、世界の、歴史に名を刻んでいる。しかし、ここにアジアの熱帯ジャングルに、熱砂の砂漠に咲く「自由アジア」を目ざして、隷属の荒野に種を蒔こうとした一人の人物が居た。大川周明その人である。彼が育てた苗床・大川塾から巣立った日本の青年達は、その青春を、その人生を、復興アジアに捧げた。

二十世紀は大戦争が地球を覆った。世界戦の大暴風は若芽若木を倒して訪ねるに跡なしとしてしまった。大川塾は二十世紀歴史の大舞台の誰も知らない裏に消えた。「仕事の大小」どころか、舞台にも、その目次にも載らない小事だったかもしれない。

しかし、人間の「価値を定める最後の標準」があるとすればと、本誌はアジア復興、アジア諸国の独立に捧げた大川先生と大川塾、支えてくれた諸先生、諸先輩の記録である。アジアの独立に生涯を捧げようと夢見た青年達の記録である。

平成十八年八月

「みんなみ」編集員

一、設立

設立 昭和十三年(一九三八)五月十五日

調査局 東京市麹町区内幸町一丁目二番ノ二東拓ビル

宿舎 東京市中野区鷺宮旧北畠男爵

(北畠親房子孫) 邸より調査局に通学

研究所 昭和十四年五月一日 新社屋に移転

東京市品川区上大崎四丁目二四七番地

(位置) 国電目黒駅より徒歩五分、夕日が丘の高台にあり、眺望遠く富士を見、樹木鬱然。

(敷地) 約三、六〇〇m² (60m×120m 三角形)

(建物) コの字型、木造二階建 合計1500m²

一階北舎(265m²) 食堂、炊事配膳室、浴場

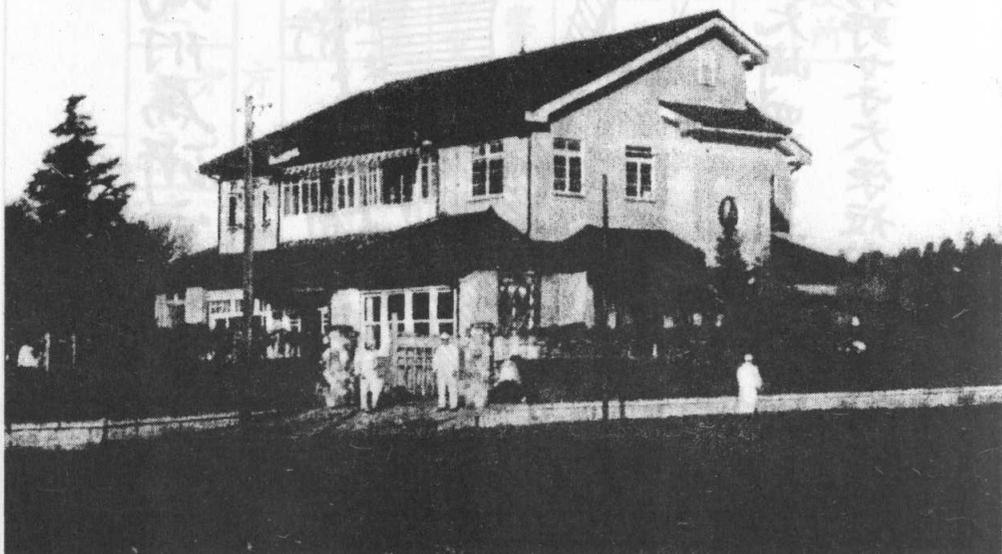
正面(222m²) 玄関、事務室、寮長室、和室、倉庫

南舎(265m²) 第一、二教室、副寮長・助手室

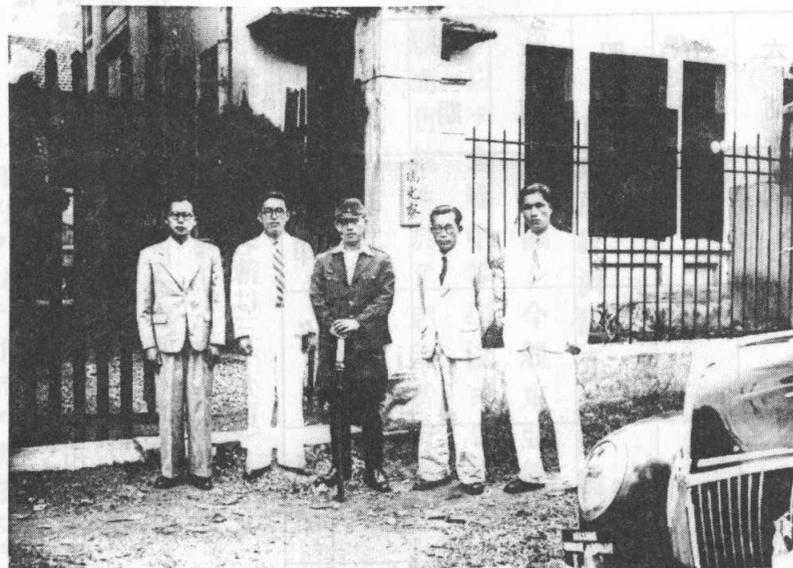
二階北舎(同右) 第一―第五寢室、娯楽室、療養室

正面 所長室、応接室、図書室、第三、第四教室

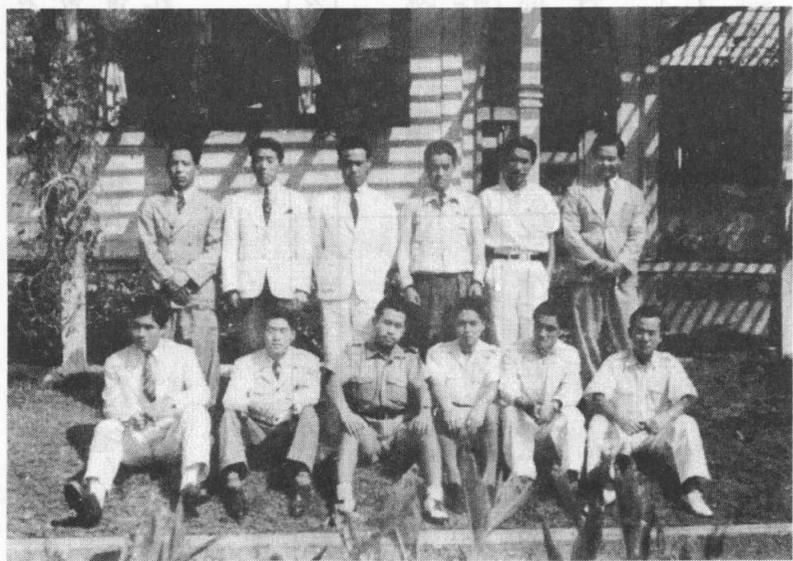
南舎 第一―第五自習室



昭和13年5月 鷺宮に開設の研究所全景 (1・6)



ベトナム・ハノイの瑞光寮の前で 昭和17年？
向かって左より 梶谷、幸野谷、西川、原田、山口



盤谷瑞光寮にて (昭和18年2月・後列左から三人目、菅寮長)

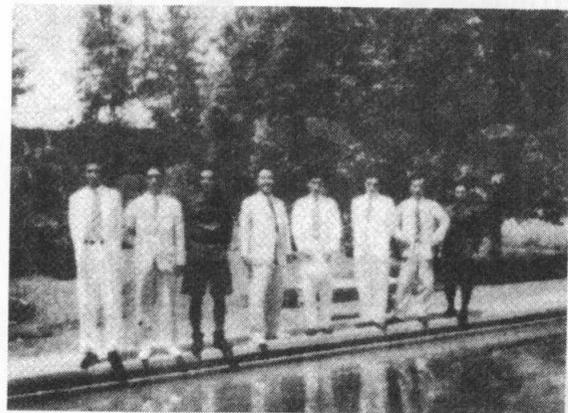
昭和十八年二月にはバンコクに菅寮長を迎えて瑞光寮がバンカピーに、同じくハノイにも瑞光寮が開かれた。



新舎玄関



新舎自習室



バンコク稲嶺邸にて
(左から倉橋、秋田、山本、奥田、森川、本間、小林、池田)

研究所舎屋全体を通称「瑞光寮」と呼んでいたが、集会用和室に頭山満翁の筆になる「瑞光寮」の扁額が掛けられていた事に由来した。(32・4)
中庭には国旗掲揚柱があり、毎朝国旗を仰ぎ皇居を拝した。外庭椎の森の中に土俵があった。目黒駅より閑静な住宅街の高台先端にあり、東南に品川、目黒を一望におさめた。途中に大川先生宅があった。

次頁バンコク、ハノイの寮の外に、左の三氏宅も自由に寮のように出入りを許されていた。

稲嶺一郎・満鉄バンコク事務所長宅(9・41)
松下光廣・大南公司社長ベトナム社宅(3・1)
五嶋徳二郎・昭和通商株式会社バンコク社宅

二、採用

生徒は、全国の中学四年生から一校一名の推薦を受け、第一次試験は書類審査により、第二次は東拓ビルにおいて面接試験、身体検査の結果定員二十名が採用された。「身体強健、意志鞏固にして数理、語学的才能を有し、

秘密を守り家庭的繋累少なき者」
 厳しい条件であった。
 衣食一切公費、手当毎月五圓、辞書以外は持ち込み禁止、学習二年、海外勤務十年、現地勤務十年の後引き続き現地に留まり事業に着手する者には資金として金壹萬圓が支給されることになっていた。

採用人員 (名簿は三十九頁)

計	六期	五期	四期	三期	二期	一期	
10			5			5	仏印
10				5		5	タイ
11			6			5	蘭印
29	19			5		5	印度
9		4			5		アガスタシ
10		5			5		ペルシャ
10		5			5		トルコ
10		5			5		アラビア
99	19	19	11	10	20	20	計

学校長宛生徒推薦依頼状

昭和十一年 月 日

東亞經濟調査局附屬研究所

所長 大川 周 明

學校長

殿

東亞經濟調査局附屬研究所練習生募集ノ件
 首題ノ件ニ關シ今般東亞經濟調査局附屬研究所ニ於テ左記ノ目的及ビ條件ヲ以テ全國中等學校ヨリ第三次練習生ヲ選拔募集致ス事ト相成候
 就而貴校ニ於テ志望者有之候ハバ左記適格者御認定御詮議ノ上生徒一名御推薦相煩度此段得貴意候
 敬 具

左 記

目的 將來日本ノ躍進、發展ニ備フル爲海外各地ニ派遣シ、滿拾年間當研究所ノ指定
 スル公私機關ニ勤務シツ、該地ノ政治、經濟及ビ諸般ノ事情ヲ調査、研究シ
 當研究所ニ定時報告ヲ提出セシメ、且一旦緩急アレバ必要ナル公務ニ服セシム
 ル目的ヲ以テ青年ヲ訓育ス。

- 條件 一、大正十一年四月以降ノ出生者ニシテ昭和十五年三月第四學年修了見込ノ者
- 二、身體強健ニシテ激務ニ堪ヘ得ル者
- 三、意志鞏固ニシテ責任感強ク、困苦缺乏ニ堪ヘ得ル者
- 四、秘密ヲ嚴守シ得ル者
- 五、數理的才能ヲ有スル者
- 六、家庭的繫累少ナキ者
- 七、親權者ノ同意ヲ得タル者

右適格者御座候上ハ次記書類御作製ノ上昭和十五年一月末日迄ニ御提出相成度候尙本所ニ於テ御提出書類審査ノ上適否決定致シ昭和十五年二月十五日迄ニ御通知可申上候

提出書類

- 一、學校長及ビ配屬將校意見書 壹通
 - 一、寫眞添付自筆履歷書 壹通
 - 一、成績表 壹通
- (第壹學年ヨリ第四學年第二學期迄ノモノ)
- 一、親權者同意書 壹通

以上

(參考書類)

東亞經濟調查局附屬研究所練習生在所中ノ給與等ニ關スル要項抽出

- 一、經費 一切本所支辨ノコト
 - 一、修業年限 二ケ年間
 - 一、修業後 海外各地ニ於テ常研究所指定ノ公私機關ニ勤務セシム
 - 一、待遇及保證 赴任後ノ給與ハ勤務機關ヨリス
- 尙十個年間支障ナク所定ノ任務ニ服シ且引續キ現地ニ留マリ、事業ニ着手セントスル者ニハ資金トシテ金壹萬圓也以内ノ補助ヲ與フ。

以上

東京弘道第三十一號

昭和十四年二月七日

東京經濟調查局弘報部長
附屬研究所主事 中島

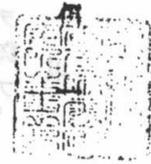
附屬研究所練習生採否ニ關スル件

一月十五日附東京弘道第十九號ニ依ル東京經濟調查局附屬研究所練習生募集ニ關シ熱心ナル御協力ニ依リ當事者トシテ感佩ニ不堪候
關係者立會ノ上嚴密ナル第一次詮衡ノ結果員下御推薦ニ係ル渡辺君
當局ニ御覽ノ上第二次詮衡ヲ行フ事ト相成候既イテハ左記要領ニ依リ本
人派遣方御手配相成度此段得貴意候

日時 二月十九日午前九時半ヨリ身證検査
二十日 午前十時ヨリ人物考査
廿一日

場所 東京市麹町區内幸町東拓ビル三階
東京經濟調查局

備考 保護者、父兄御添紙支ナシ



東京弘道第卅八號

昭和十四年二月廿七日

東京經濟調查局弘報部長
附屬研究所主事 中島

附屬研究所練習生採否ニ關スル件

去ル十九日以来二十一日ニ亘リ貴下御推薦ニ係ル渡部 亨君當方關係
各方詮衡委員立會ノ上ニテ嚴密ナル詮衡ノ結果採用ト決定セルニ就キ、
左記要領ニ依リ保護者御添ノ上上京セシメラレ度シ、本詮衡ニ關シ多大
ノ御協助重ホテ深謝仕候 尙明年度モ同様御盛力賜リ度此段得貴意候

左記

一、期日 五月一日午前九時
二、場所 東京市麹町區内幸町東拓ビル内
東京經濟調查局

三、服裝 制服

四、同日入寮（私物ハ即日返送致サスベキニ依リ辭費以外ハ持込セラレザ
ルコト）
五、制服調製ノタメ左記至急當方ニ同人ヲシテ通知セラレタシ





第2期生入所記念 1、2期生合同写真（昭14.5.1）



第4期生入所記念 3、4期生合同写真（昭17.5.1）

入所記念写真

東亜弘庶第四二號

昭和十四年四月十一日

東亜經濟調査局附屬研究所

所長 大川周明

渡部祐紀殿

一、東亜經濟調査局附屬研究所練習生收容ノ件

首題ノ件ニ關シ練習生渡部亨殿本局研究所へ收容ノ件ニ關シ左記事項御諒承ノ
上御出頭相成度此段及御通知候也

左記

- 一、昭和十四年四月三十日（日曜日）午前十時保護者附添ノ上東亜經濟調査局
へ出頭ノコト 練習生ハ即日本局附屬研究所寮舎へ收容ス
- 一、當日所持品トシテ辭書ニ類スルモノ以外ノ持參ヲ許サズ
- 一、給養（衣、食、住）及學用品其他一切ハ本局附屬研究所ニ於テ負担ス
尚小使トシテ毎月金五圓宛支給ス
- 一、附屬研究所ハ五月一日開所ス



大川所長



中島主事



高瀬主事



菅寮長



椋木寮長



児玉寮長
(平成六年 夏)



山岸寮長



緒形寮長



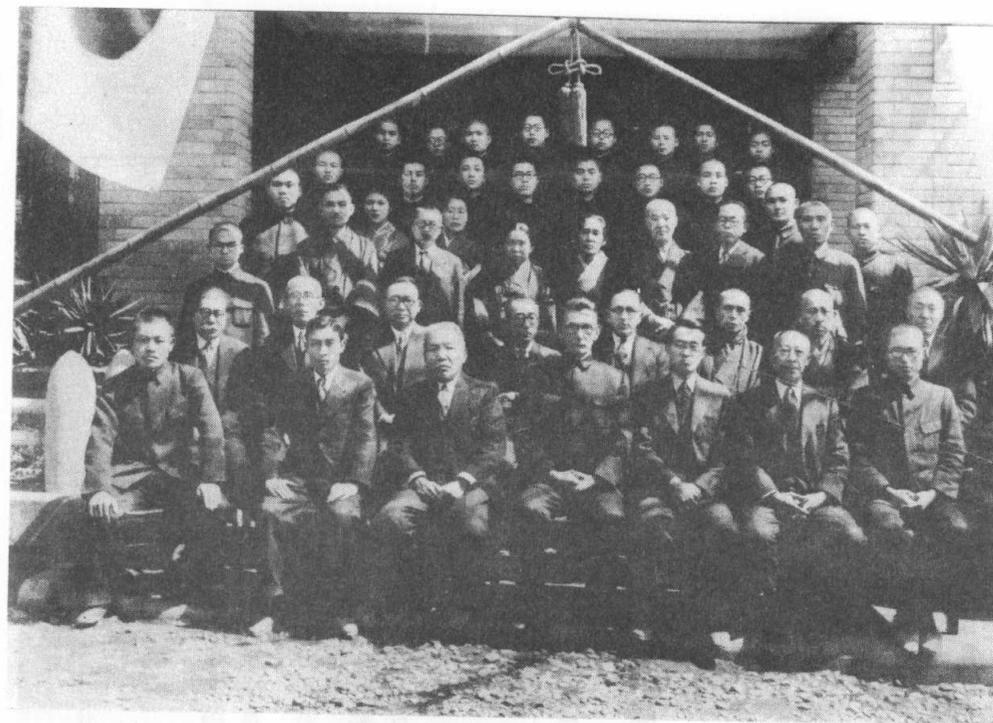
村田寮長

人事
所長 大川周明
主事 中島 信一 高瀬 侍郎
岩田 冷鉄 糟谷 健夫
山口 直人

寮長 山岸 宏
菅 勤
椋木 瑳磨太
中川 定夫
村田 勇馬
児玉 正志
緒形 誠一
国友 一志
副寮長 緒形 誠一
助手 宮前 正夫
城田 将孝
川島 陳成
中沢 治信
馬本 正男
武井 龍男
福井 順三
伊藤 啓介
寮監 保々 隆矣

三、教育

「研究所の学問の方針は、無試験、無競争、出来るだけのことをやればよい。自分をみがけ」(8・94)
(昭十六年五月二日、訓話)



第5期生 入所記念写真(昭17.5.1)



第6期生 野外訓練記念写真(戦争末期)

講師 () は担当講座

(経調Ⅱ東亜経済調査局)
(西南亜Ⅱ経調西南亜細亜班)

大川周明 (近世欧羅巴植民史、亜細亜建設者、回教、マホメット伝、現代亜細亜)

片岡 気介 京大経済学部・西南亜主査(経済)

蒲生 禮一 東京外語大(ウルドゥ、ペルシヤ語)

前島 信次 経調副参事西南亜アラブ班担当
(回教・コラン)

八木亀太郎 西南亜イラン班担当(ペルシヤ語)

大久保孝治 回教圈研究所(イスラム、トルコ語)

小林 元 同右・陸士教授(イスラム)

井筒 俊彦 語学研究所(イスラム思想史)

白井 道風 ジャパンタイムス主筆(英語)

浜野末太郎 経調南洋班(英原書・経済原論)

丸山順太郎 陸大教授(仏語)

堀 真琴 代議士(政治学)

岩隅 博 経調南洋班(経済地理)

村川 堅固(西洋史)

佐藤 宏(国際政治経済)

原 正男(日本精神)

茅原 華山 ジャーナリスト(国際事情)

今牧 嘉雄 医博(南洋における医学)

徳川 義親 公爵(昭和礼法)

中島 菊治(古式音楽)

植芝 盛平(武道)

田中 隆吉 陸軍中佐(謀略・満州事変裏面史)

アパナイ(トルコ語)

ムフシン(アラビア語)

ブラコップ・プッカマン(タイ語)

サンデル・ヤーヤナ(印度語)

戸川 英胤(経調・トルコ語)

外務省調査部南洋班・回教班諸先生

参謀本部調査研究将校

酒井・山本・新穂・相沢少尉

〔恩師の面影〕

大川先生 先生は長身瘦軀、度の強い老眼鏡の奥、眼光紙背に白人支配に対する憤り、アジア復興の情熱が若者の胸をつらぬいた。入所の月から「欧羅巴植民史」が始まり、翌年は「回教」「マホメット伝」「現代亜細亜」の歴史を講義された。特に「亜細亜建設者」の講義中は世紀のアジアの英雄達の魂が先生に乗り移った如き熱弁に打たれた。

白井道風先生

いつ教壇に立たれたか気が付かないような飄々たる教師。

丸山順太郎先生

ベルサイユ条約の主任通訳、陸大教授、三省堂のフランス語辞典の編者、ムッシュ・ムスタシユ。

平民白井先生と貴族丸山先生のお二人は英語文学、フランス語文学の香を教室に満たした。語学は楽しいと知った。

蒲生禮一先生

印度語・ペルシヤ語の蒲生先生はご自分で教材をコンニャク版、ガリ版刷りして持ってこられた。先生は、オリエント学の草分け学者であり、中世・近世・印度・イスラム文学、特に詩人達と吟遊する事を楽しみとされていたようである。奥様は「主人の月給は全部丸善に取られて私は苦勞しましたよ」と言っておられた。

先生の高井戸の二階のお部屋は本の重みで傾いていたし、外大には蒲生文庫が注目されている。

英・仏・波のこの三先生は、せまり来つつあった軍国主義時代の中に、語学の入口、文学のゆとりを教えて下さった。大川先生は、「人間は学んで無知を知る」と言っておられるが、田舎の中学出の我々に、当代超一流の先生たちが無知の門を開いてくれた。



明治35年、長野新聞主筆時代の茅原華山。34歳。(世界日報1991.5.12)

茅原華山先生は、いつも余裕の和服で「ロマンチック・フリー」と、ご自分の人生の余白を楽しんでおられるよう

うだった。配給時代に入っていた。先生の教えよりも、雅叙園でいただいたコーヒーの甘い香が私の体にいつまでも残っていた。(8・93)

片岡先生の区切りのない英文経済論、浜野先生の息づまるの経済原論、堀先生の暗い時代の政治学、原先生の王朝日本史などの講義は一時間毎に全く新しい知識を注入してくれた。

昭和十四年十二月、中支に赴任した浜野先生の言葉
(5・35)

「英語は現在かたくななる保守主義者によって排斥されているが、敵を知らずして勝利を得ることは難しく、語学をよき武器とすることを忘れる勿れ。また現在外語の新聞はほとんどユダヤ系に握られ、その裏を読みとらねばならぬ」
菅先生は「ヨハネ伝」、椋木先生は「花と兵隊」、花嫁っ子二等兵の笑いと涙の支那戦線物語だった。

椋木先生のエール大学教授・ハンチントン博士の「気候と文明」は難解であったが、興味津々、特に世界の三大文明と人種か気候か、中央アジアの砂漠に埋もれた古代文明と太陽黒点との論説にひかれた。大川先生の東西文明史論と運命づけられた日米戦争論はその背景を遠く地球形成、太陽黒点の宇宙の彼方に見ておられたのではなからうか。椋木先生もご自身、神田の古本屋を渡り、氣象、天体、地学、生物、歴史、哲学書などを手当り次第買ひ漁って猛勉強、勉強したが通ずる筈がないと述懐しておられる。(4・2)
また先生の盟友・今牧医学博士は、「熱帯衛生と南洋における保健上の心得」に気を配って生徒の健康診断に來られた。五・一五では発電所爆破隊長の熱血漢で、築地にクリニックがあり、行けばおいしい寿司をいただいた(6・33)

尾張徳川義親先生の「礼儀作法」と田中隆吉中佐の「謀

略」は異色であった。お二人とも先生の生涯の同志で、先生は幾度か義親公に助けられ、その最後青山斎場の葬儀委員長を煩わした。殿様からは箸の上げ下ろし、ナイフ・フォークの置き方から礼の本義を教えられ、幼少の頃、枕の両側に抜身の刀を置かれ、一寸も動かない寝相をしつけられた話に打たれた。

中佐殿は益々軍部の中枢重職にあつて時間をさかれた「謀略」の講義もさる事ながら、御国のために戦つて死ぬも將軍、敗戦の御国のために尽くすも將軍、「著作集」に大川先生との刎頸の交わりを後世に残している。中佐の講義は大陸の足音をしのばせた。



昭和19年頃、陸軍退官後富士吉田市に於いて左より大川周明氏、石井昌国氏、上田警部、田中氏。(田中隆吉著作集)

十二月三十一日、キーンから「直ちに上京せよ」との電報を受け取り、夜中上京し、東条に「真の武士道」を説くことなる。今は建物はなく、月見草が富士を仰いでいた。大川先生もこの月見草を見られたらうか。

予定派遣国と第一語学・第二語学

班名	予定派遣国	第一語学	第二語学	期	備考
仏印	ヴェトナム・カンボジア・ラオス	仏	安南	1・4	
泰	泰	英	タイ	1・3	
蘭印	インドネシア	蘭	マレー	1・4	
インド	ビルマ・印度・セイロン	英	3期ヒンドゥ 6期ウルドゥ	1・3・6	六期生 仏語5人 英語14人
アフガン	アフガニスタン	英	ペルシャ	2・5	
イラン	イラン	仏	ペルシャ	2・5	
アラビア	アラビア	英	アラビア	2・5	
トルコ	トルコ	英	トルコ	2・5	

学 課	昭和13年度	1 期生
英語 フランス語 オランダ語		
安南語 泰(シヤム)語 マレー語		
印度語(ヒンドゥ語)		
日本精神 国史 東洋史 政治学		
国際政治経済 経済原論(英語) 経済地理		
亜細亜建設者 回教概論 近世欧羅巴植民史		
民族学 中庸		
現地各国事情		
植芝流合気道 剣道 相撲 体操		
礼儀作法(和・洋式)		
音楽(和歌朗詠)		
来賓による講演		
予定派遣先		
仏領印度支那(安南、交趾支那、カンボジア、ラオス)		
泰(シヤム)		
蘭領東印度(インドネシア)		
英領印度(ビルマ、印度、セイロン)		

計	6	5	4	3	2	1	期
99 人	19	19	11	10	20	20	入 学
昭 13 ・ 5 ~ 20 ・ 10	昭 19 ・ 4 ~ 20 ・ 10 解 散	昭 17 ・ 5 ~ 19 ・ 3	昭 16 ・ 5 ~ 18 ・ 4	昭 15 ・ 5 ~ 17 ・ 4	昭 14 ・ 5 ~ 16 ・ 4	昭 13 ・ 5 ~ 15 ・ 4	二 ヶ 年 修 業
96 人	19	19	11	10	17	20	卒 業
東南アジア ~ 西アジア (八カ国)	英領印度・セイロン・ビルマ	アフガニスタン・イラン・アラビア・トルコ	仏印・蘭印	泰・英領印度	アフガニスタン・イラン・アラビア・トルコ	仏印・泰・蘭印・英領印度	予 定 派 遣 国

教育期間

学 課	昭和15年度	2 期生 3 期生
二期 (前ページ)		
三期 英語 泰 (シャム) 語 印度 (ヒンドウ) 語		
日本精神 国史 政治学 植民史 回教 輪講 (気候と文明) 国際政治 経済学 植芝流合気道 相撲 体操 礼儀作法 (和・洋式) 音楽 (和歌朗詠)		
予定派遣先		
二期 (前ページ)		
三期 泰 (シャム) 英領印度 (ビルマ・インド・セイロン)		
予定派遣先		
四期 仏領印度支那 蘭領東印度		
五期 アフガニスタン ペルシャ アラビア トルコ		
六期 ビルマ インド セイロン		
四期以下の学課は夫々一、二、三期に準じた。ただし、 空襲、交通難、食糧難、大川先生の中国出張などによ って学課が阻害されることもしばしばであったが、語 学自習などによって補った。		

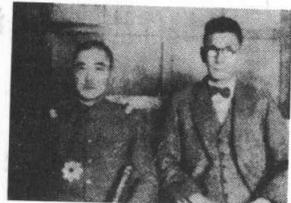
学 課	昭和14年度	1 期生 2 期生
一期 (前ページ)		
二期 英語 フランス語 アラビア語 トルコ語 ペルシャ語		
経済原論(英語) 経済地理(英語) 国際政経事情 国史 調査(情報)要項 政治学 現代亜細亜 近代欧羅巴植民史 回教概論 亜細亜建設者 マホメット伝 ヨハネ伝 輪講 (気候と文明 エズワーズ・ハンチントン著) (花と兵隊 火野葦平著)		
現地各国事情 植芝流合気道 相撲 体操 礼儀作法 (和・洋式) 音楽 (和歌朗詠)		
予定派遣先		
一期 (前ページ)		
二期 アフガニスタン ペルシャ (イラン) アラビア トルコ		

〔研究所来訪者〕（みんなみ・日録より）

大川先生は来訪者を所内隈なく案内し、最後に生徒を教室に集めて講義を依頼した。

（昭・十三年）

岩畔参謀、白鳥敏夫（公使）、矢野情報課長、金子範士（剣）、片山大尉、岩井英一・上海総領事、高瀬事務官、桜井徳太郎中佐、建川美次中將、武藤中佐、大迫少將、猿渡格、森脇、河相達夫情報部長、佐々木到一中將、肥田春充、松井石根大將、金子定一少將、増田（拓大出身）、徳川義親



大川博士と佐々木中將

（昭・十四年一月・六月）

高瀬・岸課長、行武事務官、桜井中佐、松室少將、東条英樹中將（三・十一）、豊松博士、河相部長、吉村中佐（入所式）、土肥原賢二中將、田中隆吉大佐、石渡大佐、松岡洋右（元外相）、江川幸助、近藤英次少將、樺山大將、大久保武雄航空局国際課長、松井石根、田中隆吉



松井石根氏と

（昭・十四年七月・十二月）

岸偉一課長、伊藤述史報道部長、王（中国人）、小原玉川学園長、高瀬主事、山口直人（少將）、田村浩大佐、酒井少尉、藤井裁判長（血盟団事件・帝人事件）、海帆秀夫、中堂観恵（海）大佐、宮原武夫、三吉朋十、ラス・ビハ

リ・ボース、安倍源基警視總監、A・M・サハイ、石松（新民会）、多田等観師、田中清次郎満鉄調査部長、中島宗一（東経調局長）、斉藤文弥

（昭・十五年一月・四月）

梶原（上海領事館）、大村卓一（満鉄総裁）、中西俊憲理事、今牧博士、佐藤少將、川島中佐、石山正夫、桜井徳太郎中佐、村上中佐（参謀本部）、大橋忠一、須磨情報部長、岸課長、岩田首席事務官、中島局長、今牧博士、片岡、白井、蒲生、ヤーヤナ、ブツカマン

（昭・十五年五月・十二月）

須磨情報部長、村上中佐、副島八十六、白石、山内秀三、岡村寧次中將、高岡大輔、菊地門也中將、児玉友雄中將、森、稲嶺一郎、綾川先生、長勇大佐、牟田先生、木村立正大学総長、安田先生、尾崎三雄

（昭・十六年一月・四月）

五島督二郎、吉岡課長、高木・唐木書記官、秋山氏、柳下重武、小林哲雄（アズハル大学卒）、石山正夫、岡村忠正、唐木書記官・八田谷総領事・高橋領事（支那事情）

（昭・十八年一月・十二月）

松井明課長、倉永金作（特高課）、武田信近、笹原助

（昭・十九年一月・十二月）

唐木・山川書記官、松下光広、小川清四郎、小松・阿部さん（広尾病院看護婦）、大久保孝次先生、国枝彰大尉（海軍電撃機隊長・レイテ決戦）、井田正孝少佐（第十方面軍情報参謀）、秋定鶴造中尉（班長）

〔屋外教育〕

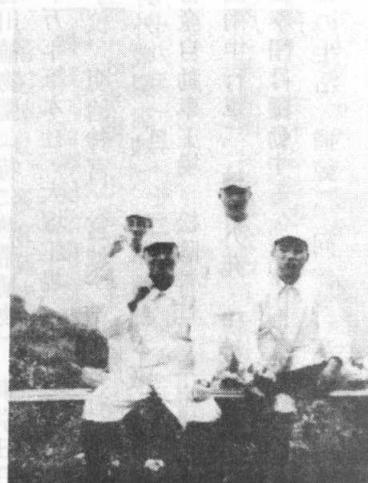
日曜を除いては寸暇もなかった生活で、一番、そして最大の楽しみは関西修学旅行であった。七月初め、夜行で東京を発ち、伊勢神宮、京都平安神宮、奈良橿原神宮、帰りは名古屋熱田神宮と回って、名古屋の後援者のコーチン鳥鍋を腹いっぱいいただくのが楽しみ。最後は名古屋城金の鯨背景にパチリ。行動は終始二列縦隊、歩調取れ。下から解けたアスファルト、上からカン／＼。金閣、銀閣素通り神社参りの楽しい旅であった。（31・49 渡辺亨の「参宮記」）

日曜には寮長以下全員で近隣の山や川へピクニックしたのも懐かしい。距離は二十km、三十km、時には夜間、冬は寒中訓練で空腹疲労との闘いであった。ある時、高尾山の道端に残った柿を取って食べたなら、帰って神前で大目玉をいただいた。私の田舎では鳥も食わないのに。

普通の日曜日は生まれて初めての洗濯アイロン掛けに苦闘して、午後は映画館がお決まりコース。田舎出には東京に知人親戚もなかったから、のんびりした一日を過ごすことができた。



建国体操



高尾山
右から緒形、倉橋、田岡、山本

〔訪問見学先〕

(昭・十三年)

多摩御陵・高尾山、日劇(ニュース)、夜間非常呼集、伊勢旅行(七・二一―二四)、逗子(夏季訓練)、全線座(最後の戦闘機・地の果てを行く)、武蔵野館(シヤムの象狩)、水川神社・石神井公園、鹿島、香取参拝、靖国神社・皇居前幸送迎、明治神宮・宮城・靖国神社、利根水郷、山海堂ホール(全国学生南洋研究学生聯合会結成大会)、開進小・校庭(練馬寮軍と対抗運動会)、一橋商大(シヤム留学生と交歓)

(昭・十四年一月・六月)

宮城、映画(自然と創造、ハリケーン)、寒中行軍(明治聖跡記念館)、日比谷公園(萬国旗展覧会)、井之頭公園(夜行軍)、明治神宮春季皇靈祭、映画(王政復古)、御嶽山行軍、映画(土)、両国国技館、映画(上海陸戦隊)、双子玉川(夜間訓練)、玉川園、洗足池

(昭十四年七月・十二月)

外務省(問諜X27号 マタ・ハリ)、多摩川(陸軍立体

広東進軍抄)、井の頭公園、二子多摩川、宮城前(靖国行幸送迎)、靖国神社

(昭十五年五月・十二月)

久里浜一泊(横須賀軍港・「高尾」・横須賀工廠・三笠記念館・横須賀海兵団)、小石川植物園、宮城・明治神宮、伊勢神宮参り(七月三日―六日、内宮・外宮・橿原神宮・畝傍御陵・吉野山・如意輪堂・後醍醐天皇陵・乃木神社・平安神宮・御所・護王神社・熱田神社・護国神社・名古屋城・東山公園)、豊島園プール、靖国神社、花月園、宮城外苑勤勞奉仕(第一回、第二回)、鎌倉(江ノ島、稲村ヶ崎)、横浜市千代ヶ崎(二千六百年特別大観艦式「比叡」[長門])、宮城前・天皇御奉迎、代々木(二千六百年特別大観艦式)、明治神宮(流鏑矢)、上野帝室博物館(正倉院御物)、三越(蘭印・仏印展)、憲法記念館、明治神宮絵画館、八王子聖跡記念館、読売遊園(パラシュート試乗)、東日天文館、泉岳寺、共立講堂(林銑十郎大将、西南アジアと回教徒政策・守屋前アフガニスタン大使)、ライオン油脂工場

(昭・十六年一月・四月)

三越(南洋及び西南アジア写真展)、亀戸鉄工所、外務

攻防演習)、国際劇場(土と兵隊・宮本武蔵・次郎長と石松)、伊勢参り(七・一九―二三)、九十九里浜(夏季訓練)、銚子・犬吠岬灯台、小石川植物園、栄養食配給所、目黒キネマ(進め竜騎兵・ベンガルの槍騎兵)、海軍館、震災記念堂・復興記念堂、東京港、乃木神社、靖国神社・遊就館、映画(土と兵隊)、植芝道場、皇居前(靖国神社行幸送迎)、鎌倉、多摩御陵、神宮外苑(第十回国民体育大会・天皇御臨席)、明治神宮、上野松坂屋(回教圏展覧会)、赤坂山海堂ホール(全国学生南洋研究聯合会講演会)、陸軍戸山学校、池上本門寺(堂宇宝物)、日本放送協会、放送会館、五反田劇場(海援隊)、高輪泉岳寺、映画(亜細亜音楽と映画の夕べ)

(昭・十五年一月・四月)

小石川植物園(特に熱帯植物)、東京日日新聞社、パイロット万年筆本社・大塚工場、上野科学博物館、立川航空技術学校、明治神宮・宮城・靖国神社(耐寒訓練)、多摩川(野外戦闘訓練)、陸軍糧秣本廠、貴族院本会議、横浜・日産自動車工場、松陰神社・東宝撮影所・神奈川県日吉村(雨中行軍)、神宮外苑・伊勢丹(代用品展)、寮内映画会(泰国は躍動する・クメール族の文化・赤色ルート・共産軍の生活・捕鯨)、同・第二回(ヒットラー総統伝・

省映画(ドイツのダンケル作戦)、丸子玉川行軍、奥多摩・御嶽、仁丹体温計幡ヶ谷工場、戸塚柏尾川桜見物・大船撮影所、雅叙園(中華とコーヒー)

(昭・十八年一月・十二月)

武蔵野・井之頭・小金井・大鵬寮、明治神宮、建部・稚子神社、鎌倉、聖跡記念館(三十六キロ行軍)、水川神社(大宮)、靖国神社、多摩御陵・高尾山(五十キロ行軍)、靖国神社、東北沢回教寺院、印旛沼・佐倉・三里塚、箱根・山中湖・河口湖、代々木上原(アパナイ先生訪問ラマザン明けお祝い)鹿島・香取、靖国神社・宮城、映画(海軍)、泉岳寺

(昭・十九年一月・十二月)

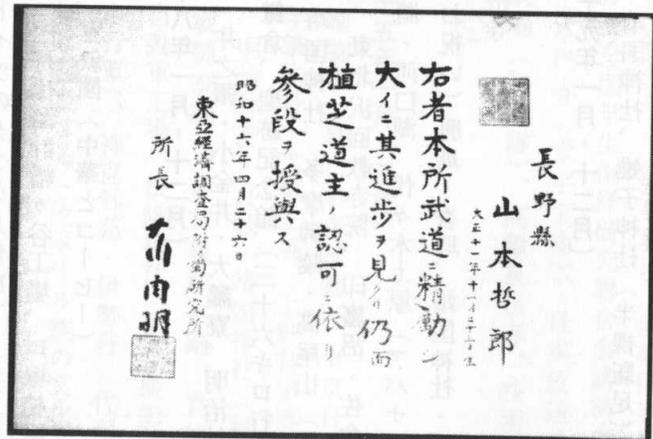
皇居・靖国神社、雉子神社(半裸駢足)、内宮・外宮・大阪(五期生七名乗船社途に着く)、日比谷公会堂(西郷南洲翁六十七年祭)、小平農園、五反田劇場(神風特攻隊)

武道

植芝流武道は、昭和十四年一月、牛込若松町道場に赴き、開祖植芝守高（盛平）師に、その真髓「敵を導きて我意の如くせしむる」を教え頂いたのが始まりで、その年の十一月には食堂に新しい畳を敷いて先生に来て指導してもらった。先生は相手としてご子息吉祥丸師を同伴して来られ、



時には真剣日本刀での指南は一寸の狂いが落命に隣する莊嚴な剣であった。先生は毎週見えられ鋭い目と飛鳥の腕で一人々々に実践指導された。（5・1）
寮生は研鑽二年、段位をもらって卒業した。
師の訓言「武は神なり、武は経綸を行うものなり」と。（6・38）



相撲

昭和十五年五月二十二日から寮生手作りの土俵作りが完成し、六月十日、土俵開きが立行司式守伊之助、井筒部屋から鶴ヶ峯、源氏山、二瀬川、小松山をはじめ力士二十数人によって行われた。古式に則り厳肅な儀式のあと、力士達の初稽古、模範試合が行われ、寮生も稽古、手ほどきを受けた。最後の一・二期生對抗試合は二号室が優勝した。その後は一ノ海関が毎週指導に来たが、一人で四十人のぶ

っかり稽古にも平気で胸を貸していた。



丘の下 椎の森の土俵

寮歌

寮歌は昭和十四年十一月、寮生から募集され、応募五編の中から選ばれた渡辺亨（二期生）の「洋々萬里」が、宮内廳雅楽部の綾小路流中島菊治先生により、翌十五年四月五日作曲発表された。（不採用の四編は後日、白柳豊が「若き日の思い出」にと「瑞光寮余韻」に記録している）（29・82）。いずれも大アジア復興への一途な思いが込められた歌詩であり、希有壮大な作である。（29・83）

中島先生からは、「西洋の芸術が、あたかもロック・クライミングによって高山を征服する如きであるのに対して、日本の芸術は、六根清浄を唱えて登山する境地のようなもので、音楽における一器一声にもその差が現れる」と、一語一声の朗読から念の入った教えを受けた。（6・33）
また、先生の綾小路流は現在宮中における正統の流派とされている古式で、御製奉唱の教授をいただいた。（5・34）
寮歌は悔いなき青春の歌となって今なお歌い継がれている。

察 歌

渡部 亨 作词
中島 菊治 作曲

mf
洋 洋 バ ン リ ヨ ノ モ ト ラ メー
グ リ ヂ グ リ テ ハ テ シ ナ キ ウー
ff
ミ ノ カ ナ タ = ヨ コ タ フ ハ ダ
ff
イ ア ジ ア ア ナー オ ク ノ ダイ ア ジ ア

(二) 腹を鼓の 羌蹄も
深遠なりし バラモンも
双河のほとり バビロンも
今いづこ
あ、今いづこ 大亜細亞

(三) 谷間の流れ 緑野に
土の香りに 大空に
みちちる雲を 結びけく
大亜細亞
あ、その生命 貴いや

(四)

國の柱を 檀原に
建てし頃より 彌榮え
寄せ来る文化 花と咲く
大八洲
あ、不二の嶺の高き國

(五)

大和島根の 男の子らよ
拳りて起てよ 劍を手に
拂へよ迷ひ アジヤより
我使命 血は流る
あ、若き胸

(六)

吾は男と 集いたる
瑞光輝見 暮つたき
進めよ進め 暮進り
幾山河 空さして
あ、曙の

(七)

白禍は去りて 八紘の
朝日は昇る 東に
睡い交して 榮ゆかん
西東 歩み哉
あ、永却の

四、寮生活

辞書以外は何一つ持っていく事が許されなかった。私（山本）は、使い古した「字源」を持っていくわけにもいかず、手ぶらで研究所の玄関に着いて驚いた。

「まあ！立派な！」尻込みする母を促して入ると、すでに大勢来ていて靴がたくさん並んでいた。

一歩上がった廊下で素裸にされて、真新しい作業服を渡された。

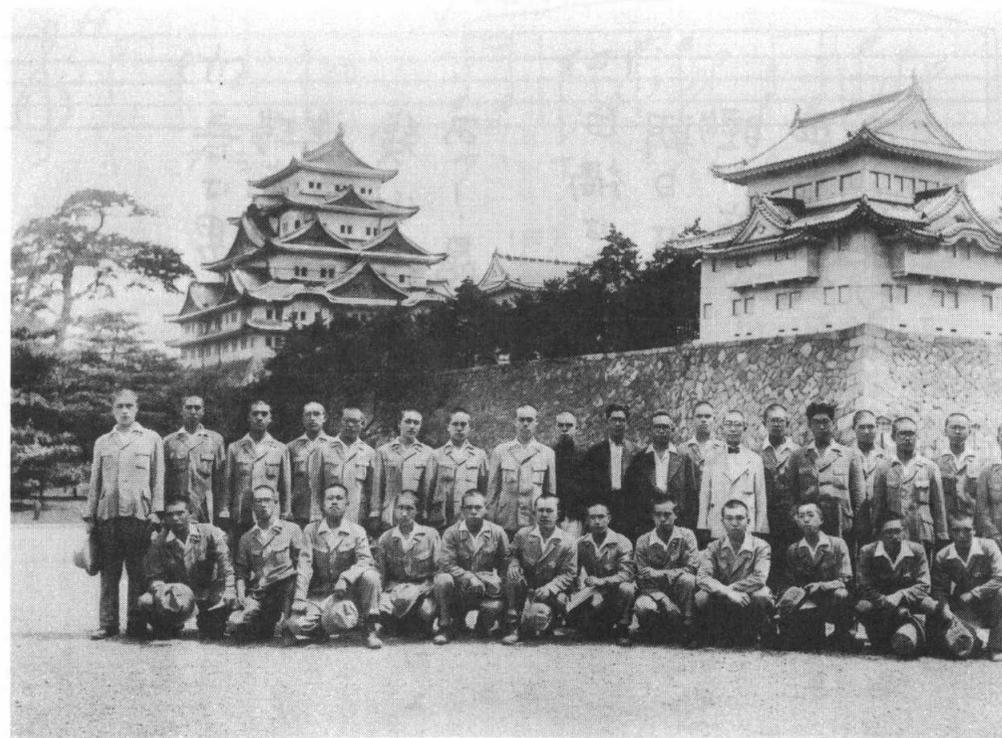
母は黙ってみているだけ、私は母が継ぎを当ててくれた中学服を着て来たが、それを渡され心配そうに帰っていった。私は生まれ変わって廊下に並べさせられた。

背の高い人（山岸寮長）が鋭い目をして前後入れかえて、「番号！」

「一ッ、二、三、四、五！」

私は五番だった。以後六十年経った今でも「二の五」（二期生五番）で五号室である。この番号によって、その日から、寮生活の同室の仲間が決まった。五号室は背高5・10・15・20番、初め一年は先輩の、後の一年は後輩の同じ番号と一心同体である。勿論、軍隊のような上下は全くなかったし、同番号、同室、そして瑞光寮全体の志を同じくし生死を誓った団結が生まれた。

日課	
5.30	起床 兵呼 体操
5.40	掃除 掃除兵検 洗面
6.45	神前礼拝 訓話(上級生学年当番)
7.00	朝食
7.50	国旗掲揚 宮城遙拜
8.00~8.50	自習
9.00~11.50	授業
12.00	昼食
13.00~14.50	授業
15.00~16.30	体操 運動 炊事開始
16.30	入浴
17.15	神前礼拝
17.30	夕食 (夕食後附直の散歩許可)
19.00~21.00	自習
21.00~22.00	自由時間
22.00	消灯 (願により23.00迄延灯許可)
◎ 合宿	玄関にある太鼓を以てする
◎ 週2回	天真流合気道(開祖 植芝盛平先生)
◎ 休日	日曜 祝祭日
◎ 休暇	正月の前後2週間
◎ 月手当	¥5.00.(5円)
◎ 非常呼集	21.00以降あり



第2・3期生修学旅行(昭15.7.6 名古屋城)

事務分担 昭和16年交 3期 10名 例 (5/16.5~5/17K)			
当番係	勤務内容	階	
		上級生	下級生
学年当番	図書副寮長補佐、学年指揮 課日誌(上級)、教育日誌、神欄	事務室、玄関 1F廊下(左)	オ/教室、オ2便所
所長当番	所長、主事、寮長、副寮長、助手 身辺世話、事務補助、 事務副寮長補佐	所長室 2F廊下(右)	寮長室 副寮長居室
図書係	図書(購入、出納、保管) 複製、西、 録音室係	図書室、応接室 娯楽室	
掃除当番	掃除一般、掃除監督 掃除日誌、業内外整備 掃除用具整備保管	オ2教室 1F廊下(南)	
用品係	制服、作業服、履具 衣料、アイロン、補修用品 日用品、文具	用品保管室 1F廊下(北)	
器具係	電気設備、水道、防火用具 土工用具整備保管		前庭・中庭 自転車
衛生当番	衛生一般、医療用品、救急 品保管整備、療養室係	オ3・オ4教室 バルコニー	療養室、オ3便所
炊事当番	炊事指揮、献立表、炊事日誌	炊事室・洗濯場	
買出係	買出一般、買出日誌(献立)	2F廊下(北) 北階段	2F廊下(南) 南階段
正食物係	正食物烹炊	食堂・配膳室	
副食物係	副食物烹炊 器具・配膳		
予備(1)			オ4便所、浴室
予備(2)			オ1便所、外庭
予備(3)			外庭
◎週替勤務である。土曜の夜(21:00)交代			
◎自習室・寢室は所長当番除いて清掃。その後配膳に			
◎風呂は小使さんが滞りてくれる。			

〔昭和語学研究所〕

昭和十五年四月、第一期生の海外赴任に当り、「今後当研究所に直接関係なき人々に対しては、『昭和語学研究所』の名称を用いて海外発展のための人材養成の学校である」ことを説明し、経営者兼校長を糟谷建夫(主事)とし、専攻は外国語と世界経済地理なる旨を述べるように、菅寮長より指示された。(6・36)

事実、生徒は寝言にまで語学に集中し、私の隣室はインド語班で、サンデル・ヤーヤナ先生は授業の初めにタゴールの詩を大声で合唱したので、私もすっかり覚えて、後に印度国民軍将校学校(バトパハ)の卒業式に歌って大喝采、皆に壇上で抱きつかれた事は感激だった。

研究所は武道、相撲の体育にまで超一流の権威者を師に迎えて、戦前戦後にも得られない最高教育を施した。寮生は「第一等の人物」たるべく勉学に励んだ。



糟谷主事

証 明 書

東亜経済調査局附属研究所は、外務省情報部の主管により、海外勤務委員の養成を目的として、昭和十三年より昭和十八年に至る間、全国府県立旧制中学卒業生中より、毎年二十名を厳選入学せしめ、全寮、無休暇、全官費制により、旧制高等専門学校の一級課程及び海外勤務者として必要なる語学二箇語以上併びに専門学課程を、二ヶ年間に亘り濃縮、特別履修せしめたる教育機関なりし事を証明する。

尚、学校長は大川周明博士を選任し、予等は夫々、外務省情報部第三課の事務官として右主管業務を管掌し、同研究所の監事を兼務して、その運営の任に当りたる者なり。

昭和十五年八月一日

拓殖大学 校長
元特命全權大使

霞山会 顧問
元大使館参事官

岩田 冷 毅

(註記)
右の証明書は、このほど奥田二期生の発意と奔走によりまして、特に高瀬・岩田両先生の御了解を得て原文が作成されたものです。

フランス語 (5)					マレー語 (5)					班	
住田 勲	逆瀬川 澄忠	原田 俊明	西川 寛生	三浦 琢二	伊藤 偵佑	密井 其一	加藤 鐵三	庄子 仁郎	大塚 壽男	氏名 (入所時)	
忠海中	都城商	松江中	八幡商	八戸中	酒田中	明石中	府立一	仙台一	大津商	出身校	
カオパープ社、近歩五聯隊通訳タイへ進駐、BIAラングーン作戦、バンコク、チャンギー、タイ永住					バンコク、カオパープ社、BIA大尉、ラングーン作戦、バンコク、バンクアン・チャンギー・ジュロン刑務所					赴任	
台湾南方協会、ハノイ、印度支那経済研究所、討四二四〇、タイゲンにてベトミン対策交渉中に殺害さる。(鎮魂譜九一頁)					台湾南方協会、西村兵団参、(中村)、プノンペン、大南公司、船舶工兵、明号作戦、南方総軍司、戦犯重労働三年					赴任	
台湾拓殖、仏印派遣軍司、ド・ソン上陸、(山根)、大南公司、稲井山砲、(安)、明号作戦、密林ゲリラ戦準備、民船にて脱出帰国					スラバヤ実業協会、スマトラ・ベンゴールン東山農場(茶園経営)現地応召、帰国					赴任	
シゴラ領事館、マレー・シンガポール作戦(藤原・岩畔・光機関、英印軍対策)、(光)本部・教育隊					スマラン・シナル・スラタン新聞、(一旦帰国)、スマトラ・コタラジャ・アチエ軍政部、アチエ住民に投ず(鎮魂譜九〇頁)					赴任	
					バンコク、大南公司					赴任	

生徒名簿

BIAビルマ独立義勇軍

INA印度国民軍

○又は○機関又は部隊

司司令部

参参謀部

五、卒業

二年間の厳しい学習を終わってよいよ卒業の日が来た。卒業の日は、新しい任務へのスタートの日だった。

第一期生卒業式(昭和十五年四月二十六日・金)

(来賓) 参謀本部村上中佐、外務省須磨情報部長、岸課長、岩田首席事務官、東亜経済調査局中島局長、今牧博士 外

(講師) 片岡、白井、蒲生、ヤーヤナ、ブッカマン(父兄) 新井、西川、三浦 外

(所長訓辞)

「時局は正に世界新秩序建設の時であり、現在日本がなさねばならぬことは、第一に日支事変の解決、第二に国内不安の除去、第三に第二次大戦への善処である。その一つを欠けば、日本は興廢の岐路に立つのであり、実に非常の時である。諸君は南方政策の礎として、真の日本人の姿を南方民族に知らしめるべき魂の実践者たらねばならぬ。」

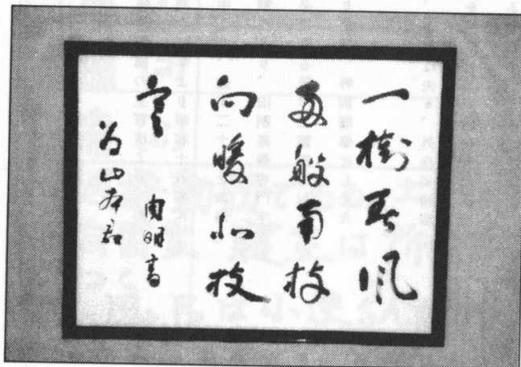
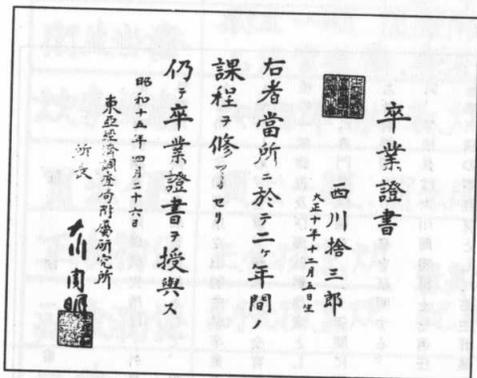
終って一期生記念植樹(6・37)

第二期生卒業式(昭和十六年四月二十六日・土)

(来賓) 田代参事官、高瀬事務官、講師、(父兄) 山口、倉橋、渡部、秋田、山本、田岡、奥田、友田、橋爪、星野、池田、本間

(所長訓辞)「厳格な生活の反動として、だらしのない生活に陥りやすいが、これをさげ、二、三年は今の生活を続けて習癖とすること。赴任後一年間は日記を送ること。道楽をもつこと。」(8・94)

終わって全員に雄渾な揮毫を授与。



〔第一期生〕（昭十五年四月卒）

インド語 (5)					タイ語 (5)				班	
須藤 和夫	豊田 誠規	柴田 敦司	大屋敷 久男	江里 繁	石川 信雄	滝井 裕	新井 章	入谷 壽義	岩崎 陽二	氏名(入所時)
東奥義	鶴岡中	京都商	東奥義	熊本中	横須賀中	浜松一	正則中	高松一	佐伯中	出身校
カルカッタ総領事館、交換船にてシンガポール、 [⊙] カレワ出張所、バンコク					台湾拓殖、バンコク、第一五軍司				赴任	
福知山連隊、 [⊙] ミイトキーナ出張所、同地前線にて戦死 (鎮魂譜九二頁)					バンコク、大南支店、ビルマ進駐、 [⊙] シンガポール、ビルマ教育隊、バンコク				シンゴラ領事館、シンゴラ事件、大使館情報部	
カラチ領事館、交換船にてバンコク大使館、 [⊙] シンガポール・パトパハ・インパール・カレワ・バンコク、					バンコク、大南公司、BIA大尉、森一〇四二、ペアジーにて英戦車隊と交戦戦死。(鎮魂譜九一頁)					
小野商会コロombo支店、交換船にてバンコク支店、BIA水上支援隊、 [⊙] アキア出張所、バンコク					バンコク武官室、バクナム上陸日本軍誘導、BIA大尉、ラングーン入城、(楠本 諜報部)					
ア・ポイント、海上支援、ピアポン上陸戦死(鎮魂譜九〇頁)										

〔第二期生〕（昭十六年四月卒）

アラビア語 (5)					トルコ語 (5)				班	
伊藤 幸三郎	片野 健四郎	富田 士生	森川 清	島村 熊喜	橋爪 正吉	本間 博基	奥田 重元	渡部 亨	山口 知己	氏名(入所時)
角館中	酒田中	鹿本中	忠海中	御船中	輪島中	鶴岡中	京都二	会津中	熱田中	出身校
(病氣中退)					サイゴン総領事館、サイゴン第二陸軍病院				赴任	
大南公司バタンバン支店(ソングクタン救出)、ツーラン(ゴディンジエム救出)、コロロ宮部隊、明号作戦(バオダイ帝夫妻救出)、サイゴン					チェンマイ領事館、バンコク大使館、中原報、義七九七〇				ハノイ総領事館、大使府、ハノイ大学、大南公司、セツト・パゴット山砲隊、明号作戦、昆明、重慶、南京、上海、香港	
(病氣中退)					バンコク、BIA大尉、ラングーン作戦、バンコク、 [⊙] 梅工作				サイゴン総領事館、サイゴン第二陸軍病院	
拓殖大学、熊本歩十二、シンガポール防衛司・参					バンコク日報社、BIA大尉、體一五八二五、終戦消息不明 (鎮魂譜九二頁)				バンコク、BIA大尉、ラングーン作戦、バンコク、 [⊙] 梅工作	
バンコク総領事館、BIA大尉、 [⊙] アキアブ・コンドウク作戦、「ハ」作戦、サイゴン、ビルマ					サイゴン総領事館、サイゴン第二陸軍病院				バンコク、BIA大尉、ラングーン作戦、バンコク、 [⊙] 梅工作	

〔第二期生〕（昭十六年四月卒）

ペルシャ語(アフガニスタン)(5)					ペルシャ語(イラン)(5)					班
池田肇	秋田正芳	星野隆	友田光男	倉橋正夫	三木菅繁	梶谷俊雄	幸野谷清和	田岡義計	山本哲朗	氏名(入所時)
酒田中	氷見中	桃山中	唐津商	三国中	安積中	大洲中	郡山中	高松商	諏訪中	出身校
バンコク、カオパープ社、マレー軍政部マラッカ政庁、 ^光 シンガポール、ビルマ、特自十二中隊					ハノイ総領事館、大南公司、ユエ領事館、サイゴン野戦航空修理隊 （中途退所） 拓大、仙台予備士官学校、ポートディクソン・シンゲツプ島 バンコク、昭和通商、富八九九一・シンガポール・マレー、 ^光 ラングーン教育隊、バンコク チェンマイ領事館、ラングーン、東亜青年聯盟創立、バーモ暗殺未遂事件、タンビザヤ守備隊 バンコク、BIA大尉、ラングーン作戦、 ^岩 畔 ^光 教育隊、バンコク バンコク三井物産					赴任

〔第三期生〕（昭十七年四月卒）

タイ語(5)					インド語(5)					班
吉田郁郎	秋田寛信	高木文造	中村悦夫	桑原秀光	上田政雄	梶村寛治	池野光荣	平佐直三郎	服部五郎	氏名(入所時)
	氷見中	忠海中	松江中	鶴岡中	柳井中	酒田中	金沢二	国士館	桃山中	出身校
サイゴンからバンコク・三菱商事ビルマへ、バンコク					バンコク、 ^岩 畔 ^光 ピナン特務班、 ^光 ピナン通信隊 バンコク大使館、 ^岩 畔 ^光 コヒマ前線死闘、 ^光 教育隊、バンコク バンコク大使館、南方総軍嘱託・ ^岩 畔 ^光 コヒマ前線死闘、 ^光 教育隊、バンコク バンコク、ハノイ第二師団入隊、ピエンチャン勤務(情報収集)、バンコクへ脱出、日本文化会館へ サイゴンからバンコクへ、中原報、義七九七〇・兵站司令部 サイゴンからバンコク・大谷洋行へ赴任、カオパープ社、義七九七六渉外班 バンコク					赴任

マレー語 (6)						フランス語 (仏印) (5)					班																								
加藤紀宏	上杉日出夫	矢木満	池田宏	林寛司	久間覚	田村伊織	藤原武彦	伏見三郎	山本吉則	今村与志美	氏名(入所時)	出身校	赴任	※戦後役職																					
市岡中	岡山二	高松一	八代中	相馬中	修猷館	桃山中	(西大寺市)	相馬中	奈良中	(直方市)																									
<p>上記五名は昭十八・八・九、門司港出航、サイゴン、プノンペン、バンコク、シンガポール、スマトラ島パカンバル港上陸、プキテインギ到着、大東亜省南方事務局嘱託、光機関要員、スマトラ軍政監部軍属、参謀長岩畔少将指令により民族事情研修半年、パタン州(ミナンカバウ族)、バタック州(シグリ族)、アチエ州(アチエ族)を巡回、昭十九・四月、分散して夫々軍政監部に配属。池田はコトラジャ勤務、産業灌漑特産科、ここで庄子一期生と会う。徴兵、第四師団野砲兵第四連隊、タイへ移動、ラーヘン駐屯、住田一期生と会う。終戦。上杉は泰緬国境の山中で終戦。英印軍に一年抑留。</p>						<p>※西日本新聞社副社長、事業部長</p>					<p>サイゴン大建産業、現地応召、歩六二聯隊、トンキン州、弾薬輸送中エンリの戦闘にて戦死(鎮魂譜九三頁)</p>					<p>※藤原産婦人科病院院長</p>					<p>北部仏印セト・パゴット山砲隊、(光)部隊、ハノイ・安部隊、ハイフォン地区、ハノイ、ユエ、アラス大南</p>					<p>サイゴン、サイゴン航空隊整備兵、プノンペン航空隊、サイゴン</p>					<p>※保険業、常磐レール(株)常務取締役</p>				

ペルシャ語 (アフガニスタン) (9)									班	
井上俊雄(朴俊達)	宮島弘	川口敏	岸根保	島岡満磨	山田勲	小川政章	佐藤正二	伊藤鉄三	氏名(入所時)	出身校
	(杉並区井草)	(佐賀県城田村)	松江中	忠海中	武義中	東京十一	酒田中	惟信中		
<p>台湾宜蘭郡四結村公学校助教</p>									赴任	
<p>参謀本部英語暗号解読班、現役入隊、三ヶ月帰隊、任務続行</p>									陸軍中央通信調査部(参謀本部の一機関)で暗号文解読、現役入隊、同調査部勤務	
<p>信七九五〇渉外部、サイゴン警備隊</p>									参謀本部印度工作要員、ラングーン、(光)教育隊、ビルマ野戦高射砲隊、ニューアンピン戦死(鎮魂譜九五頁)	
<p>(朝鮮民主主義共和国へ終戦帰国)</p>									台湾軍司令部、新竹青年学校	
<p>信七九五〇通信隊、ハノイ三八軍司令部、(明)、現地除隊、ハノイ付近で国社党と共にベトミンと戦い戦死(鎮魂譜九四頁)</p>									(光)教育隊、チャンドラボース護衛、バンコク大使館、バンクワ	
<p>信七九五〇通信隊、ハノイ三八軍司令部、(明)、現地除隊、ハノイ付近で国社党と共にベトミンと戦い戦死(鎮魂譜九四頁)</p>									(光)教育隊、チャンドラボース護衛、バンコク大使館、バンクワ	
<p>信七九五〇通信隊、ハノイ三八軍司令部、(明)、現地除隊、ハノイ付近で国社党と共にベトミンと戦い戦死(鎮魂譜九四頁)</p>									(光)教育隊、チャンドラボース護衛、バンコク大使館、バンクワ	

第六期生 (昭二〇年一〇月解散)

インド語 (ビルマ、インド、スリランカ) (15)													班				
													氏名 (入所時)	出身校	戦後の役職		
駒林俊英	真田友房	原田治	濱井誠昌	芝田欣治	豊巻敬一	永上肆朗	石田龍	岸本晋司	松田敬造	金沢伍郎	中津弘正	久野拓造	板倉一巳	本田秀夫	酒田中	酒田中	酒田信用金庫役員・庄内三共サッシセンター所長
(品川区)	鹿本中	(千葉市)	氷見中	酒田中	八戸中	御船中	京都三	神戸四	京都三	膳所中	飩肥中	東筑中	刈谷中				名古屋商大高校教諭
																	熊本大学名誉教授
																	農林業自営
																	金沢商店
																	松田商事 (株)
																	大阪入国管理局、司法書士
																	同志社国際高校清心寮監
																	府中高校教諭
																	豊巻ビニール (株)
																	帝石鑿井工業 (株)
																	病死 (二三歳)
																	三菱商事サウジアラビア事業本部、中東三菱・バーレン・リヤド
																	九州朝日放送

第五期生 (昭十九年四月卒)

トルコ語 (5)					アラビア語 (5)					班		
										氏名 (入所時)	出身校	赴任
城島忠一	杉野元一	田中寛	斉藤正	高橋哲郎	永井俊彦	高場寛	森田稔一郎	白柳豊	高橋俊郎	氏名 (入所時)	出身校	赴任
(佐賀県神崎町)	修猷館	三津中	鶴岡中	横手中	明倫中	修猷館	仙台二中	浜松一中	酒田中			
												台湾軍司令部参謀部情報班、竹南青年学校
												台湾台北州水槻頭青年学校
												台湾基隆青年学校
												参謀本部インパール作戦要員、シンガポール、ジャンシー部隊 宰領してラングーン、 ^光 教育隊、チャンドラボース護衛
												参謀本部印度工作要員、ラングーン ^光 教育隊 チヤンドラボ ース護衛、シットタン戦死 (鎮魂譜九五頁)
												陸軍特殊情報部暗号解読班 (トルコ語)
												サイゴン警備隊、歩四二九通信隊、安機関
												仏印派遣軍参謀部情報班、サイゴン警備隊、明号作戦、第三八軍 司令部、 ^明 ドーソン収容所
												信七九五〇参謀部、ハノイ三八軍情報部、衛生兵、大越党の要 請をうけベトミンとのピンエン会戦で戦死 (鎮魂譜九四頁)
												信七九五〇司令部、歩四二九部隊、明号作戦、ハノイ三八軍司、 ハイフォン陸軍病院で戦病死 (鎮魂譜九四頁)

六、現地派遣

卒業後、予定されていた派遣先に赴任できたのは一期生だけであった。(印度、タイ、仏印、蘭印)

二期生は中東地域に派遣できず、タイ(バンコク)、仏印(ハノイ、サイゴン)に待機する形となった。現地事情、現地語を習得する間もなく、大東亜戦争に突入した。

(イ)ビルマ独立義勇軍

開戦と同時に、バンコクの一期、二期生は全員、南機関・ビルマ独立義勇軍(BIA)に結集して北は道なき道を踏み分け、或は象に乗って泰緬山脈を越え、ラングーンへ。南はクラ地峡をこえて民船をかって多島海をイラワジ・デルタに溯航し敵の背後を突いてラングーン攻略に赫々たる戦功をあげた。ビルマは独立した。英国植民地に日の丸が輝いた。ラングーン入城式、歩武堂々の行進は内地で放送され、その先頭に住田・奥田BIA大尉の勇士があつた(8・38)。しかし、この時、一期生江里繁ビルマ独立義勇軍大尉はラングーン突入で戦死、イラワジの土に骨を埋めた。



ビルマ独立義勇軍ラングーン入城大観兵式(昭.17.3.25 ラングーン競馬場にて) 前列左から三人目ネ・ウイン大佐、四人目オンサン中尉、五人目ミンゴン大尉、後列左から三人目奥田大尉、四人目住田大尉

(ロ)印度国民軍

南タイ・シンゴラに待機していた伊藤啓介一期生は、上陸軍と共に破竹の勢でシンガポールに前進、藤原機関、岩畔機関の中枢に属し、印度国民軍の礎を創る。やがてチャンドラ・ボース閣下を迎え、"チャロ・チャロ・デリ"の大行進の波はインパール、アラカンに向かう。

昭和十九年、現地徴兵令が下り、マレー軍政監部、産業(錫、ゴム等)開発に従事していた邦人は全て光機関教育隊に入隊して初年兵・一ツ星となったが、卒業生は右肩には三八銃を、左肩には「正直と親切」を忘れることはなかった。

ビルマ戦線、マレー地域にいた卒業生、更に内地から飛行機で送られてきた五期性四名も加えられ、勇躍印度進攻の壮途についた。英印軍から祖国独立に覚めた精鋭数万、マレーの青年将校、美女・ジャンシー部隊の「進めデリーへ」の大合唱は士氣正に天をついた。

敗戦

インパール、コヒマ・カレワの死闘敗戦は、ビルマ派遣軍の総崩れを招いて、日本軍は先を争って東へ「転進」した。この頃、大東亜戦争全域で日本軍の「転進作戦」即ち

退却作戦が展開されたが、それは常に大きな犠牲を伴い、兵は山野に屍をさらし、時には民間人の生命財産を悉く奪った。

ビルマ戦線異常あり! 早い者勝ち!

將軍は「我ら兵」は見たこともない飛行機で退却一番乗り、将校は黙して語らず自動車でいずこへか。一ツ星初年兵は一夜明けたら、空に群がるロッキード、街道に轟く重戦車の列に囲まれていた。

兵達は上官殿の命令通り、書類を焼き、役にも立たなかった秘密兵器を井戸に放りこんで、最後の残飯でオニギリを作りバゴダを後にした。炊事場に居ついたニワトリがこぼれた米を啄みながらコケコッコと見送ってくれた。

「サヨウナラ。さらば、ラングーンよ」

インパール、アラカンには望郷無念の屍と動けぬ傷病兵と部隊を失った兵が取り残されていた。

インパール以後、日本兵は日中、ビルマの地を歩くことは出来なかつた。すでにビルマ国軍が英軍に寝返っていたから(一九四五・三・二七)、情報は筒抜けで、煙が上れば飛行機が飛んで来たし、鶏の声にも砲弾が飛んで来た。兵は腹背にせまる敵にかくれて、住民から軍票の束でオコワを買い、恩賜のタバコをバナナとコーカンして夜を待つて鉄のように重たい足をひきずって東へ歩いた。三歩歩い

て二歩滑って、一歩しゃがんで。

雨季、篠突く雨は膝を没し、網とめぐらされた水路の橋は落とされ、薄い板が水面に張られていた。板は兵の重みで水をかぶって破れた靴を洗った。兵は「お前は沈んでも菊の御紋(三八式歩兵銃)は手放してはならんぞ」と言われていた。ラングンから北上して、ペグーの三叉路を、南下して来る英国軍より一日でも、半日でも早く通過しなければならなかった。昼は無人の水の平原、夜は誰かの後ろについて無言のよろめき、背のうは濡れて重くなる。銃は肩にくいこむ。一つずつ落として行く。鉄帽がおちている。壊れた自転車、軽機さえも、「捨ててはイカンぞ。落として行け」と身軽な下士官が教えてくれた。落し物は朝までに現地人が片つけてくれる。貨物廠がボンボン燃えていた。ワオヤシッタンの渡河地点で再び三たび砲火にさらされた。敵は渡河地点に照準を合わせているらしく、夜でも正確に弾は飛んで来た。大河は世界の屋根にどしゃ降る雨を集めて三千里、アンダマンの荒波は干満一〇m、深夜暗黒の土手につく大八船に乗るさえ危険な波止場だった。波止場は船が持つて来た板一枚、干満で上下前後に流され外れて落ちても誰も無言。落ちたのは板ではない。兵隊である。板は船が持ち帰って日中対岸に敵機にかくしておく。土手には兵が一晚中船を待っている。二日目も、三日目

とうとう率領を任された伊藤一等兵(一期生)は「途中で爆撃されてもかまわないから」と頼みこんで、早朝勇敢なる船舶部隊に船を出してもらった。敵機は来なかった。ジャンシー部隊は一兵も失わずシンガポールに帰った。

現地応召の入谷(一期生)、陸軍参謀本部印度工作要員・川口(五期生)は敵戦車隊と交戦中に戦死し、チャンドラ・ボース護衛の永井(五期生)は敵機爆撃にさらされ戦死した。石川一期生は永井の遺骨を抱いてモールメンに向った。野戦で片足を取られた田岡二期生は竹杖隻脚、泥濘匍匐してモールメンにたどりついた。モールメンの混乱した波止場を逆行北上していく新兵の部隊と会った。戦車どころか、鉄砲も持たない戦車部隊だった。敵戦車隊と肉弾決戦するのだという。軍命冒すべからず。「上官の命令は天皇陛下の命令なり」。イラワジ原頭何人か帰る。

光機関本部は無事バンコクに転進して、その威風を取り戻していた。兵は軍属、通訳が四ヶ月の教育隊で二等兵になった兵隊だけだった。衛兵、将校当番、炊事、買出し、お洗濯(お忙しいこと)、軍隊は階級社会、将校のベッドを作り、靴を磨き、食堂の爪楊枝まで造らなければならぬ。されど兵は強し。便所の竹箒で楊枝を造り、カレーにしこたま芥子をぶちこんで、柱の影から拝見するのも、お

も。時々頭の上に曳光弾が飛んで来る。パッと真昼の明るさが、ゴロゴロ死んだように臥している兵を照らし出す。

「動くな!」

動いたら弾が飛んで来る。次の曳光弾が来た時には、土手には誰一人居ない。土手は白々しく光り、動けぬ兵が二、三どころがっていた。

チャンドラ・ボース閣下の車が泥濘にまみれてやって来た。閣下は、「ジャンシー部隊だけは無傷で返して下さい」と兵に頼んで、闇の中に車を降りて歩いて行った。

「印度兵? 女だつて?」

忠勇なる日本兵さえ渡れない船に、印度軍の「女の兵隊」なんか乗せる船などある筈もない。そして夜が明ける。船舶兵は船をひきあげて、飛行機の来襲に備える。



1897 ~ 1945 チャンドラ・ボース

手伝いのタイ娘とささやかな一時も兵の楽しみ。

光機関は印度放送を傍受していた。戦況は隊内にも流されていた。八月に入っていた。参謀長に呼ばれた兵隊は、「日本は決して負けはしない。十年たつたら、帝国陸軍は捲土重来、必ず帰って来るから、それまで地下にもぐっておれ!」

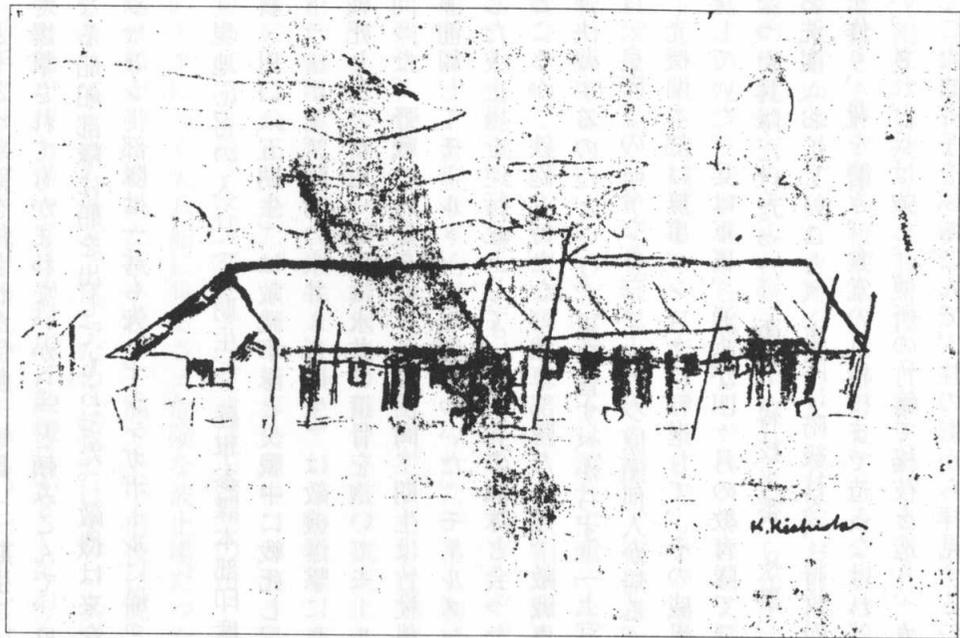
「ハッ! 十年間地下にもぐってガンバリマス!」
五百バーツもらつて戦死者扱い、裏門から脱走を命じられた。この期に及んで祖国を捨てよとは。

月の美しい夜、本部を囲む濠の橋に衛兵はいなかった。振りかえると、シンガポール以来、生死を共にした同年兵が月に向かって十字を切っていた。

「お前は必ず生きて日本へ帰るんだぞ」

現地徴兵、現地入隊、現地除隊。規則通りの手続きで、初年兵たちは手榴弾一つを渡されて兵舎を追い出された。頭は丸坊主、兵隊流れは一目で分かれる。黄衣の坊さんが裸足でやってきた。同年兵である。横目でにらみ合つて擦れ違つていく。

タイ政府は邦人キャンプを流れてもいない川に沿って造つてくれた。在留邦人は急造のバラックで、川の水を汲ん



バンブアドン・キャンプ ミレ・ミゼラブル!

で自炊生活を始めた。やる気もない、やる事もない毎日をガタガタ板張りの床に寝ころんで、いつか迎えの日を待っていた。

その頃、「大川周明がエーキュウ（永久？A級）戦犯として逮捕された」と流れた。

先生は支那から全日本軍撤退を主張し、汪政権を操り人形と言ひ（6・36）、日米戦争回避のため汎太平洋通商航海会社を創って東奔西走した。（10・6）

先生は將軍でも大臣でもない野人がA級戦犯とは驚いたし、やがて大川塾生に一網打尽の運命がまつていた。「大川塾はスパイ学校だ。スパイは全員死刑だ」と言う噂が流れていた。

明日は明治節の日だった。あの聡明な明治天皇は、「この昭和の日本のだらしない姿を嘆いているだろうなあ」と、真赤に落ちる夕日を眺めていると、誰かに呼ばれた。

「お迎えだぞ」

タイ国巡查に連れられて川を下って、戦犯特別キャンプに着いてみると、顔なじみばかりである。皆研究所卒業生である。「まるで瑞光寮だな」と誰かが言った。よくも「寮生」ばかり集めたもの、さすが大英帝国の諜報である。

厳しい尋問が始まった。

「あなたはドクター・オオカワの生徒ですね」

「いいえ、知りません」

「ドクターを知っていますね？」

「いいえ、そんな医者知りません」

「医者ではありません。あなたの先生です。あなたはシंगाポールのヒカリ、居ました。何をしていましたか？」

「将校当番をやっていました」

光機関は印度独立を助ける機関で、兵も砲もなかった。ひたすらインパールからビルマの平野を逃げまわっただけです。それ以上は「知りません」一点張り。

「印度の独立は犯罪ですか？」私は主張した。

彼には、我々の階級が最低であることが分からない。

尋問場では我々容疑者はお互い全く知らない態度をしなければならなかったが、タイの巡査は好意的だったし日本語は分からないから、我々の間では情報、連絡はおおっぴらだった。印度の独立支援戦争犯罪には結びつかないようだった。或は特定者を探していたのが、人違いでチャングーの地獄の入口まで行って絞り上げられた者もいた。伊藤一期生は、日本軍がシゴラ上陸の朝浜辺で殺された英領事殺害の犯人として、またベトナムでは西川一期生が戦前からの数々の罪状持ちとして、サンフランシスコ平和条約まで追い回されていた。（8・44、15・24、23・36）

一年近い、長いものは二年にもなった地獄の尋問を終っ

て、大川塾は江里、柴田、入谷、池野、川口、永井の若き英霊を、田岡は片足を瘡癩の地に残して、全員無罪帰還した。大英憲章でも「正直と親切」を罰することはできなかった。

（八）仏印戦線

仏印は風雲急を告げ、状勢は混沌混乱していた。そもそも日本軍の南部仏印進駐が太平洋戦争、そしてアメリカの勝利へと、逆にインドシナ戦争はフランスのアジア放棄、そしてアメリカの敗北へと連鎖していく渦中の目であった。

仏印には日本とフランスの二つの政府と軍隊があった。この二つには相互信頼はなく、互いに相手の隙をねらって、同床異夢の友好を装っていた。奇襲・明号作戦（一九四五・三・九）は日本の勝、更に一転して終戦は、帰入幕のフランスの勝、勝負のあやとは言え、仏印三国はこの間、東の間の独立を祝わうことになる。

仏印には歴史、民族、言葉の違う安南、ラオス、カンボジアの三つの王国があった。宗主国フランスからの独立の悲願は共通していたが、独力でフランスの「保護条約」を破棄することは出来なかった。阮王朝の保大帝は「越南帝国」を三月十一日、カンボジアのシハヌーク国王は三月十

三日、ラオスのシサヴァンウォン王は四月八日、それぞれ
念願の独立を宣言した。一〇〇年続いたフランスのインド
シナ統治は終わった。明号作戦の落とし子だった。

身に寸鉄を帯びず、三度にわたって山中に分け入り、ベ
トミン幹部に「越南帝国」に協力の要請説得に当たった原田
一等兵（一期生）は、彼が「友」と信じ、また愛したベト
ナムの民によって「処刑」された。赤陽紅河を染めた。享
年二十五歳。原田は生前言った。

「ベトナムは一度修羅の坩堝に投ぜられねばならない。血
みどろの民族的試練の中から、真の強いベトナムが建設
されるのだ」

原田はその功によって二階級特進陸軍兵長となる。

ベトナム（ベトナム独立同盟）は、奇しくも大東亜戦争
勃発と同じ年一九四一年、中国との国境近く（パクポ）に
生まれ、雌伏五年、満を持して時機到来に備えていた。明
号作戦、日米決戦は相ついでフランス、日本の敗北を来た
し、この日から一次、二次印度支那戦争、サイゴン陥落
（一九七五・四・三〇）まで、実に三十年に及ぶ「血みど
ろの民族的試練の中から」ベトナムが建設される。

広島・長崎に原爆が投下されソ連が参戦した翌月、ジャ
ングルではホー・チミン政府「ベトナム民主共和国」が誕

生した。

印度支那戦争が始まる。山を下ったベトナムは鞭声肅々
紅河川を渡り平地を制し、ディエンビエンフーで、再び植
民地回復をねらうフランス軍と対決して勝利し、北ベトナ
ムを解放する（ジュネーブ協定、一九五四・七・二十一）
この協定は仏印を南北十七度線で分け、第二次ベトナム戦
争の元を作った。試練は更に続く。

ベトナムを愛する志士達は、変転極まりない軍事状況に
苦悩呻吟する。日本は敗れた。安南工作の主体「安機関」
は行方不明（一九四五・四月解散）、日本軍の降伏帰還の
支柱は失われた。祖国日本再建のため帰国すべきか。ベト
ナム独立のために残るべきか。「越南帝国」（一九四九・六
月、フランスが建てたパオ・ダイ政府）のために共産ベト
ミンと戦うのも、ベトナムと協力して、再び宗主国をねら
うフランスと戦うのも、国府軍に代えて共産軍と戦うのも
残留兵を支えたものは唯一「越南独立」であった。フランス
は早くも九月にはベトナム再侵略、白人のアジア橋頭堡確
保の軍を大挙してサイゴンに送ってきた。

「越南を愛する者達」が、弱きを助けて、往時を夢見る
フランスに対して独立戦争に組したのも宣なること、忠勇
を旨とする男子の本懐であった筈である。
戦いの世に、昨日の盟友は今日の仇敵。逆亦真なり。

腹背の敵に囲まれて、進むも死、退くも死。今随所に残
るベトナムに参加した日本人「新ベトナム人（ニヤット）」
の墓は、勝者は語らず、敗者は声無く、無名苔むす屍と悲
しく望郷の風雨に打たれている。

協定は破られるためにあるもの。ジュネーブ協定も東の
間、親米ゴ・ディンディエム南ベトナム政権を榎入れする
アメリカとその同盟軍百万と、ラオス、カンボジアを巻き
込んだ全印度支那人民の対決は、ようやく一九七五年四月
三十日、サイゴン陥落によって幕を閉じた。これより先、

一九五〇年一月、英領インドは独立した。

一九五六年二月、蘭領インドネシアは独立した。

一九七五年四月、仏領西貢陥落して三国は独立した。

世界地図から「英領」「蘭領」「仏領」の語が消え、大川
先生近世欧羅巴植民史の鉄壁を誇った『政治的には帝国主
義の勝利、経済的には其の資本主義の昂潮、人種的には白
人世界制覇』は終わりをとげた。

寮生六名がこの地に若き身の花咲く間もあらず英霊と眠
っている。原田、田村、杉野、城島、伊藤（鉄）、佐藤
（正）の御霊よ。常しえに安らかなれ。



「ここに研究所ありき」
今に残る唯一の研究所跡の瓦一片（加藤健四郎所蔵）

七、解散

卒業生の派遣計画通りの実施は戦争開始により差当り不可能となったが、寮生の採用、派遣計画、教育は、その先のアジアの独立復興を目指して変わらず続けられた。大川先生は研究所設立に大きな二つの目的をもっていた。その一つは調査報告であって、その第二は現地に一人でもいいから心の友を持ち、真の日本人を現地の人に知らせることであった。

日常生活・訓練は、この二つの目的に集中されていた。

「満鉄は国家なり」「満鉄の頭脳は調査局にあり」と言われた。大川先生は調査局を創設し、二千人を越す俊才を集めて、その頂点に立っていた。調査研究は英米に比べても遜色はなかった。

第二の目的は、日本国内嚆矢の事業であり、勿論米英にはあり得ない世界に通ずる教育の根本でもあった。大川教育の、そして瑞光寮の魂であった。各期二十名、十年で二百名、更に十年四百名の青年がアジア復興の調査と友人造りに邁進する筈であった。

大東亜戦争敗戦によって海外からは全員引揚げ、後には何にも残らなかった。

満鉄は霧散し、先生は囹圄の身となる。

昭和二十年五月二十四日、二十五日の東京大空襲によって、瑞光寮は焼失した。御真影も燃えた。書類は灰になっても印字がはっきりと読めたが、風に流されて散っていった。(1・18)

大川先生、昭和二十年八月十五日 水、日記

「わが四十年の興亜の努力も水泡に帰す」

一九五七年十月十日、大川先生の所に、インドのジャワハルラル・ネール首相から急使が届いた。

「十月十三日日曜の午前九時から九時十五分まで喜んで貴下と会見したいから、迎賓館の応接間に御出下さい」と。

この時先生は病重く、印度独立に辛酸をなめた両雄は遂に相見えることはなかった。先生はその二ヶ月後に他界される。

太平洋戦争はアメリカが勝った。大日本帝国は負けた。

大東亜戦争は印度が勝った。大英帝国は破れた。アジア独立復興は新しい世界を生みつつあった。

EMBASSY OF INDIA IN JAPAN
TOKYO

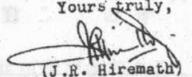
9th October, 1957.

Dear Sir,

I am to inform you that ~~our~~ Prime Minister, Pandit Jawaharlal Nehru, will be glad to meet you between 9 and 9-15 a.m. on Sunday, the 13th October, 1957. You are, therefore, requested to come to the Reception Room of the Geihinkan State Guest House by 8-50 a.m. on that morning.

With kind regards,

Yours truly,


J.R. Hiramath
Third Secretary.

Dr. Shumei Onkawa,
Nakatsu-mura, Aiko-gun,
Nakatsu, Kanagawa-ku,
Tokyo.

ON INDIA GOVERNMENT SERVICE

Dr. Shumei Onkawa,
Nakatsu-mura,
Aiko-gun, Nakatsu,
Kanagawa-ken,
Tokyo.

EMBASSY OF INDIA IN JAPAN
TOKYO

インド大使館からの招待状
(昭和32年10月9日付)

解散通知

拜啓 此度國情急変のため政府の要請により十月十五日を以て本研究所を解散閉鎖するの止むなき事態に立ち及び候事を御通知申上候
 貴君は渡南以來邦國永遠の念慮安泰の爲に御風雨詠意奮闘を続けられしにも不測の事起り御心を折せし其心惜まざる時轉た感傷無量に御座候
 貴君は遠からず胸に憂憤を充てて山に復歸せらるること、洞窟候が復員後は本研究所に於て精進せられし瑞光の輝きを猶加工にも發輝して日本復興のためは精進せられんことを衷心より冀求する次第に御座候
 尚本所解散に就て貴君の慰勞金として金五千五百圓也
 山本之男 殿 宛御送金の工係管方御依頼申上置候間御受納被下意候
 昭和二十一年十月十五日
 東亞經濟調査局附屬研究所
 所長 大山由明
 敬具

山本啓市 跋



懐 つはもの共が学び舎のあと。(平.9.10.18)



歓 二期生卒業前 三期生と共に多摩川にて(昭16.4.2)
 前列左から2人目村田、4人目中川、6人目伊藤(啓)

その頃、バンコクの抑留所に居た山本(二期生)の父から研究所へこんな返事を送っている。

肅啓 秋晴快適の候愈々御清祥の段大慶に奉候陳者今般御鄭重なる御状に接し詢に難有奉深謝候這般国情急変に伴ひ由緒ある貴所使命重大なるに惜しくも解散のやむなきに至りたるは甚だ遺憾千万に奉存候 愚息哲郎事貴所先生各位の御懇篤なる御薫陶を辱ふし漸く一身を捧げて国家に微力を致す意志を固め発足したるのみにて聊も為す事なく突如挫折の悲運に際会せるは残念至極に御座候 只々今後は国情に順応し新生日本の建設の途に邁進し御厚恩の万一にも報る意図と被存知候間 今一層御鞭撻御指導を賜り度偏に御願申上候
 尚此度慰勞金御恵与被下殉に難有拜受仕候 当人帰還の暁には御厚志の存する処特に申含めて伝達致候
 敬具

〔受章者〕 (みんなみ記載の方のみ)

- 勲一等 瑞宝章 稲嶺 一郎
- サハメトレイ大勲章 稲嶺 一郎
- カンボジア王国国際貢献功労章
- 勲二等 旭日重光章 高瀬 侍郎
- 勲三等 旭日中綬章 蒲生 禮一
- 勲四等 旭日小綬章 小林 隆
- 勲五等 瑞宝章 白柳 豊
- 黄綬褒章 富田 士生
- 勲八等 白色桐葉章 城島 忠一
- 勲八等 白色桐葉章 川口 敏
- 勲功拔群 二階級特進 原田 俊明
- 特攻教官として叙勲辞退 村田勇馬

受章者の功績をたたえ感謝いたします。



稲嶺氏



小林氏



富田氏



白柳氏



蒲生氏



高瀬氏

八、結 び

『興亜の努力四十年』

大川周明日記

『昭和二十年八月十五日 水』

わが四十年の興亜の努力も水泡に帰す。』
 「夏の日には照り輝けど負けいくさ」

この時(一九四五年)、先生は五十九歳、四十年前(一九〇五年)は熊本五校に入学した年で、北に日露戦争勃発、南に蘭領東印度が成立している。二十世紀動乱の扉が開かれようとしていた。

先生がコットンの「新印度」を読むのは、それから八年後の一九一三年、更にポール・リシャール夫妻が来日して親交を結ぶのは、その三年後の一九一六年であった。先生は、果敢にも一変して印度哲学求道のお坊さん志向から「復興アジアを生命とする一戦士」に挺身する。

先生は「双刃の剣」を宣言する。「日本改造」と「民族解放」の戦士でなければならぬ。

〔先生の日本改造〕

外見的、時間的に見ると、「日本改造」は猶存社結成(一九一九)から、五・一五仮出所(一九三七)までの十八年。その後の終戦までの八年が「民族解放」となる。豊葦原の瑞穂の国に米騒動が起こり、腐敗した政党政治に対する不満が凝固した猶存社は、行地社、神武会へと発展していくが、先生の五・一五連座で解散消滅する。禁固五年、『近世欧羅巴植民史』を完成し出所する。

先生の著書、全集七巻七千頁のうち五千頁は

「今日の急務は有色民族を解放し」、或いは「欧羅巴が亜細亜を正当なる所有者に返却せざる限り東西戦は運命的である。」「すでに世界戦(第一次)の神意は、革命ヨーロッパと復興アジアを生み落とした。新しい世界の黎明が来た」と警鐘して、「民族解放」を宣言する。

これらの警鐘がいかに白人様を脅かしたかは、東京裁判に出されたヘルム尋問官報告書(註)を見よう。

「この人物が日本を世界征服の道へ推し進めるために、全生涯を捧げたことは極めて明白である」とし、超国家主義的右翼団体を結成し、政府転覆の陰謀をめぐらし、満州事変を計画し、「また一九三八年から四五年までスパイ学校を直接経営し、アジア中に配置されるスパイの訓練を行

った。彼は最後の瞬間までこの戦争を望まず、一九四〇年に日本がもつと準備を整える時まで戦争を引き延ばそうとした。彼は『米英東亜侵略史』と題する本を出版し、英米に戦争の責任があるとし、日本の侵略を防衛であると学問的試みをなした。」

(註) ヘルム報告書については 大塚健洋『大川周明』による。

猶存社の綱領は、「日本人の精神改造、日本精神への復帰を目的とした有識者層への啓蒙運動であった。」ヘルムはそれを「扇動的書物と講演」によって「超国家主義的右翼団体を結成し、侵略と膨張の長い長い血なまぐさい旅路を歩み始め」「大東亜戦争で頂点に達した」と言う。

大川先生は軍人ではない。目標は「有色民族の解放」である。この目標は、アジア並びに世界の政治、軍事を変えなければ達成しない。ここに、「有色民族を解放し、日本をその大任にふさわしい国家とする」大川先生の日本改造と、南からの米英の軍縮圧迫、北からの中国ソ聯の大陸赤化の脅威に対して、為すこと無しの政府に対する軍部の日本改造が連繫協力しても不思議ではない。

〔先生の对中国政策〕

大川先生の『亜細亜建設者』には「孫文・蒋介石の志業」

〔先生と印度〕

ガンディは「日本人に対する警告」において、「日本人の関心は無用の節介」と言った。

先生は、

「大東亜戦における日本の勝利が、印度独立のために千載一遇の好機たるべきを信じ古の積尊より受けたる最上の返礼として、独立のために能くするための援助をせんとする以外他意はない」と答えている。

「乍併イギリスがガンディの前に兜を脱ぐことは絶対にない」として、「印度の剣」チャンドラ・ボースの印度国民軍と共に塾生をアラカンの山中に向かわせた。

〔先生とイスラム〕

「回教運動が近き将来の世界政局に重大なる役割を勤む可きことを確信する」

「復興アジアの前衛たるべき回教連盟が、その怖るべき姿を現すべきことは最早万一の僥倖に非ず、寧ろ理由ある期待となった。」

先生は隔年毎に塾生二十名を「正直と親切」を信条に砂漠の地に向かわせるべく教育した。

が入っていない。その理由は、「非は支那側に在りとするも、殆ど五年に垂んとする必死の努力を以つてして、尚且其非を改めさせ得ぬとすれば、日本は深刻に反省すべきではないか」にあった。(新亜細亜小論)

日本は深刻に明治・日清戦争以来の対支政策を反省すべきとし、支那事変に反対した。

先生は、汪兆銘政権は日本の操り人形である。蒋介石は「後数年で日本国内が崩壊する故、たとえ外国の援助がなくとも、断然対日戦は続けると言っている。一休物事の争いはその相手と交渉せねば決着するものではない。日本にそれだけの政治家がない」事を嘆いていた(6・37)

出所した先生は、支那派遣軍総司令官松井大將を説得して南京攻略を一週間も中止させたこと、近衛首相に「支那事変対策」を建白したこと、東条(上等兵)陸相に、満州国承認を条件として、一兵残さず、軍を大陸から引揚げるという大胆な和平案を蒋介石に示して支那事変を解決しようとして献策したこと等々、事変解決に苦心していた。

有色民族解放、復興アジアをかざす先生にとつて、米英に追隨してアジアの弱い者いじめをすることは許されなかった。日本は支那から孔孟の、印度から仏の教えをもらつて、「三国」となして来た歴史を持つている。日支三千年の友誼に逆くことはできない。

〔先生と日米戦争〕

「いま東洋と西洋とは、それぞれの路を歩き尽くした。世界史は両者が相結ばねばならぬことを明示している。日本と米國は相戦わねばならぬ運命にある」(一九二五年『亜細亜・欧羅巴・日本』)

「されば一八九八年は、世界史的に深甚なる意義を有するものである。何となれば」ドイツが海陸に英国と争う大政策をたて、米國がスペインに勝つて太平洋に進出し、インド洋上における英独争覇戦、太平洋における日米争覇戦の端緒が開かれたが故である。(『復興亜細亜の諸問題』)この先生の提言は、真珠湾の四十年前の先見であり、先生の文明史論、歴史論の導く結論であった。

先生は、一九三九年、ネバダ州に汎太平洋通商航海会社を設立し、アメリカからガソリン六〇万バレル、中国からタングステン二千トンのパートナー取引を進めた。(7・31、10・6)

「この仕事の第一段階はすでに九九%は成就して来月中旬には実現し、否応なく日本を動かす力として認めさせることになるが、第二段階の支那工作は、多分来年三月を見込みに完成することになる。それが成功した暁には、日本が現在の窮地を脱して大躍進をなし、世界史に偉大なる足跡を印す第一歩となるであろう」(6・34)

先生の日米通商は支那事変を解決し、日本の大躍進の第一歩となる筈であったが、「わが政府部内の対立、消極的な事務官僚」によって頓挫し、日米戦争回避もならなかった。

〔大川塾はスパイ学校ではない〕

大川塾には満鉄、外務省、参謀本部の三者から毎月各五万円ずつ資金が出ていた。設立資金三〇万円は外務省からと聞いている。

「スパイ学校」は、田中隆吉氏が東京裁判の尋問で述べているが、或いは参謀本部の意向であったかも知れない。

外務省は現地事情調査要員の養成を、そして大川先生ご自身は「正直と親切」をもって「現地に本当の友だちを創って日本とアジアを結ぶ人材をつくる」場所であった。

塾の講師、諸先生は歴史、文化、文明、宗教、語学、政治学等々、当代超一流の高い人格、自由なお考え、豊かな経験をお持ちの方々ばかりであった。

興亜の大川先生、印度・イスラム文化・語学の大家蒲生先生、英語は白井・佛語は丸山両先生の渺茫たる文学語学、雅楽の中島先生、飛燕の植芝流、静かなる林の如き尾張徳川の礼儀作法、傍若世界に友有りの茅原先生、国技大相撲の式守伊之助翁、異色軍人の田中講師、枚挙にいとまない

諸先生にいただいた教えに、満腔の感謝の意を表したい。

大川先生は、言われている。

「真の意味に於けるアジアの問題は、アジアが自由を得たる時に始まる」(諸問題一ノ一)

この言葉から八十年が過ぎた今日、諸先生、先輩諸兄への御恩の万分の一にも御礼に、この「みんなみ総集編」を、捧げ、お届けいたします。

二〇〇六年盛夏

新アジア

太平洋戦争は終わった。

西洋を代表するのはアメリカである。パチカンを頂点としたキリスト教西洋は、宗教改革、或いは産業革命、フランス革命、戦争とルネサンスを繰り返して、ヴェルサイユ以降を新大陸国家アメリカに託した。

東洋では、日本は鎖国孤立独善、中国は内外分裂対立、印度は対英独立闘争の時代であった。

太平洋戦争終わってアジアが独立した二十一世紀は日米両国は新太平洋文明を創る使命を、歴史によって課せられている。

ガンジーは「真理護持」によって新薄伽梵印度を復興し、東にアジア、西にイスラムと鼎立融和して新印度洋文明を

創造する。

イスラムは広大なアジア、アフリカを解放した。アジアは自由を得た。多岐多様な民族的・歴史的要素を内蔵しているイスラムは、東洋と西洋の掛橋となる使命を過去幾度か経て来ている。アジア建設者の夢は実現されつつある。アジアを代表するもう一つの大国・中国は復興アジアにどんな役割を果たすのだろうか。

復興アジアは今始まったばかりである。

朝日は昇る 東に

睦び交して 栄ゆかん

西東

あ、永劫の歩み哉 (寮歌第七節)



満鉄東亜経済調査局「新亜細亞」(昭15、1月、6月、昭16年1月号)

あとがき

この書は、全ての原稿を「みんなみ」から集めた。戦時下、使命にかけた青年達の赤裸々な記録である。

研究所は「正直親切」をモットーとし、現地に一人でも二人でも真の友を作れと言われ、十年勤めて更に現地に留まる者には、金壱万円也の退職金を支給されることになっていた。その先の事は何も言われていなかったが、日米開戦直前に大川先生は汎太平洋通商航海会社を設立した。この会社は、日米戦争回避を直接の目的としていたが、やがては汎アジア通商会社に発展するものであったかも知れない。大川先生は『近世欧羅巴植民史』『特許植民会社制度』の大家である。印度洋に汎アジア通商会社の船隊を夢見ていたかも知れない。

白人の世界制覇、ヨーロッパの繁栄は、バスコダ・ガマがカリカットに侵略の投錨をした日に始まった。アジアの復興は、カリカット港を見おろす丘に、「正直親切」の旗が立った時に始まる筈であった。その日、卒業生はアジア各地の通商会社の支店長さんになっていたかも知れない。

未だ帰らざる友を偲ぶ

齋藤正

(註) 五期生七人組 (田中 寛、城島忠一、齋藤 正、杉野元一、伊藤鉄三、宮島 宏、佐藤正二)
—— 仏印派遣軍司令部 (信七九五〇部隊) で「大川塾七人組」と呼ばれていた七人組は、昭和十九年五月門司港出港、七月サイゴン着。参謀部に申告。翌年現地応召、司令部のハノイ移動により熾烈麻の如き前線に投じられた。

「昭和二十年八月の終戦と共にハイフォン郊外のドーン地区に司令部の移動と共に七人組全員ドーン着。帰国の迎への船の到着を待つ中、城島コレラの病魔に犯される。何はともあれ助けなければならぬの思ひにて周囲の環境穏便ならざるもとにかくハイフォン陸軍病院に搬送、薬品払底の中、出来る限りの投与を試みたが薬石効なく数日の入院にて十一月九日不帰の人となる。悲しい哉。多数の丁重なる人によるダビに伏した。

敗戦により任務らしい任務としては皆無で、日本に帰れるのは何日頃かなとか、帰国したら如何に生活するかなどの将来計画などがいつも頭の中に疼いていた。そして折角訪れた現地であるし今少し残留し自由の身となり安

しかし、現実には、ようやく派遣先に送られたのは一期生だけで、それも一年僅かで、開戦によって強制送還されたため、アジアへの足掛かりを全く失った。二期生以後はバコンク、サイゴンに待機し、或いは占領地軍政に傾倒した。ビルマ独立義勇軍、印度国民軍に配属されて、ラングーン、インパール、アラカンに進出した。仏印では明号作戦、対ベトナム作戦、安南独立に東奔西走した。アジアから英仏の旗がひき抜かれようとして来た。

昭和十九年には徴兵検査、全員合格、帝国陸軍二等兵・決意の一ツ星となったが、戦い利あらず終戦を迎えた。時を移さず、「大川塾全員集合」、そして戦犯容疑者扱い、地獄の一丁目・チャンギー刑務所にも何人か送られたが、全員無罪、万恨を残して祖国の土を踏んだ。

ここに、安南独立のために身を挺して馳せ参じた、大川塾最後の卒業五期生を偲ぶ一文を掲げて「あとがき」とします。

南の独立の為に尽くしたいとの思ひが湧いてきたのも一つの流れであったが、軍当局としては帰国第一を強く指導しておった。

しかしニューデリーからの日本語放送によると日本国内の状況は天皇退位、食料不足による多数の餓死者が上野の山に山となし、外地よりの引揚者は極力拒絶との風潮が流れていると毎日のように報道しており、それならば帰国せず残留した方がよいではないかと思ふ人も少なからず存在している事も事実である。杉野、伊藤、佐藤の三名が悲壮な決意をしたのも領ける事である様に思ふ。此の三名の現地生死岩頭の足跡はみんなみ三十一号、三十三号に詳細に亘り記載されているので割愛するが、祖国を遠く離れて幾千里、南十字星を仰ぎながら安南の為に勇躍している姿を夢みることもある。

平成十七年六月五日 高野山別格本山にて五期生会を開いた事がある。場所が場所だけに一応追悼の形をとっているが、本心は何処かで形を変えて活躍している様に頻りに思えるので彼等への激励を意図するセレモニーを行ったと思っている。導師に「未だ帰らざる」と云ふ行を読経の中に強調して発言願いたいと事前に御願した次第である。

合掌

平成十八年五月十二日

南方会

會報

第一號

東京品川区大崎4ノ231
発行所 南方会
編集者 金沢 伍郎

発刊のことば

大川 周 明

東南並に西南アジアの国々の実状を知り、兼て真実の日本を其等の国々に知らせ、全アジアの団結と向上とを實現するた
めに始められた五等の事業は、敗戦のために頓挫してしまつた。併し此事の必要は、文化的にも、政治的にも、また経済的にも、戦後一層その必要の度を加へて来た。因縁によつて芳盟を契り、親しく南方諸国に赴いて此の目的のために献身した同志が、茲に『南方会』を組織し、また『みんなみ』を刊行せんとするは設ひ事業は頓挫しても、興亜の志だけは堅く守り往



希くは同志互に動靜を報じて友愛の情を懇ろにし、異株同心の實を挙げて、愈々其志を堅くせよ。

南方會

大川周明日記

昭和廿八年二月十五日

天晴 温暖

十一時のバスにて大塚・金澤両君来訪。

今度研究所生連絡のため会を作り、小冊を發

行すところ、今、金沢君其他に當るとのこ

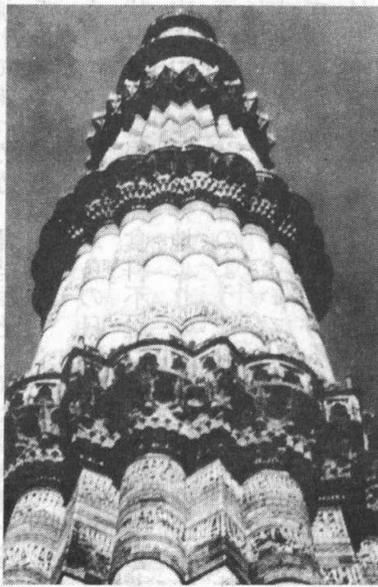
と。会名「南方会」、会誌「みんなみ」と命名す

と。両君之持参のバスにて帰り、そのバスにて

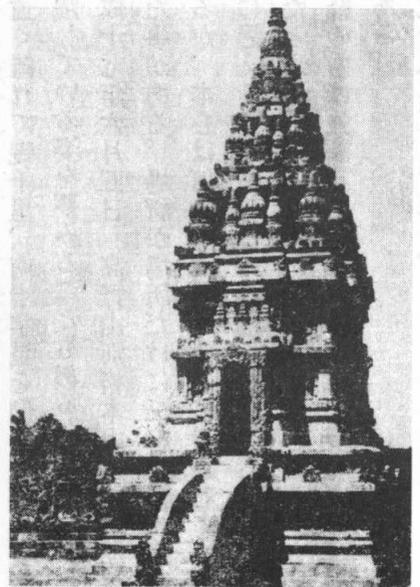
珍らしく秋定鶴之君来訪、五時半帰る。

(博文館日記、昭和廿八年常用日記)

(題字は大川先生筆)



クドブミナー (山本提供)



プランバナシ遺蹟 (會報第五号より)

南方會會則 (22・48)

第一条 (名称)

本会は南方會と称する。

第二条 (所在地)

本会は本部を東京都内に置く。

第三条 (目的)

本会は会員相互の親睦と研鑽を図ることを目的とする。

第四条 (会員)

本会は東亜経済調査局附属研究所の卒業生と、その関係者をもって組織する。

第五条 (事業)

本会は左の事業を行う。

- 1 会誌「みんなみ」の発行
- 2 アジア全域の調査研究
- 3 その他、目的に必要な事業

第六条 (役員)

本会に代表幹事一名と、幹事若干名を置く。

幹事は総会において選出する。

役員は任期は二年とし、再選を妨げない。

第七条 (総会)

本会は年一回の定期総会を開催し、左の事項を行う。

- 1 事業及び会計報告の承認
- 2 事業計画及び予算の承認
- 3 会則の変更
- 4 役員の変更

第八条 (会計)

本会は会費及び寄付金によって運営する。
会費の額は別に定める。

本会の会計は幹事のうち一名が専任する。

会計年度は毎年五月一日に始まり、翌四月三十日までとする。

第九条 (附則)

本会則は昭和二十八年五月三日制定、同五十三年八月二十六日改定、平成三年十月二十六日改定して施行する。

南方會名簿

(第3版・昭和59年8月31日現在)



(名簿は省略)

(昭54.5.28. 住田国際印刷製の表紙)

二、懇親旅行会

毎年一回懇親旅行会を、東京・京都を中心に開催し、各地に名所、旧蹟、神社仏閣を訪ね、或いは談論風発、往事を回顧し、物故者供養、御家族訪問等、その親交を深めた。酒田に「大川周明顕彰会」が発会されてからは（昭五七・一〇・一七）、同会と相互に交流し、相携えて会の発展に協力し、大川家はじめ地元の方々の多大な御好意に浴する機会を得た。

〔懇親会開催地〕

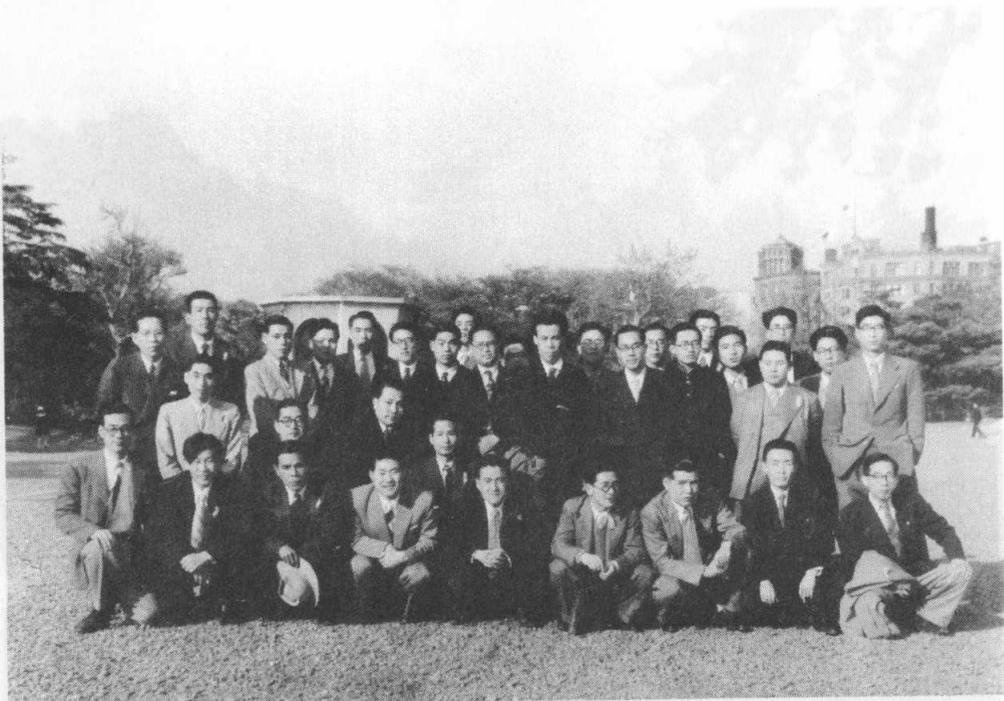
- (○) 回数、(／) 年月、 場所、 ※次頁以降に写真
- ① 設立 (28/5) ※東京・日比谷松本楼
 ② (42/6) 湯河原・遠州屋 ③ (43/6) ※京都・楠庄 ④ (44/6) ※岐阜・多賀ホテル(鵜飼の夕べ)
 ⑤ (45/8) 天草プリンス・ホテル ⑥ (46/8) ※「目黒不動尊龍泉寺慰霊祭」湯河原・山翠楼 ⑦ (47/5) ※酒田・萬国屋 ⑧ (48/9) ※奈良・魚佐旅館
 ⑨ (49/5) 葉山・マリナーホテル ⑩ (50/5) 浜松・エンパイヤ ⑪ (51/8) 湯河原・山翠楼 ⑫ (52/8) 「土浦大川邸・大川夫人米寿祝」※筑波山・江戸屋・水戸借楽園 ⑬ (53/8) 大津・あみ定(比叡山・京都) ⑭ (54/8) 「目黒不動尊大川先生三回忌」湯

- 河原・山翠楼 ⑮ (55/7) 大阪パーク・ホテル ⑯ (56/9) 三河三谷・ふきぬき ⑰ (57/10) 「大川先生二十五年祭」酒田・サンルート ⑱ (58/9) 京都嵐山ホテル ⑲ (59/10) ※鹿兒島楽山荘 ⑳ (60/9) 「慰霊祭」岐阜・一八楼 ㉑ (61/10) 「生誕百年祭」酒田・亀屋ホテル ㉒ (62/10) 浦安・サンルート ㉓ (63/9) 伊勢・鳥羽保養センター ㉔ (平元/11) ※「目黒不動尊 先生三十三回、夫人十三回忌法要」湯河原・遠州屋 ㉕ (2/10) 京都・弥生会館 ㉖ (3/10) 京都・弥生会館 ㉗ (4/10) 伊東・いな葉 ㉘ (5/10) 宝塚・ワシントン ㉙ (6/10) 箱根湯本 ㉚ (7/10) 「知恩院慰霊祭」京都・楠庄 ㉛ (8/10) ※「生誕百年祭」酒田・リッチホテル ㉜ (9/10) ※東京・目黒雅叙園 ㉝ (10/10) ※京都・弥生会館

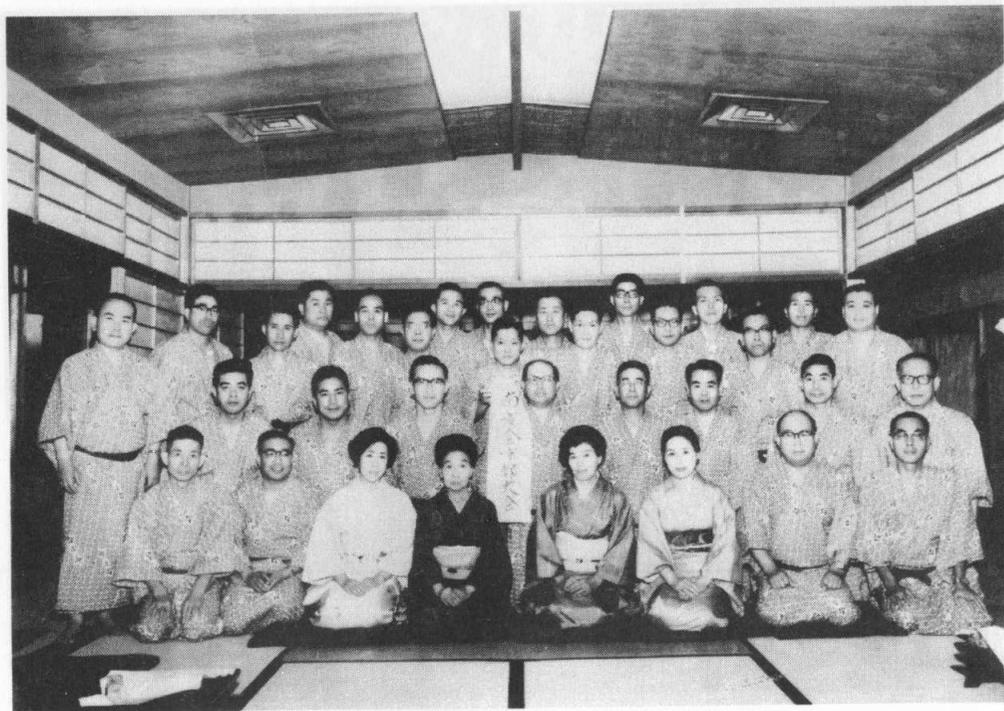
次の総会の写真は「みんなみ」に掲載されています。

- ⑯ 酒田 (8・17) ⑰ 岐阜 (14・32) ⑱ 酒田 (16・18) ⑲ 浦安 (18・1) ⑳ 湯河原 (21・2) ㉑ 京都 (22・47) ㉒ 京都 (27・1、25)

〔写真〕



南方会設立総会 日比谷公園にて (昭28.5.3)



第2回 京都・楠荘 (昭43.6.8)



第7回 奈良歴史探訪 (昭48.9.8)



第11回 筑波神社参拝 (昭52.8.25)



第3回 岐阜・鶯飼の夕べ (昭44.6.7)



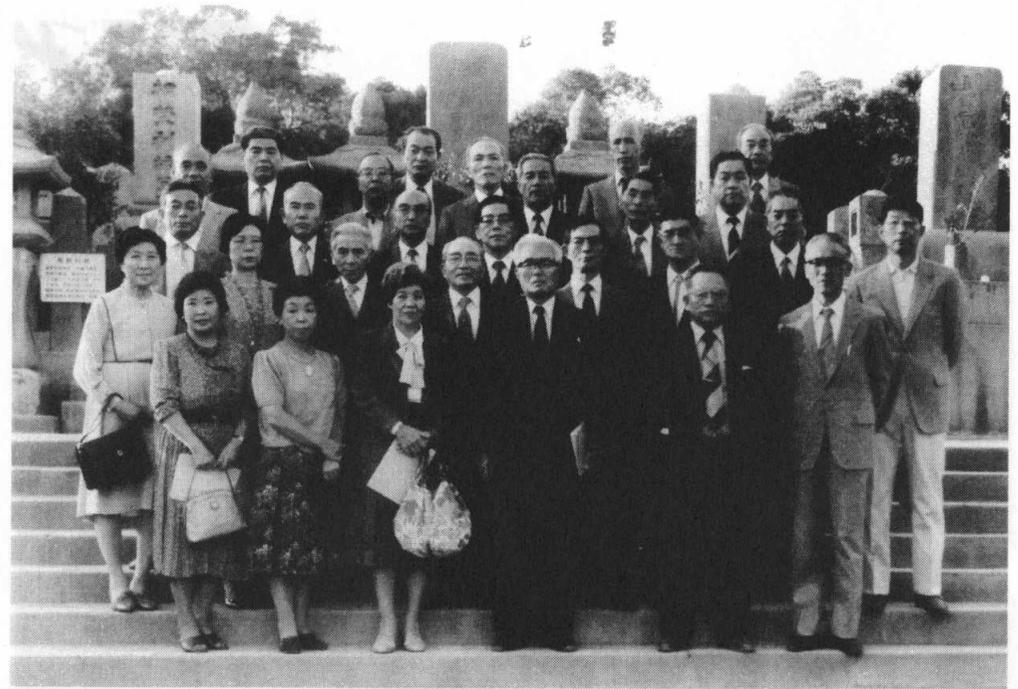
第6回 酒田・温海温泉万国屋 (昭47.5.13)



第31回 東京目黒雅叙園 (平9.10.17)



第32回 京都弥生会館 (平10.10.16)



第18回 鹿児島・南洲翁墓参 (昭59.10.13)



第30回 大川周明博士生誕百年祭 リッチホテル酒田 (平8.10.12)

三、慰霊祭

一、大川先生葬儀

昭和三十三年二月二十四日 逝去（七十二歳）
昭和三十三年二月十五日 青山斎場葬儀
戒名 永照院殿禪海周明大居士

序

昨年十二月二十四日神奈川県中津の自宅において、七十才の生涯をもつて長逝された故大川先生の本葬儀並に告別式は二月十五日東京の青山斎場において、朝野の同志、門下生等約八百有余名が参列して盛大に挙行された。

この日の青山墓地は春まだ遠きを思わせる寒風が舞ってはいたが、陽光は暖く微笑み故人を追悼するかのようであった。

斎場の本堂、正面祭壇には先生の遺骨が安置され、等身大の先生の写真がその前に立掛けられて、更に「故大川周明之霊」と大書された白布がたれている。すでに山海の幸が供えられて葬儀の準備は万端をおわつていた。

甲 詞

無常の朔風老樹に吹いて、中津河畔閑寂の処、旧臘二十四日、先生遂に不帰の客となりたまふ。悲傷尽きせぬ門下の子等、此処に相集ひ、涕淚滂沱して在りし日の先生を偲びつつ、幽明を距てて心裡に語り、追慕の情また限りなし。既にして先生、^{ヨクワイ}齡は古稀を過ぎ、人生の行路嶮難を極めしとは云へ、遂にその絶頂を踏破され夙に天命順耳の悟道に入り、無上安樂の法門に遊ばれて、今往生樂土の日に、淡々自然のままに彼岸へ帰らる。此処に人智の至深、正に仙境を現じ、天地の悠久に合する真実を見る思ひにまた感慨量り知れぬものがあります。

さはれ先生の風貌高姿、もはや拝するによしなく、その至言卓説今や尋ぬるに術なしとは云へ、先生の思想は不磨の哲理を秘めて、幾多の名著に凝結し、烈しく次代の興起を促すべく、その業績は不拔の真理に拠つて日本の歴史に刻まれ、見事に後世の史眼に堪ゆべし。されば先生の死を悼む心を有為の幾縁として、奮起邁往の誓ひを新たにすべきものと、道理甚だ分明にして我等胸中深く期する処ありとは云へ、理性の外なる心情は、我等が魂の父なる人を失ひたることとて、虚無寥々として耐え得ぬ思い、誠に筆舌

予定より早く十二時四十五分、喪主大川兼子夫人を始め葬儀関係者の着席と同時に、進行役の金内庸夫氏の司会をもつて、神官の厳かな奏樂の裡に祭主が祭壇の前進み出て忍び言葉を奏上、終るや葬儀委員長徳川義親公の辞あり、続いて友人代表岡村寧次元大將が生ける友に向つて語るが如く切々の弔辞を述べられ、安岡正篤氏の弔辞のあと、瑞光寮卒業生一同を代表して二期生の小林隆君が、一期生西川寛生の作になる弔辞を朗読した。

更に続いて影山正治氏が、故人を偲ぶ和歌三首を朗詠し、其他中国人代表蔣君輝氏、インド人代表 S・K・モズムダル氏等の弔辞が続いた。かくて午後二時、祭壇は告別式に改められ、参列した八百有余人が交々に「玉ぐし」を棺前に捧げて退出し午後三時過ぎ終了した。

其後、当日参集した瑞光寮卒業生約二十五名はこの日を記念して虎ノ門会館に集り、六時頃から菅、椋木、緒方、渡部氏等を囲んで二十四名が「大川先生を偲ぶ会」を開催した。その結果「大川先生顕彰会」を吾々の間で作り、近き将来において大川先生の偉業を顕彰することに決定致しました。

には述べ難く、加ふるに不肖不頼の自身を省みては、先生の生前に仕えざりし無能と、その蘊蓄を学び尽さざりし菲才を悔い、懺愧の悲涙を呑むこと正に痛烈一入なるものがあります。

曾つて先生が一貫せる知行の悲願、一つは祖国の改造を指し、一つはアジアの復興を唱え兩者不離にして、日本の発展を図ることは、今敗戦の悲運の下に民族的試練の坩堝の中にある日本の現実にあつて、なお堂々不変の進路と云ふべく、先生が在世の時、好んで用ひられた「設ひ劣機なりとも、己れの本然を尽すは、巧みに他の本然に倣ふに優る」との鉄則は、依然として我等の心奥に深く刻まれ、時に阿世の俗論、衆を頼んで明哲の正義を覆ふとも、一旦の不遇逆境は却つて飛躍の因なりと確信し、毅然として先生の志業に従ひ、所謂大乘アジア建設への一石たらむと覚悟するものであります。

一顧すれば昭和拾三年春四月、武蔵野の野趣なほ残る鷺の宮に、第一期二十名が草創の時より、敵火に焼かれし目黒台上、敗戦の日まで、先生の膝下に学びし者七十余人不幸にして戦中、異郷に骨を埋めし同志二十数名残りし我等戦後の混乱に処しては、時に世路の風雪に挫し、時に俗事の頽廢に墮し、一介の浮木となりて、危ふく大河の濁流に没し去らんとすること再三ならず、かかる失落の折こそ、



南方会代表小林隆氏 弔詞奉読



斎場にて南方会記念撮影

中津の静居に先生を訪ね平常茶話の片言に、脳中の疑惑を解き、無為閑談の隻句に胸底の屈託を払ひ、恰も大声を聞く如く、登高の勇氣と将来の希望を心に抱いて帰路につきしことなど、今更ながら限りなきなつかしさもて思ひ出さる。かくて星霜十年を経て、再び西南一道、アジアの地に東はインドシナ半島から西はアラビアの砂漠に至る間、先生門下の子等が各地に点々孤立しつつも、その遺業を伸べんものと、弛まぬ努力を続け、漸くにして新しい根を現地に張らんとする事実こそ、今先生の霊前に我等が唯一至上の供養とするものであります。

かくて前に逝ける友は、黄泉に打揃つて先生のみたまを迎へ、勇躍して三途を先駆すべく、在世の我等は更に結びを固く先生の遺志を魂に伝承し、誓つてその足跡に続かんとす。天上か地下かを知らず、先生の魂魄もしいまさば不肖の子等なれど何卒我等が誠意を聞こし給へ。何卒我等が向後を照覧あり給へ。

昭和三十三年二月十五日

東亜経済調査局附属研究所 卒業生一同



徳川義親公 弔詞

二、目黒不動尊龍泉寺法要

昭四十六年（一九七二）八月七日

（参加者）

大川夫人、稲嶺一郎、今里（アジア同志社代表）、
菅、椋木、宮前、計三十一名
法要墓参の後、湯河原山翠楼にて懇親会

昭五十四年八月二十五日

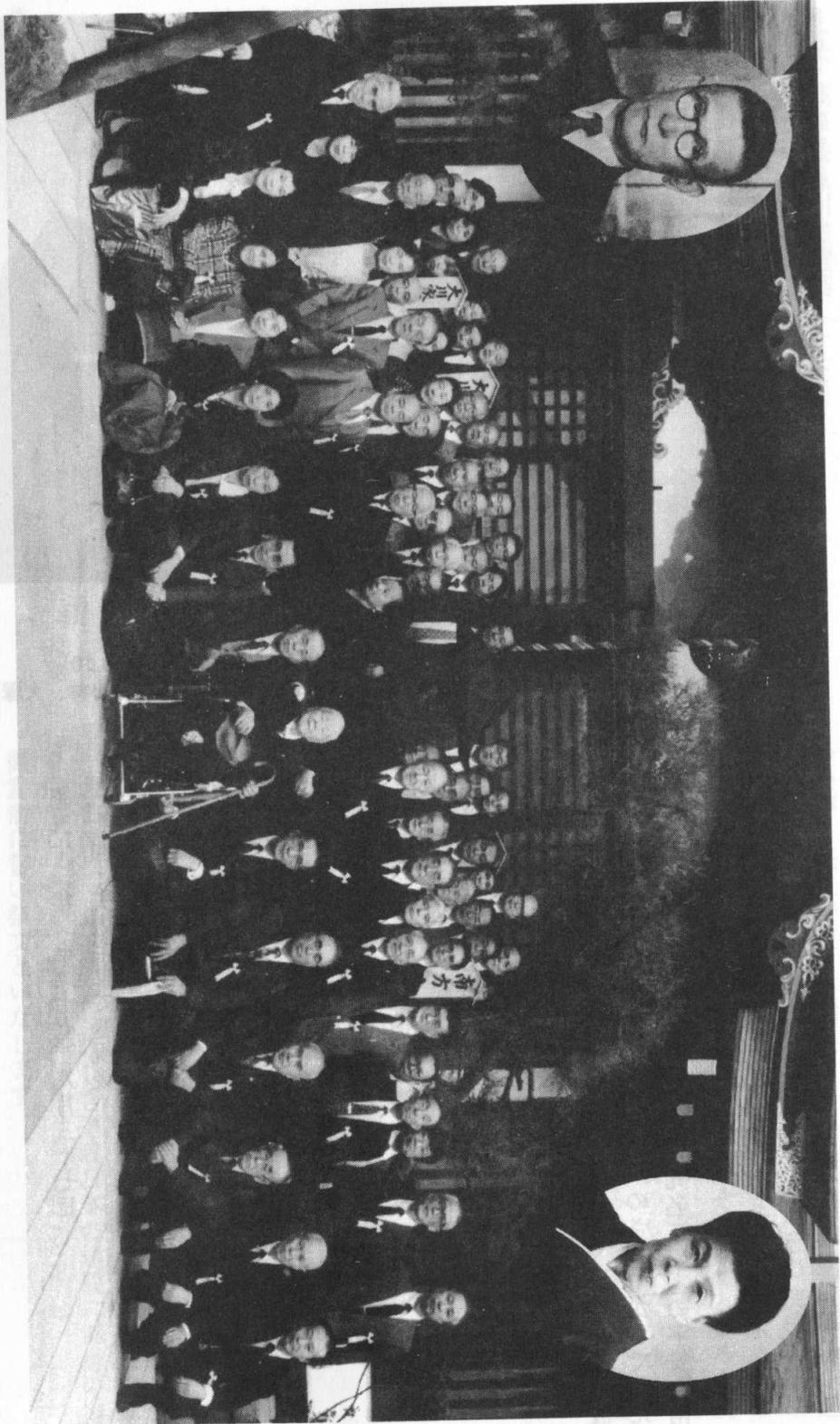
大川先生第二十三回忌法要墓参
菅、椋木、宮前、岩田、大川二郎、計二十六名
湯河原山翠楼にて懇親会

平成元年十一月十二日

大川先生第三十三回忌法要墓参
大川夫人十三回忌法要



目黒不動尊龍泉寺法要（昭46.8.7）



目黒不動尊33回忌、夫人13回忌法要（平・元・11・12）



古寺巡りの一駒 (昭43.6.10)
(左から) 山本、奥様、小林、大塚夫人



三、大川夫人米寿祝い

昭五十二年(一九七七)八月二十七日

土浦・夫人宅にて慶祝後

筑波神社参詣、江戸屋にて第十一回南方会懇親会

翌日、笠間・水戸偕楽園・将門歴史訪問コース

鹿島・香取・成田神社参拝コース

大川夫人

昭五十四年十一月一日死去(九十歳)

同月三日、御自宅で葬儀弔問

永祥院殿仁海兼名清大姉

四、鹿児島 南洲神社慰霊祭

昭五十九年(一九八四)十月十三日

維新回天の地、この日桜島の「煙はうすく」、錦江湾の波は静か、「万波不離水 百花立自根」のさわやかさでした。物故者(関係者三十九名、研究生十九名)の霊の平安を南洲神社に祈りました。

五、岐阜長良川慰霊祭(二八楼)

昭六〇年(一九八五)九月十四日

祭司 白柳 豊

祭 文

昭和六十年九月十四日 岐阜のこの地に 東亜経済調査局附属研究所同人 物故者の慰霊祭を挙行するに当り 謹んで大御名を称え奉ります

復興亜細亜と日本維新の原理を究明され その実践遂行のため 全生命を傾注された 大川周明先生を師と仰ぎ父と慕うもの 此処に集い 同門の先輩同志物故者の雄魂を弔い 在りし日の面影をしのび 遺志継承の誓願を新たに致します

ことに 大東亜戦争において 大川塾の使命を体しインド ビルマ ヴェトナム インドネシア等 独立義勇軍に身を投じ 彼の国の青年志士と辛苦を共にし亜細亜解放の人柱となり散華された

江里 繁命 庄子仁郎命 入谷寿義命 原田俊明命

柴田敦司命 本間博基命 池野光栄命 田村伊織命

佐藤正二命 城島忠一命 杉野元一命 伊藤鉄三命

川口 敏命 永井俊彦命

十四烈士の清純にして烈々たる英魂は長く後世に護持継承いたさねばならぬものであります

世界大戦の婦趨として 復興亜細亜によりヨーロッパの奴隷たりし亜細亜民族は夫々独立の光栄を復活するにいた

つたが 民生安定また国造りには依然として苦難の途を辿っている 一方革命ヨーロッパは 未だその抗争を続けその苦悩の中にあるも 我が国においては その求めるところの自由 その希うところの平等 その抱くところの友愛のヨーロッパ精神の 終戦と共に我が国に圧入される処となり 結果日本伝来の思想とは異質のものなるがゆえに 試行錯誤を繰り返しながら 幾多の歪みを持った社会構造を招来しているものの 嘗て先祖が 儒教 仏教 の将に 亜細亜の両極の思想 文化を摂取し 美事我がものとし 此によって自らを豊富深刻ならしめ一切の方向を与えた 雄渾無比の正しき理想 純乎たる日本精神が機運熟して 新しい力を帯びて 捲土重来し このヨーロッパの精神を 純化生成し 勇躍亜細亜の精神に融合統一させ 唯に亜細亜の道義に止まらず 世界的道義に進展確立する使命を日本が果さねばならぬことは明々白々であります

東亜経済調査局附属研究所は 昭和十三年五月十五日開設され 昭和二十年十月十五日閉鎖されました

この七ケ年の道縁でありました為 生存者は年ふるごとに減少するさだめであり 今春も板倉一己命 神逝りまして 実に痛恨に堪えません 今後も益々同志の結束を確固なるものとして 偉大な師のもとに研鑽し 涵養した初一念を行じ 脚下照顧 新しき道義日本の建設に渾身の力を尽くし 併せて世界に新しき道義を布くことを 御霊前に誓い祭文といたします

(みんなみ十四号二一九頁)

六、京都知恩院慰靈祭

追悼の辞

「首を回らせば五十有余年、人間の是非は一夢の中」と先哲の詩にありますが、国破れて、吾等が研究所も灰燼に帰し、凶南の志また挫折してより半世紀、顧みれば茫茫ただ徒に光陰の往くこと速きを嘆じ、吾等が無為と非才を愧ずるのみと申せます。さわれ「南方會」の名の下に、僅かに世に謂う「大川塾」の伝統を継いで今日に至り、いま此処に集う会員・会友二十五名、謹んで恩師大川周明先生はじめ先達の諸先生と同志三十余名の霊前に、心からなる追悼の念を捧げ、また在りし日の追懐を深くするものであります。

かつて、かの「大東亜戦争」中の、苛烈なるビルマ戦線において戦い死した友、あるいはまた大戦後の現地で独立闘争に身を投じ、ヴェトナムの山野に骨を埋めた友のこともが、胸底にこみ上げる熱き感動を抑え難きものにして、さらに往時の、吾等が無一の師として仰いだ大川先生はもとより、親しくその馨咳に接して教導を受け、また大いにその恩恵に浴することのあった諸先生、俊英・浅田総領事、豪岩・稲嶺議員、俠商・松下社長、硬骨・高瀬学長、気塊

の山岸寮長、直情の菅寮長、熱血の五嶋翁、酒脱の宮前さん等思い出の尽きることなく脳裡を駆け巡り、まさに無量の感慨を覚えるものであります。

そして、かのインドのラス・ビハリ、スバス・チャンドラ、二人のボースや、ビルマのアウン・サン、バモウ、ヴェトナムのグオ・ディン・ジエム、カンボジアのソン・グオック・タンなど、非運に逝った有縁の諸英雄、また無名ながらアジアの民族独立運動に献身した多くの革命児達の諸霊に対しても、今日この追悼の札を捧げんとするものであります。

世上、いわゆる大東亜戦争に関する紛糾たる議論や解説が、「日本の負の遺産」として、多くはその理念にも、またその真実にもほど遠い空虚な論説をもたらしておりますが、かつて大川先生の復興アジアが、かの戦いによって現実のものとなつた今や、南方アジア諸国の隆盛と共に、「アジアへの回帰」あるいは「アジア重視」が声高に叫ばれる最近の実状でもあります。

それこそ、吾等が今日ここに追悼する故人諸霊に対する何よりの供養になるものと申せます。願わくば先亡の諸先達と盟友諸氏の霊の安らかならんことを。

平成七年十月一日

南方會 一同

(みんなみ二十七号一頁)

南方會関係物故者追悼法要名簿

(平成七年十月一日、於京都知恩院)

大川周明 大川兼子 山口直人 菅方誠一 緒川定雄 中川一志 国友宏志 山岸順三 福井末雄 横山繁一 江里一繁 密井其一 庄谷仁郎 入谷寿義 原田俊明 柴田敦司 加藤鉄三 滝井裕三 本間博基 駒林俊英

富田士生 伊藤幸三郎 池野光栄 平佐直三郎 服部五郎 田村伊織 田代和男 伏見三郎 矢木満郎 久間正覚 佐藤正二 城島忠一 杉野元一 伊藤鉄三 川口敏三 永井俊彦 島岡満彦 浜井誠昌 板倉一巳 堀真琴

石田龍 阿部敏 狩野一郎 飯田博 岩崎盛平 植芝栄三 大橋孝次 大久保礼一 蒲生健一 片岡氣介 茅原山 糟谷健夫 小谷元夫 佐藤弘 前島信次 サンデルヤーナ 白井道風 徳川義親 中島菊治 原正男

浜野末太郎 ブラコフツカマン 保々隆 丸山順太郎 松下光廣 村川堅固 南復興 井筒俊彦 ムフシン 中島信一 ティスパンデ 高瀬侍郎 稲嶺一郎 城田将孝 宮前正夫 岩畔豪雄 五島徳一郎 上杉日出夫 (敬称略)

四、鎮魂譜

昭和四十二年四月発行「卒業者名簿」
平成十三年八月二〇日発行「みんなみ」 31号より

江里 繁(二期)



左から江里、西川、岩崎一期生

大正十年、熊本市大江町に生る。県立熊本中学卒。昭和十五年、シンガポールに赴任。英国官憲におわれ、バンコックに移る。

開戦と共に、ビルマ独立義勇軍大尉となり、クラ地峡を突破、ゆくゆくビルマ青年を集め、ビクトリアポイントにて日本軍のラングーン攻撃に対する海上支援隊を組織し、敵艦船の群がるアンダマン海を北上、イラワジ河口よりラングーン背後に迫り、十七年三月九日未明、ピアポンに敵前上陸。カレン人警察隊の頑強なる攻撃をうけ交戦二時間余、負傷せる隊長を弾雨の中に助けんとし、一弾をひたいにうけて壮烈華と散る。

体軀堂々、性豪放にして空手・柔道を得意とし、印度語を学び、若き二十二年の生涯を印度独立に捧ぐ。ラングーン城外、真紅の火災樹のもと

「故ビルマ独立義勇軍少佐・江里繁」の霊よ、安かれ。
家族は 東京都日野市多摩平六―四一―三 暁建設内

江里与作

庄子仁郎(一期)



大正十年五月二十日、父甚吉の次男として仙台市に生れ、仙台一中卒。

昭和十五年十二月、スマランのマレー語新聞「シナール・スラタン」(南の光)社に赴任。十六年十一月、資産凍結をうけ一旦帰国し、十七年一月二十一日、再度カルカッタ丸にて神戸出帆、スマトラ島コタラジャにおいて、アチェ軍政部に勤務、終戦をむかう。

偉丈な体軀、温かな性格をもち、悠々せまらず。終戦にあたり、僚友の勧告をしりぞけて、「アジアの復興は今から始まる」と、アチェ住民の中に身を投ず。以来、歳月二

十年、生か死か、今は知るよしもなし。あるいは望みなきにしもあらずとは言え、昭和二十八年四月十八日戦死と認定される。ここにスマトラの原野にねむるインドネシア独立の戦士、尊き一柱のために祈らん。

家族は 仙台市富沢字金沢沢十六 庄子甚吉

入谷 寿 義(二期)



大正十年七月二十四日、父寿太郎の次男として、香川県川島村に生れ高松一中卒。昭和十五年五月、バンコック大南公事に赴任。同社ナコンサワン出張所長となり、ゴムの買付、輸出に従事す。

開戦とともに、ビルマ独立義勇軍大尉となり、泰緬国境を突破、ラングーン攻略に参加し、赫々たる武勲をあぐ。後、大南公司ラングーン支店長となり、昭和十九年十一月十日現地にて応召。森一〇四二部隊特殊自動車第十二中队第一小队(宮入隊)に属し、翌二十年四月、転進作戦によるトラック輸送中、ペグー北方五十キロ、ペアジの三叉路において、敵戦車部隊と遭遇し、これと交戦中壮絶な戦死を遂ぐ。時に四月二十八日午後四時。

流暢な泰語を駆使し、暇あればメーナム河で水泳を楽しむ。真実一路に生きた快男子、ここにビルマ戦場に散る。

家族は 高松市松福町一の九の十八 入谷寿夫

原田 俊 明(二期)



田18で画像提供
原和昭の肖像
日(昭)イタ
り生サセ一
期生サセ一
在一年描西

大正十年九月二日、台北市において父克孝の次男として生まれ、島根県立松江中学校卒。昭和十五年夏、台湾南方協会に赴任、仏印進駐と共にハノイに渡る。後、印度支那経済研究所に入り、現地の民族社会事情に精通し、安南独立運動の志士達と交わり、その信望を集む。

昭和十九年、現地にて応召、討第四二四〇部隊坂木隊に所属。翌年、タイグーン地区ベトミン蜂起の帰順工作に挺身し、ザップ將軍の説得にあたり、三度び軍命をおびて現地に潜入し、遂に敵の手中におち、同行者二名と共に殺害さる。時に昭和二十年五月九日午後五時頃と確認。ソンのコイ河畔に埋葬さる。その功によって二階級特進、陸軍兵長となる。享年二十五歳。

積極果敢な情熱家。常に陣頭にたちて、安南の独立のため遂に安南に死す。悲しいかな。

家族は 松江市本庄町 原田克孝(父君)
東京都中野区江古田二の十六の十三 小林美美子(妹)



柴田 敦司(一期)

大正八年京都市出身。京都商業学校卒。
昭和十五年福知山連隊に入隊。十八年除隊し、八月、光機閣ビルマ支部に派遣され、ミートキイナ出張所に勤務。

同地前線において諜者の潜入路を調査中、敵将校斥候団と遭遇、これと交戦中、頭部貫通銃創をうけ壮烈なる戦死をとぐ。時に昭和十九年六月二十六日。

あ、まぶたに浮かぶ「進めデリー」への大行進、山野を圧する印度国民軍独立の歌声。君は今も尚、アラカンの野に百万の兵を率いて、デリーの赤い城門を望むか。歲月流れ、今、アジアの力強き復興を見るとき、君の勲もまた常しえなり。

家族は 京都市右京区花園猪ノ毛町九 柴田 孝

本間 博 基(二期)



大正十一年一月二十五日、鶴岡市大宝寺において、父慶介の長男として生まれ、鶴岡中学校卒。昭和十六年九月二十九日、バタビア丸にて神戸出港。タイ国バンコク日報社に赴任。現地にて応召。體一五八二五部隊久保隊に所属。終戦と同時に、消息を絶ち、三十八年戦時死亡者として、靖国神社に合祀さる。

容姿端麗、情熱の人。開戦と同時に、ビルマ独立義勇軍大尉となり、同志数人と泰緬国境、道なきジャングルのなか象にまたがりて踏破、中部地区よりビルマに進出し、ゆくゆくビルマ青年を集めて日本軍に先行、ラングーン攻略に活躍、堂々入城す。男子の本懐これにすぐるところなし。君、本間家の長男に生まれ、同郷の大川先生をしいて上京、トルコ語を学び、遠く西域流砂の中に骨を埋むるの覚悟、今、桜花散る靖国の社に帰りてねむる。また以て冥すべし。

家族は 山形県鶴岡市鶴岡駅前通り 本長商店

本間 花(母堂)

池野 光 栄(三期)



大正十三年一月十七日、石川県松任町において父栄太郎の四男として生まれ、金沢二中卒。昭和十七年七月二十九日神戸出港。バンコック泰国外使館より岩畔

機関マレー支部に向し、印度国民軍ニースンキャンプに勤務。十八年ビルマに転進、ラングーン岩畔機関本部より、十九年三月インパール作戦に出撃。太平洋戦争中、最も悲惨を極めた印度進攻作戦に勇奮力戦、印度国民軍と寝食苦楽を共にし、言語に絶する困難に直面し遂に印緬国境モニワの前線において、病にたおれ、四月二十四日、同地野戦病院にて戦病死。

北海の荒波よせる砂丘の砂にまみれて育ち、朔風丈余の積雪を踏みわけて、金沢二中に通う。意志強固、純情一徹、その短き生涯を印度独立の為に捧ぐ。

家族は 石川県石川郡白山市相川新町三番地

池野栄良(建設業)

田村 伊 織(四期)



大正十三年一月二日、京都において父房雄の長男として生まれ、京都府立桃山中学校卒。昭和十八年九月大阪港よりサイゴンに向かい、大建産業(株)に勤務、現地にて応召。歩兵第六十二聯隊第四中隊に所属。成績極めて優秀にて、隊の模範となる。二十年七月四日、舟艇にて弾薬輸送中、トンキン州チェンカン省エンリの戦闘において、砲弾により左胸部に貫通銃創をうけ、壮烈なる戦死をとぐ。見習士官。

京洛の地に生まれ、父祖の家業をすて志をたてて渡南、未だその緒につかざるに、国に召されて、戦の場に散る。弱冠二十一歳の若き生涯を安南の独立に捧ぐ。尊くもまた悲し。

家族は 京都市伏見区黒茶屋町六三五 田村井也

(五期)

城島 忠一 佐賀県神崎町出身

杉野 元一 父 峯吉の長男、福岡修猶館
中学校卒

伊藤 鉄三 父 宗光の次男、名古屋市惟信
中学校卒

佐藤 正二 父 正治郎次男、酒田中学校卒

四君は、陸軍参謀本部嘱託となり、昭和十九年四月門司港出帆、マニラ經由シンガポールに上陸、陸路サイゴンに赴任し、仏印派遣軍軍司令部(信七九五〇部隊)参謀部渉



城島 忠一



杉野 元一



五期生1号室(前列左から)田中・伊藤・山田・高橋・(後列左から)永井・佐藤・森田(昭19.1.23)

外課に勤務。昭和二〇年二月十一日現地にて応召、独立歩兵第四二九大隊(サイゴン警備隊)に入隊す。その後、参謀部情報班に属し、軍司令部と共にハノイに転進、特務機関に志願して、対中国人、対安南人の指導工作に専心従事し、終戦となる。

有為変転、動乱はてない印度支那において、昨日の友は今日の敵、まして敗戦の兵の身は、今日あって明日なき命。混乱の古都ユエの街角で元気に手を振って分れた佐藤君。ハイフォン埠頭で引揚船を見送る杉野君。あるいは現地に残るも、あるいは祖国に帰るも、必ず生き続けて、日本再建につくすことを約した誓いも空しく、生別、死別、今はかなしき涙あるのみ。

城島君は二十一年十一月十九日、ハイフォン南方第四陸軍病院にて、マラリヤのため戦病死。陸軍上等兵。

佐藤君は現地にて除隊、ベトナム国民党グループと交遊し、ハノイで安南独立をめざし、また、伊藤君は国民党の士官養成所に起居し、安南独立のために春秋にとむ若き生涯を捧ぐ。

祖国を遠く幾千里、戦場に屍をさらすは武人の覚悟とは言え、炎熱焼くが如き、瘴癘の地に、咲く間もあらず、或は病にたおれ、或いは敵弾にたおれ、或いは草むす屍と散りにし若桜、永えに安らかなれ。

に昭和二十年七月二十二日ニューアンプン北方十キロの地点にて、敵戦車部隊の包囲攻撃をうけて玉碎す。

永井君は、昭和二十年四月二十日、印度仮政府チャンドラポース閣下の護衛を命ぜられ、自動車にてラングーンを撤退。昼夜間断ない爆撃砲撃の中をモールメンに向かい、シタン渡河地点にて、敵機の爆撃に身をさらし、人馬殺傷弾を左腹部にうけて壮絶な戦死をとぐ。時に四月二十八日午後二時。陸軍兵長。

あ、数万の英霊ねむるイラワジの山野。濁流渦巻くシタン河。兄等もまた、草むす屍、みづく屍と帰らざるか。思えば故郷を出でてわずかに一年、父母のかなしみは、いかばかりならん。

家族は

佐賀県神崎郡千代田町大字嘉納字丙太田一〇三一

川口利文

名古屋港区港楽町二の一四 永井健一

「御家族住所」は、現在では変わっていますので、現在の住所をお知りの方は御連絡下さい。

また、更に詳しい当時の情報、思い出などをお寄せ下さい。

家族は

佐賀県神崎郡神崎町大字神崎一ノ三二 城島 治

長崎県佐世保市有福町一五番地第一 杉野峯吉

愛知県葉栗郡木曾川町大字黒田字中野黒一 伊藤宗光

山形県酒田市北今町一の一 佐藤キク

川口 敏 佐賀県城田村出身

永井 俊彦 父 健一の次男、愛知県幡豆町

に生まれ、明倫中学校卒。



川口 敏

両君は、陸軍参謀本部嘱託となり、印度工作要員を命ぜられ、昭和十九年五月六日、立川より空路マニラ經由シンガポールに到着。光機閣本部と共に陸路ラングーンに前進し、教育隊に配属され訓練中、応召す。

川口君はビルマ野戦高射砲第三三大隊に入隊し、ペグー北方に前進し、ラングーン防衛の前線陣地を死守し、遂



永井 俊彦

五、会計

南方会は会員の会費によって運営された。

会費は当初年間一、〇〇〇円

平成七年以降 七、〇〇〇円

平成十一年以降 三、〇〇〇円

特別支出（懇親会、寄付金等）に対しては、その実費をその都度徴収した。

支出は印刷代（みんなみ、送料）、及び諸経費で、慶弔費は本人の場合一万円、配偶者五千円であった。

会計は当初は十年間に亘り大塚寿男が担当し、「大川先生誕生百年祭」に際しては協力を要請し目的を達成した。昭和六十三年以降は高木文造に交替した。（19・125）

〔寄附〕

昭三二年九月 大川先生中津宅へ

スポンジマット及びお見舞金

昭六〇年九月 顕彰会・生誕百年祭基金 二〇〇万円

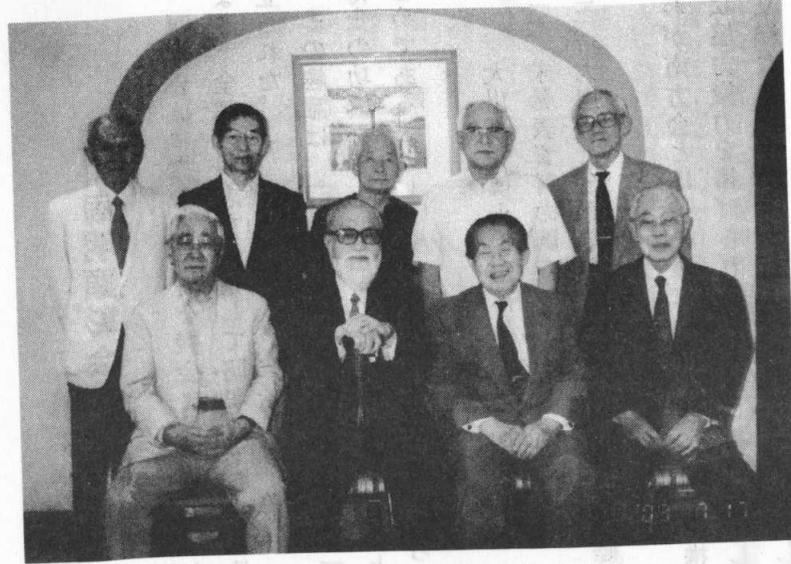
平四年十一月 顕彰会・生誕碑除幕式 五万円

平十年九月 「関係文書」出版記念会 五〇万円

〔文書〕三十四冊返礼受領

六、結び

近年の会員の減少により、全国的会合（総会）は平成十年十月の京都総会を最後とし、終了することとなった。以後は東京・京都を中心として相寄り相俟って友愛・親交を、



平15. 7. 17 東京グループ (32号目次) 左から
(前列) 伊藤、奥田、西川、新井
(後列) 高木、大屋敷、豊田、友田、山本



平14. 5. 25 京都グループ 左から
(前列) 大塚嬢、石川、大塚、岩崎、岩崎夫人、小林
(後列) 金沢、岸本、森川、桑原、松田、山本、中村

最後の誰かまで持ち続けることとなった。「誰かさん、頑張ってください。」写真は最近の東京グループ、京都グループの壮健なる姿をここに残します。御活躍を祈ります。

第28期 会計報告

(平成16.5.1~17.4.30)

収入の部	金額
会費	101,000
寄付金	17,962
懇親会費	50,000
受取利子	5
計	168,967
前記繰越金	86,666
合計	255,633
支出の部	金額
通信費	4,000
雑費	900
懇親会費	58,962
計	63,862
次期繰越金	191,771
合計	255,633

第14期会計報告(4.19)

(昭和54.3.31~55.4.30)

収入の部	金額
会費	598,000
寄附金	74,000
臨時会費	42,000
雑収入	18,543
計	732,543
前期繰越金	930,004
合計	1,662,547
支出の部	金額
印刷費	214,350
会議費	79,680
通信費	56,250
慶弔費	145,000
計	495,280
次期繰越金	1,167,267
合計	1,662,547

大川周明顕彰会

顕彰会は、二十五年祭を機会に地元酒田の方々の努力により、全国に同志を結集して昭和五十七年十月十七日に設立された。

その趣意は、「アジアの復興と昭和維新に一生を捧げた博士の功績を明らかにし、永く世に伝えることは我等のつとめである」とし、その目的は次の三項であった。

- 一、大川周明博士の精神及び業績の顕揚
- 二、未発表資料の調査、刊行
- 三、大川博士を偲ぶ会を開き会員相互の親睦を図る

わが南方会とは、その志を全く共にし、相携えて目的達成に協力微力を捧げられることは、誠に喜ばしい事である。設立総会の全容は「みんなみ」第八号に掲載し、同日第十六回南方会をサンルート・ホテルで開催した。

発足時の顕彰会役員には南方会では左記の人が就任した。

顧問 拓殖大学総長 高瀬侍郎

参議院議員 稲嶺一郎

副会長 椋木瑳磨太

理事 加藤健四郎 西川捨三郎

監事 宮田 確三

評議員 大塚 寿男 山本 哲朗

監事 本田 秀夫

〔事業〕

昭五七年十月十六日 二十五年祭と発会式(8・3)

昭六一年十月十一日 生誕百年祭・酒田市日枝神社山門

前に顕彰碑建立除幕式 (16・1)

毎年碑前祭が挙行され、講演会、懇親会がもたれている。

平元年十一月十二日 先生三十三回忌・夫人十三回忌

法要(目黒不動尊)(21・26)

平四年十一月十日 生誕碑建立除幕式

(藤塚・豊受神社)

平八年十月十二日 生誕百十年祭(28・1)

〔出版〕

大川周明日記 岩崎学術出版社 昭六一・九・一

大川周明関係文書 (株)芙蓉書房出版

一九九八・九・三〇

秋霜(顕彰会会報) 昭六一一年一号から第四十二号

平成十八・九・一

中公文庫から「復興亜細亜の諸問題」「回教概論」復刻

原田幸吉氏の「大川周明博士の生涯」

大塚健洋氏の「大川周明」が出版された。

顕彰会の三十年に渡るためまざる努力の結晶である。

〔平成十八年役員〕

会 長	前田 直己
副 会 長	原田 幸吉
理事、事務局長	佐藤 昇一
監 事	亀谷 尚憲
東京支部長	山本 哲朗



110年祭における山本挨拶

哀輓三章

識見文章共絕倫
多年與亞辰經綸
瘦軀六尺英雄漢
睥睨東西今古人

危言遭厄道何窮
蒙度投身區區中
筆挾秋霜心烈日
果然類世起清風

立言何遜立朝孰時降
艱難嗟喪君渺魂
兮招不返哀歌空對

暮天雲 哀輓

大川博士周明君 土屋久泰



大川周明顯彰碑（酒田市日枝神社山門前）

感謝狀

南方會殿

貴會過去の戦時下に清鉄東亞経済

調査局付属研究所研究生として

大川周明博士直々の薫陶を受けた

門下唯一の団体であり大川周明頭

彰会創立以来その活動を支援する

ほか尽力されました

茲に本会創立十周年を迎えるに当

り記念品を贈呈し感謝の意を

表します

平成四年七月五日

大川周明顯彰会

会長 和嶋茂男



みんなみ

(大川先生筆)

一、発行

機関誌「みんなみ」は、昭和五十三年（一九七八）一月、第一号が発刊された。編集者は西川で、「同志の手作りによる小冊子として発刊されたものであり、これが珠玉の作品を蒐めつゝ、やがて格調高い我等研究所史を見事に完成させるために」（一号編集後記）発刊され、途中第七号から山本に交代し第三十四号に至って、最終編集篇として発行する。

総ページ数三、三五〇頁、三十年に及ぶ連冊で、内から見た大川塾を余すところなく描写し、また卒業後の戦場における、或いは戦後夫々の立場にあって社会に貢献した姿を、ありのままに残している貴重な記録である。

執筆者、関係者も大勢であり、また記事内容も戦記、風物、人生等々万端に及んでいるので、読者の便のために索引を作成した。ただし、寄稿者名は索引から除いているので、「みんなみ目次表」から検索して下さい。

(尚「みんなみ」以前の会報・名簿なども次表に加えた。)

みんなみ

新年号



(カットは富永一郎)

(一九五三年)

(1) 「みんなみ」発行号数

名称	号	発行日	編集	版・頁
南方会 会報	1-6 (K1-K6)	1953・01-53・09	金澤 伍郎	タブロイド 24
みんなみ	1-5 (M1-M5)	1953・10-54・01	〃	182
会報	1-6	1956・11-64・11	山本 哲朗	B5 165
名簿	1-5	1967・07-84・08	〃	B5 125
会員消息	1-3	1981・10-84・09	大塚 寿男	41
瑞光寮余韻	1	1975	白柳 豊	19
みんなみ	弔詞	1958・2・15	西川 作 小林 奉読	3
みんなみ	1-6	1978・1-1981・11	西川捨三郎	178
みんなみ	7-34	1982・7-2007・2	山本 哲朗	2,410
別I	瑞光(抄)	1979・5	山本	125
別II	〃	1979・10	山本	34
別III	ビルマ	1979・7	大屋敷	23
別IV	インドシナ	1980・01	片野・伏見	21
合計	71			3,350

(版は記入以外は全てA5版)

(2)大川先生揮毫

室劍離匣
誰論長短

周明書

(6・39)

群鳥喧時
鶴一鳴

周明書

(3・3)

二、みんなみ歌集

豊多摩

大川 周明

柿色の臭きころもを纏へども

赤きころろは穢れざりけり(9・25)

蚤も蚊も 神のつかひぞ このわれを

きたへんための 神のつかひぞ(13・3)

塵箱の底の藻屑に似たるかて

何ぞと問えば ひじきと答えし(13・3)

物書くと筆は執れども指ごごえ

長く得かかず今日の寒さに(9・25)

豊多摩のひとやの寒さ身に沁みて

氷室のなかに住む心地する(27・5)

日の本の北の守りをうち堅め

みんなみ指して急ぎ下らむ(8・14)

(以上 大川先生)

師の姿 今も鮮やかに 端座して

コーランひもとく その背揺がず

逆瀬川澄夫(16・34)

鳥海は君を讃えてほほ笑めり

秋空に高し ふるさとの山

高橋 喜重(8・7)

大川先生を偲ぶ

土屋 久泰 (8・15)

立言何遜立朝勲

時際艱難嗟喪君

渺渺魂兮招不返

哀歌空對暮天雲

恩師を迎ふるの日

あゝ、神よ

我等が祈をよみせしか

祖国に希有の艱難の秋

鳥衆何ぞよく時艱に対処し得ん

大塚 寿男 (7・8)

(一九四八・十二・三十、松沢病院より)

師

嚴師たり慈師にてありし師の面影を

心の支えに六十路越え来ぬ

逆瀬川澄夫 (16・34)

松下光廣師を送る

ふるさとの島に余生ると発ち給う

師の機影南の空に消えたり

山田 勲 (16・50)

昭和天皇ご崩御 三首 (20・0)

大いなる昭和の御代は終わりたり

大いなる哀しみ深み闇とはなりぬ

大塚 寿男 (15・49)

今よりは平成とよぶ御代新たななる

のぞみ満ちたる若き御代かな

椋木瑳磨太

大君の御病重し大八洲

うち沈みつつ年は明けたり

児玉 正志

ソソコイに散る

椰子しげる村を求めていつの日か

ソソコイ河畔 みたまよねむれ

梶谷 俊雄 (2・15)

ソソコイ 紅河を大和心の血に染めて

散りにし友や出雲八重垣

大塚 寿男 (15・49)

たずさえて海越えゆきし我が亡友を

しのばゆ母や藤棚の下

大塚 寿男 (15・49)

うら若き身を鴻毛の友は今

眠りもとわに故郷の丘

逆瀬川澄夫 (12・46)

友は野末の石の下

夕まぐれ野良にふと見ゆ火の燃ゆる

斃れし人を焼くと言うなり

椋木瑳磨太 (4・24)

夕まぐれ 命を伝えて帰るさに

野に唯一人 もろこしを焼く (同右)

ビルマ 死線をこえて

濁流に伏して流るる 兵つわものの

むくろの中を我は進みぬ

田岡 義計 (30・38)

俸給の軍票をもち身を処せる

友の痛恨ビルマ戦悲し

(同右)

火焰樹

嵐過ぎ大地を染めて火焰樹の

花散る跡に吾はたたずむ

逆瀬川澄夫 (15・30)

チャンギーへ

朝まだきバンコクに別れはるばると

シンガポールの夜の冷たき

逆瀬川澄夫 (15・27)

虜窓

北斗の星座 昔今 変わらぬ光瞬けど

虜窓厳しく風荒れて 抱く雄図の夢侘し

易水復還れども 胸中涙を誰か知る

(同、15・29)

泰緬のきびしき日々は吾れも知る

なぞあげつらい君の裁かる

(同、15・37)

絞首刑

復讐と分かれど逃るる術もなく

犠牲いけにえの身と 君は吊され

耐え忍び耐え忍びませ同胞よ

やがて訪ずる 春もあるらむ

逆瀬川澄夫 (15・37)

不帰の出航

我れ 南けん 大君の醜の

御盾と出でたつ君を今ぞ送らん

服部 五郎 (11・32)

復員船

十年の客となりて異境に遊ぶ

慷慨時に利あらず 万骨を枯らすも

臥薪嘗胆 我が志は行く

はるかに雷州を望み見て

我が心に決す 復員船

服部 五郎 (11・39)

決心

願わくは万世の為 一心決定し

地上に天国を成就せんと期す

菅 勤 (6・5)

獄窓 二首

作業場に出でゆく朝 吾が友の

新しき獄衣いたく目に沁む

獄庭の草除りあればにじみ出る

汗に涙の自ずまじるを

山田 勲(会報一号)

南方会

岩崎 陽二(5・29)

回天業敗 幾十年

往事追懐 転慨然

少年鬢髪 雖加霜

勿喪侠気 青春念

南方会

逆瀬川澄夫(31・56)

あれは青葉の薫る頃

希望を胸に集いたり

春秋二年瑞光寮

学びし友は今何処に

今宵再会 南方会

語る思い出 交わす杯

名残つきぬも一夜が明けて

さらばと又も西東

靖国の御前

今日のこの気持を固くお誓いしなさいと

子をさとす母の曇りたる声

本 田 秀夫(10・23)

過去

本間野矢(01・88)

「過去は過去として葬らしめよ」とは言えども

幾たびの峠を越えて春を見ず

西川 寛生(32・11)

瑞光の丘

瑞光の学びやあとに南方で

散りにし友のいくたりありしか

小林 隆(9・79)

シルクロード

夢なりや現つなるかや絹の道

人の世の罪の数かよ千仏洞

渡部 亨(19・73)

シンドの旅

真紅の太陽が昇っていく

悠久果てないインダスの流れが

少し砂っぽいがシンドの大地が

広々と未来に向かって広がっている

私はこの国を愛す

山本 哲朗(12・78)

アラビア砂漠の旅

アルコバールの海に来て

海を知る 海はわが友

山本 哲朗(13・94)

箱根道 (昭十八・九・三)

児玉 正志

草屋根に切られし空の蒼さかな
雲を吐く萬山の緑箱根閑
濡れて行け姥子原のすすき路
路ばたに曾我兄弟は眠りけり
雷をうなじ浸して聞く湯かな (9・76)

(箱根・山中湖・河口湖縦走行軍)

なき友の遺筆となりぬ年賀状

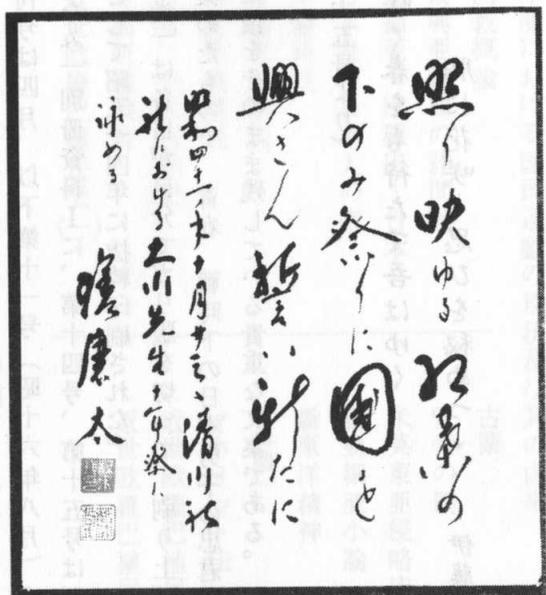
筆を休めて眺め惚ばん

池田 肇 (24・107)

月山

菜の花に残雪淋し月の山

本間博基 (10・26)



浜辺

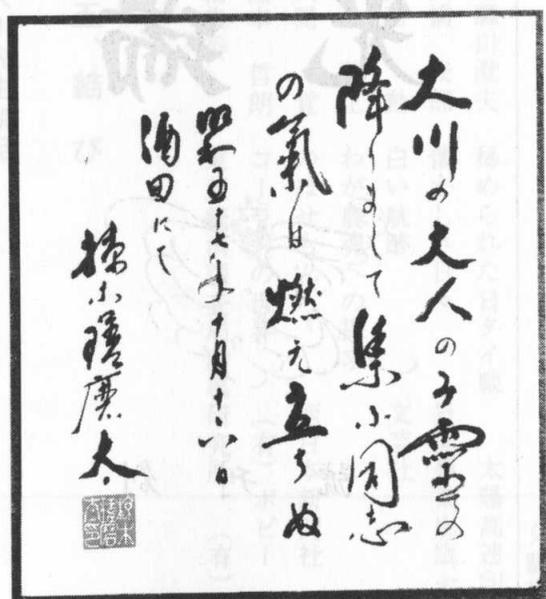
山本 哲朗 (23・109)

はてしない浜辺の貝を拾いて
妻は「日本」と書き 吾は「アジア」と書く
メコンの海か アラカンの洋か
夢は万里をかけめぐる (校了の夜の夢)

農魂

中津 弘正 (28・25)

野良着姿に木杓きなたをかつぎ
今朝も出て行く杉木立こだちの径を
野暮くらしな生計は先祖の教訓おしえ
これが百姓の生き行く道と
いちずに精出す山仕事
信ずる道に迷いなし



加藤健四郎氏蔵

三、瑞光

寮誌「瑞光」は昭十四年三月六日その発行が決定され、「海外事情の学習に一層の努力を心掛けるべく、国内問題論を論ずる原稿」は除外された。(4・21)

創刊号は四月、以下第十一号(昭十六年八月)までは「みんなみ」別冊資料Iに、第十四号、第十五号は別冊資料IIとして昭五十四年に抜粋印刷された。

「瑞光」は各自が自分でガリ版を切って、刷り上げ、それを集めたもので、青春、戦時下の日本男子の忠君愛国の魂と筆蹟をそのまま残している貴重な文集である。

(第十五号より)

桜咲く春をも待たで吾はゆく

胸に花咲く思ひを秘めつ、
伊藤

いざ我はえびらに桜匂はせて

忠と孝とに鹿島立つ日よ
杉野

瑞光



創刊号

東京経済大学附属図書館蔵

四、著書

大川 周明 (著作年代目録より 7・37)

印度における国民運動の現状及び其の由来

回教概論

復興亜細亜の諸問題

亜細亜・欧羅巴・日本

日本及び日本人の道

中庸新註

中国思想概説

印度思想概説

日本二千六百年史

亜細亜建設者

近世欧羅巴植民史(一)

古蘭

安楽の門

米英東亜侵略史

新亜細亜小論

新東洋精神

〔遺稿〕

マホメット伝

近世欧羅巴植民史(二)

近世欧羅巴植民史(三)

稲嶺 一郎 世界を舞台に 沖繩タイムス

西川 寛生 ベトナム人名人物事典 暁印書館

西川 寛生 (共著) 目に見えない戦争「間接侵略」朝雲新書

五、結び

大川先生訓話

「眼前一尺に書を繙いても、眼のみで読み、頭でのみ考え、胸だけで感じて駄目である。書物に対して魂を打ち込んで愉快な境地にならなければ効はない」

(昭和十四年十月三十日) (5・34)

昭・53・1・20 目次 1号

寮長二年の回想	山岸敬明・談	1
私と“大川塾”	岩崎陽二	7
食料難の時代	石田龍	13
瑞光寮焼失	松田敬造	18
寮史編纂に思う	大塚寿男	21
編集後記		24

みんなみ目次表

昭・53・2 目次 2号

わが瑞光寮時代	菅勤	1
開戦前夜の盤谷	奥田元重	8
ソンコイの血	梶谷俊雄	14
暗号解読のこと	高橋哲郎	16
思い出 二粒	岸本晋司	19
南方会会計報告		23
編集後記		24

みんなみ

第四号

三月号



みんなみ

第五号

10



(カッターは富永一郎)

5号 目次 昭・56・5・20

研究所と合気道	児玉正志	1
入所から卒業まで	山本哲朗	5
南十字星の下で	小林隆	23
研究所被爆日記	本田秀夫	26
北海道を旅して	岩崎陽二	29
研究所日録(Ⅳ) 昭和14年(1939年)		30
編集後記		38

6号 目次 昭・56・11

国土・菅勤翁	高瀬侍郎	1
「みたま」人間・菅さんを偲ぶ	椋木瑳磨太	2
菅先生を偲ぶ	大塚寿男	3
菅先生の面影	逆瀬川澄夫	6
菅先生訓言録(編集幹事記)		7
菅先生を憶う	岩崎陽二	10
“シルクロードが持つ一面”	岩田冷鐵	13
“マルコポーロの道”	倉橋正夫	15
トルコ雑感	渡部亨	19
「楽浪人の記」その(一)	岩崎陽二	29
研究所日録(Ⅴ) 昭和15年(1940年)		32
編集後記		40

3号 目次 昭・54・3

大川博士の『先見の明』	稲嶺一郎談	1
ある人生の記録	渡部亨	4
八月十五日前後の日々	久野拓造	9
インド国民軍(INA)と共に	上田政雄	15
終戦後のこと	高橋哲郎	16
研究所(瑞光寮)日録(Ⅰ) 昭和13年(1938年)		17
編集後記		24

4号 目次 昭・55・6・25

目黒断想	椋木瑳磨太	1
南への郷愁	奥田元重	5
まえがき	阿部幸作	6
吐根(とこん)	倉橋正夫	13
農にはげむ	中津正弘	17
研究所日録(Ⅱ) 昭和14年(1939年)		20
編集後記		28

9号 目次 昭・58・8・25

南洋紀行	大川周明	1
獄中日記	大川周明	22
「東亜経済調査局附属研究所」		26
先生のお写真	倉橋正夫	33
私と瑞光寮	兒玉正志	34
緒形先生の思い出	小林隆	36
恩師 蒲生禮一先生	山本哲朗	38
夕日日記	倉橋正夫	40
南への郷愁(四)	奥田元重	47
論風 国際人	高木文造	52
論風 亜細亜への婦人	大塚寿男	59
論風 カンボジア問題について	西川寛生	61
中島信一小伝(その三)	城田将孝	63
六文銭哀歌	齊藤正	71
研究所日録(V)		73
消息		78
編集後記		86

10号 目次 昭・59・3・1

上海日記	大川周明	1
アメリカ民間に対する借款交渉	田中隆吉	6
緒形君の遺志未だ成らず	椋木 瑳磨太	9
追憶	宮前正夫	11
逆立ちタックル	森川清	12
「無」	山本哲朗	13
二等兵物語	山田勲	14
終戦日記	本田秀夫	21
夕日日記	倉橋正夫	25
論風 アセアンとインドシナ「連邦」	西川寛生	32
アキノ氏暗殺事件と比国	大塚寿男	35
ビルマ独立義勇軍に敬礼	奥田元重	43
西アフリカの人びと	田岡義計	55
コーカサス三国の旅	山本哲朗	65
西安紀行	松田敬造	77
中島信一小伝(その四)	城田将孝	81
研究所日録(VI)	兒玉正志	93
消息		98
あとがき		104

7号 目次 昭・57・7・10

友 中島信一君を偲ぶ	高瀬侍郎	1
『中島信一小伝』	城田正孝	2
恩師を迎えた日	大塚寿男	5
「奥さま」の思い出	山本愛子	9
私のアルバム	山本哲朗	14
トルコ雑感(その二)	渡部亨	15
南への郷愁	奥田元重	22
研究所日録(V)(昭和15年5月~12月)		28
大川周明博士略歴	片岡気介	32
編集後記		38

8号 目次 昭・58・1・10

論風 中・ソ和解の動きについて	西川寛生	1
大川先生二十五年祭と南方会酒田大会	編集部	3
酒田南方会に参加して	岩崎陽二	18
「私の戦後」大川周明博士と共に	柳沢一二	20
奇しき帰還	山口智己	27
南への郷愁(三) 暫しバンコックの憩い	奥田元重	31
ビルマ撤退の一断面	服部五郎	40
地獄の行路	山田勲	44
食食物=恨ミハ	久野拓造	54
中島信一小伝(その二)	城田正孝	62
南画の故里を民船遊航	岩田冷鉄	71
豊国と大和国	加藤紀宏	79
研究所日録(VI)		92
編集後記		95

十一号 目次

上海日記	大川周明	1
父江上達を語る江本立氏	山本哲朗	14
扶桑七十年の夢	蔣君輝	16
弔辞	岩田冷鉄	22
パニー事件とイスラムの大義	加藤鉄三	25
終戦後の南方軍総司令部	服部五郎	29
戦後日緬国交夜話(一)	奥田元重	42
イラン寸話	田岡義計	68
論風	西川寛生	73
ベトナムのカンボジア支配の実態	西川寛生	75
中島信一小伝(その五)	城田将孝	79
砂漠	大塚寿男	85
夕日日記	倉橋正夫	90
もぐらのたわごと	富田正生	95
新聞の強さを再認識	久野拓	97
或る一つの区切り	久野拓	100
連休日記	山本哲朗	108
大川先生顕彰会の経過報告	山本哲朗	114
消息欄		115
あとがき		119

昭・五九・九・二十

十三号 目次

獄中記	大川周明	1
大川博士書簡	柳沢一二	4
ビルマ日誌(二)	友田光男	7
苦難を越えて	田岡義計	22
内地引揚印象記	池田肇	30
わが人生の風景	小林隆	41
戦後日緬国交夜話(二)	奥田元重	47
ヴェトナム戦後十年に思う	西川寛生	61
日米欧経済戦争試論	大塚寿男	65
板倉一己君を悼む	富田士生	71
若き日への想い	永上肆朗	72
中島信一小伝(その七)	城田将孝	74
砂漠で砂漠に学ぶ	山本哲朗	83
大川博士生誕百年祭趣意書	山本哲朗	101
消息欄		103
あとがき		111

昭・六十・八・二十

十二号 目次

満洲日記	大川周明	1
大川周明顕彰会の計画について		19
日本最初の露和辞典	友田光男	20
ビルマ日誌	上田政雄	21
コヒマの死闘	逆瀬川澄夫	39
亡き友の故里を訪ねて	渡部亨	44
フランスそしてギニア	久野拓	47
保々隆矣先生	城田将孝	55
中島信一小伝(その六)	城田将孝	61
南方会鹿兒島大会		69
桜島日記	山本哲朗	72
六十二の手習——カラチ寸描	山本哲朗	74
底辺の人々	伏見三郎	79
瑞光寮日記	中津弘正	82
消息欄		87
あとがき		90

昭・六十・二・二十

十四号 目次

アルラーハの尊称	大川先生	1
大川先生と熊本	久野拓造	5
大川博士書簡	柳沢一二	21
大川博士生誕百年祭	実行委員会	25
南方会慰霊祭	幹事	28
わが人生の風景(二)	小林隆	33
戦後日緬国交夜話(三)	奥田元重	44
建国記念日の意義	児玉正志	53
中島信一小伝(その八)	城田将孝	55
思い出のバンコック	奥田元重	68
偉人チャンドラ・ボースの思い出	大塚寿男	70
ギニア民話	渡部亨	73
フィリピンはいつもにこにこ	大塚寿男・沢	78
わがコーラン研究	山本哲朗	83
教育あれこれ	矢木満	89
矢木君の悲報に接して	上杉日出夫	91
消息		92
あとがき		102

昭・六一・二・十五

十五号 目次

昭・六一・九・五

ビルマ潜入記	武田信近	1
古いノート	逆瀬川澄夫	23
故原田俊明兄の墓参と御母堂慰問の集い	橋爪正吉	46
原田君の墓参吟	大塚寿男	49
「原田明」に	中村美美子	50
中島信一小伝(最終回)	城田将孝	54
変わる南太平洋の島嶼国	西川寛生	67
わがコーラン研究(二)	山本哲朗	81
三十八年間の教師生活を顧みて	岸根保	93
あとがき		98

十六号 目次

昭・六二・二・二五

祝辞	稲嶺一郎	1
祝辞	相馬大作	3
祝辞	椋木瑳磨太	4
祝辞	和嶋茂男	6
式辞	山形新開	8
大川周明博士の生誕一〇〇年祭	橋爪正吉	12
恩師大川周明博士生誕百年祭並びに 第二十回南方会総会・酒田大会	柳沢一郎	22
大川博士書簡	大川二男	26
雨の中	大塚寿男	27
大川先生の亜細亜経綸	逆瀬川澄夫	31
師を偲ぶ	富田士生	35
大川周明先生と石原莞爾將軍	逆瀬川澄夫	40
ブラックリスト	山田勲	44
私の大南	小林隆	50
酒田への旅	逆瀬川澄夫	53
西ニューギニア紀行	山本哲朗	59
わがコーラン研究(三)	山本哲朗	83
ニュージールランド紀行		93
あとがき		97

十七号 目次

昭・六二・六・二五

先生の言伝	友田光男	1
戦前・戦中バンコック時代の回想	逆瀬川澄夫	2
ヒスイ物語(一)	友田光男	24
松下光広氏の思い出	大塚寿男	44
松下光広伝	北野典夫	46
アジア旅行記(一)	武田信近	73
わがコーラン研究(四)	山本哲朗	111
ヴェトナム新動向	西川寛生	132
あとがき		138

お知らせ・訂正(23) 会計報告・住所変更(110)

十八号 目次

昭・六三・二・二五

第二十一回南方会総会報告	柳沢一二	1
凜然たり 大川先生	逆瀬川澄夫	2
戦前・戦中バンコック時代の回想(完)	柳村貫一	5
ベナンの思い出	友田光男	30
ヒスイ物語(完)	友田光男	36
アジア旅行記(完)	武田信近	60
わがコーラン研究(五)	山本哲朗	143
あとがき		165

渡部さんを悼む(29) 三書(142) アンケート(142)

十九号 目次 昭・六三・八・二五

へ時論「カンボジア「和解」への道	西川寛生	2
夕日日記(四)	倉橋正夫	7
モハマッド・フスニ・タムリンの生涯と闘争	大塚寿男	13
トルキスタン旅行記	渡部亨	71
ヨーロッパからの手紙	山本哲朗	79
わがコーラン研究(六)	山本哲朗	93
往時茫々	海老沢稔	119
消息		12
あとがき		126
ドリアン談義 (70)		

二十号 目次 平元・四・一

「随感」注目されるアジアの新「経済圏」構想	西川寛生	1
入学誓約書	久野拓造	4
ビルマの悩みと仏教	加藤鉄三	7
最後の帝国陸軍一等兵の敗走記	山本哲朗	11
モハマッド・フスニ・タムリンの生涯と闘争	大塚寿男	41
わがコーラン研究(七)	山本哲朗	65
消息		71
あとがき		74

二十一号 目次 平二・二

第二十三回南方会湯河原大会報告	西川寛生	2
日誌・大川先生談話	逆瀬川澄夫	4
軽率なる推論を戒める	住田勲	7
タイ国だより	加藤鐵三	13
昭和の時代	山本哲朗	15
軍政監部指定買鉱班	山本哲朗	27
モハマッド・フスニ・タムリンの生涯と闘争	大塚寿男	36
わがコーラン研究(八)	山本哲朗	57
消息		63
密井君を墓前に訪ねる(12)	タイの胃袋(14)	
稲嶺先生を偲ぶ(16)	カンボジア・キャンプ(14)	

二十二号 目次 平三・六・十五

経済的立場に於ける支那問題の解剖	大川周明	1
「仁義無き国は亡ぶ」	児玉正志	24
さらら讚美	椋木瑳磨太	26
白雲は流れて	池田肇	27
運か偶然か	田中宏	33
青春雑感	岸本晋司	41
南方会総会ご案内	山本哲朗	47
ケマッサル鉱山	山本哲朗	49
南方の足跡と思い出	池田宏	57
折りへの旅	逆瀬川澄夫	61
越南悲話	梶谷俊雄	79
私の趣味、私の信條	山本哲朗	89
わがコーラン研究	山本哲朗	91
あとがき		101
証明書(2)・お便り(2)(3)(4)(5)		

二十七号 目次

平八・十・十

追悼の辞	1
物故者法要名簿	2
大川先生を偲ぶ	山本哲朗 4
タイ国、あの時	岩崎陽二 14
時流随想	大屋敷久男 17
仁和寺夜話	小林隆 22
中央アジアの阿片密売者	渡部亨 26
コーラン地名事典	山本哲朗 34
あとがき	43

二十八号 目次

平九・三・三一

大川先生・生誕百年祭と南方会	1
東亜経済調査局付属研究所	山本哲朗 2
夕日記(七) 第三日本帝国	倉橋正夫 6
私の戦後五十年	高橋俊郎 12
兒玉先生を追慕して	山田勲 18
私の「一期一会」	久野拓造 20
農魂	中津弘正 24
わが人生の航路	田中寛 27
蒙古の西、パミールの東	渡辺亨 31
あとがき	52

二十九号 目次

平十・九・二〇

大川先生と会った拓大人	1
大川周明博士のガンデー論	大屋敷久男 7
私の戦後史抄	三浦琢二 14
逍遙・「敬天愛人」	永井肆朗 27
人生雑感	岸本晋司 40
我青春に悔いなし	逆瀬川澄夫 44
帰国まで	橋爪正吉 79
寮歌随想	小林隆 80
蒙古の西、パミールの東	渡辺亨 87
あとがき	135

三十号 目次

平十二・八・三〇

一、卒業から復員まで	1
新井 章、石川 信雄、入谷 寿義、岩崎 陽一、大屋敷久男、豊田 三郎、西川捨三郎、三浦 琢二、江里 繁、池田 肇、加藤健四郎、小林 隆、三本菅 繁、田岡 義計、友田 光男、橋爪 正吉、森川 清、山口 知己、山本 哲明、住田 勲、上田 政雄、高木 文造、中村 悦夫、鈴木 政章、高馬 寛、田中 寛、山田 勲、久野 拓造	
二、加州とアジア人	幸野谷 清和 65
あとがき	85

三十三号 目次 平十六・五・三〇

一、 村田勇馬先輩から……………	1
二、 隻脚六十年……………	田岡義計 2
三、 北ベトナム戦没の同志に哀悼の誠を捧ぐ……………	梶谷俊雄 5
四、 追悼 幸野谷君……………	梶谷俊雄 8
五、 回想 幸野谷清和君……………	渡部亨 11
六、 永井俊彦君の最後……………	石川信雄 13
詩二篇……………	4
あとがき……………	16

三十二号 目次 平十五・九・三〇

みんなみ別冊資料 I 寮誌 瑞光(抄)……………	南方会
同上 II 同上……………	同上
同上 III 記録(ビルマ)……………	同上
ビルマ独立義勇軍水上支援隊始末記……………	大屋敷久男
同上 IV 記録(インドシナ)……………	同上
“仏領印度支那、わが足跡……………	片野健四郎
ベトナム戦記……………	伏見三郎

みんな目次正誤表

正	誤	号・頁
中津弘正	中津正弘	四号 目次、十七頁
児玉正志	兒玉正志	九号 目次、三四頁
榊村寛治	榊村貫一	十八号 目次
田中寛	田中宏	二十二号 目次

三十一号 目次 平十三・八・二〇

一、 大川塾……………	山本哲朗 1
二、 鎮魂譜……………	10
三、 追悼・原田俊明……………	西川寛生 18
四、 未帰還五期生六名の消息について……………	田中寛 28
五、 鎮魂……………	梶谷俊雄 33
六、 ソン・ゴック・タンと私……………	片野健四郎 42
七、 菅祥孝から渡部亨兄へ……………	菅祥孝 45
八、 北朝鮮より……………	朴俊達 47
九、 参宮記……………	渡部亨 49
十、 友を偲びて……………	逆瀬川澄夫 56
十一、 恩師への手紙……………	渡部亨 57
椋木先生……………	友田光男 61
十二、 須藤和夫君を送る言葉……………	大屋敷久男 63
十三、 再び帰らぬ僚友 原田治君を送る……………	田岡義計 65
あとがき……………	66

三十二号 目次 平十五・九・三〇

一、 椋木先生を偲ぶ……………	西川寛生 1
二、 回想・“みんなみ”刊行の記録……………	山本哲朗 12
三、 不透明な時間……………	岩崎陽二 14
四、 航跡……………	豊田三良 19
五、 石川信雄談話記録……………	田中敏雄 22
六、 追憶・追悼 山口同期生……………	梶谷俊雄 29
七、 アラカンの仇をマレーで……………	渡部亨 36
八、 東トルキスタンの旅……………	渡部亨 45
九、 アフガン戦争……………	山本哲朗 51
証明書……………	18
色いろ……………	44
あとがき……………	55

索引〔I〕(みんなみ寄稿者)

(註) 数字はみんなみの号数
○は索引〔II〕を見よ

あ行

- 阿部幸作 4
- 新井 章 K1, 30
- 池田 肇 13, 22, 30
- 池田 宏 22
- 石川信雄 30, 32, 33
- 石田 龍 1, 24
- 伊藤啓介 K2
- 稲嶺一郎
- 岩崎陽二 M1, 1, 5, 6, 8, 23, 27, 30, 32
- 岩田冷鉄
- 上田政雄 3, 12, 30
- 上杉日出夫 14
- 海老沢 稔 19
- 大川周明
- 大川二郎 16
- 大塚寿男 K2, K4, K5, M1, M3~5, 1, 6, 7, 9, 10, 11, 13, 14, 15, 16, 17, 19, 20, 21, 26
- 大屋敷久男 M5, 25, 27, 29, 30, 31
- 奥田重元 K6, 2, 4, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 14

か行

- 梶谷俊雄 2, 22, 25, 31, 32, 33
- 片岡気介 K1
- 加藤健四郎 30, 31
- 加藤鐵三 11, 20, 21, 23
- 加藤紀宏 K5, 8, 24
- 金沢伍郎 K4
- 狩野 敏 23
- 菅 勤
- 岸根 保 15
- 岸本普司 2, 22, 24, 29

- 北野典夫 17
- 久間 覚 11, 25, 26
- 倉橋正夫 4, 6, 9, 81→夕日日記
- 幸野谷清和 30, 33
- 児玉正志
- 小林 隆 5, 9, 13, 14, 16, 27, 29, 30

さ行

- 斉藤 正 9
- 逆瀬川澄夫 K3, 6, 12, 15, 16, 17, 18, 21, 22, 29, 31
- 三本菅 繁 24, 30
- 島岡満磨 24
- 島村熊喜 K3
- 白柳 豊 24-106
- 鈴木政章 24, 30
- 須藤和夫 31
- 住田 勲 M4, 21, 30
- 蔣 君輝
- 城田正孝
- 相馬大作 8-10, 16-3

た行

- 田岡義計 K4, 10, 11, 13, 24, 25, 30, 31, 33
- 高木文造 M1, 9, 30
- 高瀬侍郎
- 高場 寛 30
- 高橋哲郎 2, 3, 24
- 高橋俊郎 28
- 武田信近
- 田中 寛 22, 28, 30, 31
- 田中隆吉

あとがき

アジアの独立はインドの独立、インドの独立は英国との戦争です。アジアで英国と戦争出来るのは大日本帝国陸海軍だけでした。

大川先生は陸軍と協力して準備をすすめます。深く入っていきませんが、とうとう最後は東京裁判までお付き合ひさせられました。

しかし、五・一五事件と軍の対支暴走によって、軍と縁が切れた先生は、「正直と親切」によってひたすら興亜の目標に傾注しました。「アジア独立学校」それが大川塾だったのです。

大東亜戦争、太平洋戦争は、全てを灰燼に帰しました。

東京裁判の被告席に立たされた先生も、大川塾で「近世欧羅巴植民史」の講義を聞きいついていた生徒達もみなアジア復興を核とした、二十世紀回り舞台の一駒々々ではなかったでしょう。

今ここに大川塾の短かった歴史を綴り、先人の偉業を仰ぐのも、ベトナム、インドの独立に命をかけた青年達を偲ぶのも、またその一駒ではないでしょうか。

第二次世界大戦は、人類史上最大の不幸か幸かは不知。歴史の大舞台の歯車に消えた一片、それが大川塾であった。

「洛陽ノ知己皆鬼トナル」
ひたすら祈るのみ。
また会わんかな、会わんかな。
栄光の彼方にて。

二〇〇七年新年

編者

六十年の歳月を経た「附屬研究所」「南方會」
「みんなみ」の栄光の歴史を閉じるに当たって。

洛陽ノ知己皆鬼トナル
西郷隆盛

出典 西郷隆盛「獄中有感」(25・37)

索引〔Ⅱ〕(みんなみ1-33号)

(註) ゴシック太字は記名者の寄稿

○は索引〔Ⅰ〕を見よ

あ行

- 合気道 5-1, 17, 26-18, 29-51
 明号作戦 22-34, 84, 23-24, 25-21, 30-22, 29, 31-22
 浅田俊介 M1~4, 18-19, 23-50, 32-1
 アジア 9-59, 16-27, 20-1
 —旅行記 17-73, 18-60
 中央— 27-26
 アセアン 10-32, 11-73
 アフガニスタン 6-15, 18-60, 32-51
 アフリカ 10-55, 12-47, 14-73
 阿片密売者 27-26, →トルキスタン, モハ
 メット・ジャン
 甘粕正彦 9-23, 13-74, 14-65
 アメリカ 10-6, 13-65, 30-65
 アラビア 9-53, 13-83
 暗号解読 2-16,
 池野光栄 10-96, 31-14
 石原莞爾 11-17, 16-35
 イスラム 11-25, 14-1, 16-10, 24-91, 26-33
 伊藤鉄三 31-15, 28, 33-8
 ○稲嶺一郎 2-11, **3-1, 8-16**, 35, 9-61, 14-67, **16-1**, 19-0, 31-7
 イラク 18-115
 イラン 11-68, 18-87
 入谷寿義 21-17, 30-6, 31-11
 岩畔豪雄 1-2, 14-66, 21-20, 22-57, 23-11, 31-45
 ○岩田冷鉄 2-9, 5-4, **6-13, 8-71, 11-22**, 18-19, **23-63**, 31-32
 インド 17-95, 29-7, 31-4
 —国民軍 9-47, 12-39, 30-44 →光機関
 インドネシア 22-57, 31-10, 11
 インパール作戦 →インド国民軍、光機関
 植芝盛平 5-1 →合気道

- ウ・チョウ・ニエン 13-47
 ウ・チョウ・ミエン 12-37, 13-10
 ウ・ヌー 13-52, 14-44
 ウ・バ・ジャン 12-26, 13-7, 30-39
 江里 繁 8-31, 30-26, 31-10
 大川兼子 4-28, 7-9, 29-2
 ○大川周明 3-1, 7-5, 8-3, 9-33, **14-1**, 14-5, 16-8, 31, 17-1, 18-2, 21-4, 23-13, 24-98, 27-4, 16, 29-1, 32-4, 12
 —日記 南洋**9-1** 中国**10-1, 11-1, 12-1**
 獄中**9-22, 13-1** 中国問題**22-1, 14**
 —書簡 8-20, 13-4, 14-21, 16-22 →柳沢
 一二
 —著作目録 7-36
 —略歴 7-32
 大川塾 1-7, 13, 18, 5-5, 26, 9-26, 12-82, 14-64, 23-49, 26-8, 27-9, 28-2, 29-50, 52, 31-1, 49
 大川周明顕彰会 8-4, 11-114, 12-19, 13-101, 14-25, 16-1~12, 24-0
 緒形誠一 5-17, 9-36, 10-9~13
 岡村寧次 13-74
 オンサン 2-11, 10-43, 13-15
 オンジー 11-50, 58

か行

- 河相達夫 4-23, 14-64
 回想記 2-19, 3-4, 5-23, 11-16, 13-22, 41, 14-33, 15-93, 17-2, 18-5, 21-15, 22-27, 33, 41, 23-1, 65, 28-12, 27, 29-14, 44, 32-19, 22
 高台教 17-60, 22-34, 30-15
 カオ・パーブ社 17-4, 18-12, 29-64, 31-45
 糟谷健夫 4-22, 6-36, 8-92
 ○片岡気介 **7-32, 36**, 9-81, 32-5
 狩野 敏 6-40, 23-13

- 富田士生 11, 13, 16, 24
 友田光男 K2, K4, K5, 12, 13, 17, 18, 30, 31
 豊田三良 30, 32

や行 わ行

- 矢木 満 14
 ○柳沢一二
 ○山岸敬明
 山口知己 8, 30
 山田 勲 K5, 8, 10, 16, 28, 30
 山本哲朗・アイ子 5, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, ~27, 16, 19, 20, 21, 22, 27, 28, 30, 31, 32・7
 和島茂男 16-6, 21-3
 渡部 亨 M4, M5, 3, 6, 7, 12, 14, 19, 23, 26, 27, 28, 29, 31, 32, 33

な行

- 永上肆朗 13, 26, 29
 中津弘正 4, 12, 28
 中村悦夫 30
 中村芙美子 15
 西川捨三郎 K3, M3~5, K6, M1, M4, 8, 9, 10, 11, 13, 15, 17, 19, 20, 21, 26, 30, 31, 32

は行

- 橋爪正吉 15, 16, 29, 30
 服部五郎 8, 11, 23
 原田 治 K2, K4~6, 31-65
 久野拓造 3, 8, 11, 12, 14, 20, 28, 30
 肥田通夫 23
 伏見三郎 別IV, 12
 朴 俊達 31
 本田秀夫 5, 10
 本間博基 31

ま行

- 梶村寛治 18
 松田敬造 1, 10
 三浦琢二 9, 23, 29, 30
 密井其一 K4, 21
 ○宮田確三
 ○宮前正夫 10
 ○椋木瑳磨太
 村田勇馬 33
 森川 清 10, 30

19-119, 21-7, 13, 27-14, 29-64
大南公司 16-44, 21-18, 23-21, 31-35
→松下光廣
○高瀬侍郎 K6, 5-4, 6-1, 7-1, 8-12, 24-68
○武田信近 2-10, 15-1, 17-73, 18-60
○田中隆吉 1-3, 4-27, 5-18, 10-6
田村伊織 31-14, 33-8
ドラット 26-22
チャン・チョン・キム (陳仲金) 8-29,
25-21, 30-14, 47
チャンドラ・ボース 3-15, 14-70, 16-11,
28-18, 29-70
チャン・バン・チュオン 22-88, 23-88
中原報 30-43, 58
長 勇 16-23
○弔詞 11-22, 13-4, 71, 16-23, 23-107, 24-66,
71, 88, 26-32, 27-1, 別刷
鎮魂 (譜) 22-73, 31-10, 33
東亜青年聯盟 12-30
東條英機 1-8, 3-2, 16-10, 27-7, 29-3
頭山 満 10-96, 16-9, 17-82, 29-52
富樫一彦 →ナコン事件
戸川英胤 23-88
徳川義親 5-17, 23-18, 28-2, 29-51
吐根 4-13
ドリアン 19-70
トルコ 6-19, 7-15, 18-123, 19-55
トルキスタン 19-71, 27-26, 32-45
トンガ王国 15-71

な行

ナウル共和国 15-76
永井俊彦 31-16, 30, 32-26, 33-13
中島信一 4-3, 26, 7-1
→小伝 7-2~15-54
中島菊治 5-34, 6-33, 36, 29-51, 82
中谷武世 8-15, 13-101, 16-19, 21-3
中村 (博吉) 機関 23-16, 30-20

中村孝志 16-21, 19-122, 24-108, 29-6
中村芙美子 15-50 →原田俊明
ナコン事件 21-7, 22-61, 30-50
南方会 8-15, 14-28, 16-12, 21-3, 24-0, 31-56,
32-1
西サモア 15-67
西ニューギニア 16-53, 28-14
二等兵物語 8-40, 10-14, 13-23, 18-33,
20-11, 23-23, 25-21, 29-71
農魂 4-17, 28-24
廬 泰愚 23-63
ネ・ウィン 2-11, 11-60
ネール 19-48, 31-9

は行

バオダイ 8-29, 17-64, 23-20, 25-24, 26-4, 5
パキスタン 12-74, 30-16, 32-9
馬仲英 29-121
ハッタ 19-50
バーネット 24-1
浜野末太郎 5-13, 35, 29-51
パミール 28-31, 29-87
バーモ 13-14, 30-41
バユー事件 11-25
原田俊明・明 2-14, 12-44, 15-46, 31-12, 18,
27, 33-6・15-50
汎太平洋通商航海会社 1-4, 10-6, 32-11
ハンチントン 4-2, 5-17, 29-1
光機関 8-40, 11-29, 14-33, 18-30, 20-14,
30-6, 10, 11, 28, 31, 45, 53, 55, 61, 62
ヒスイ物語 17-24, 18-36
ビルマ 7-22, 10-61, 13-23, 17-89, 20-7, 25-1,
27-19
→潜入記 15-1
→独立義勇軍 2-11, 8-32, 38, 10-43, 18-5,
31-4 →南機関
→水上支援隊 25-38, 30-27
→日誌 12-21, 13-7

蒲生禮一 1-15, 5-13, 9-38, 26-11
茅原峯山 5-17, 8-93, 19-8, 28-2
川口 敏 31-16, 30
河本大作 9-24, 13-4
○菅 勤 2-1, 6-1, 18-19, 23-3, 31-45
韓国 23-13, 63
カンボジア 3-5, 9-61, 11-75, 19-2, 21-54,
23-25, 67, 26-24, 41
紀行 5-29, 8-79, 12-72, 16-50, 83, 19-79, 24-1
揮毫 3-3, 6-39, 25-37
北朝鮮 31-47
きらら 22-26
キリバス共和国 15-77
クォン・デ (彊樞) 17-60, 67, 22-83, 25-25,
26-2, 30-15
国塚一乗 8-49, 30-53
胡桃沢耕史 16-19
ケマッサル鉱山 22-49
ケマル・パシャ 19-55
コーカサス三国 10-65
江 上達 11-14
獄中記 9-22, 13-1, 15-7, 23, 23-36, 41, 28-18,
29-74
五島督二郎 2-11, 21-10, 30-1, 31-7
○児玉正志 5-1, 9-34, 73, 10-93, 14-53, 22-24,
28-17
ゴ・ディン・ジュム 5-37, 17-54, 63, 22-34,
23-19, 25-25, 26-1, 30-14, 29, 31-5
許斐 (氏利) 機関 23-18, 30-24
コヒマ 3-15, 12-39
コーラン 14-1, 16-10, 24-91
→の研究 14-83~27-34
コール・フィールド女史 1-8, 23-49
さ行
斉藤正義 8-14
佐々木到一 9-23, 10-84, 12-65, 13-80
佐藤正二 22-33, 31-15, 28, 33-6

佐藤弘 26-17
ポー・グエンザップ (武阮甲) 31-12, 27,
38
AMサハイ 5-35
砂漠 11-85, 13-83
サンデル・ヤーヤナ 5-14, 29-51
式守伊之助 4-26, 29-61
中国 8-71, 10-77, 25-46, 27-4, 6
→大川周明
柴田敦司 10-96, 29-63, 31-12
島野三郎 12-20
終戦 3-9, 16, 8-27, 10-21, 13-30, 14-36, 23-29,
26-20, 29-14, 30-17, 31-6, 32-36
○蔣 君輝 11-16, 22, 13-108
庄子仁郎 21-19, 31-10
城島忠一 22-33, 31-15, 29
昭和語学研究所 6-36
昭和通商 2-11, 21-10, 22-61, 30-51
白井同風 5-13, 28-2, 29-51
○城田将孝 21-4, 63 →中島信一
シルクロード 6-13, 15
随筆 6-29, 8-54, 9-71, 11-95, 97, 100, 108,
12-79, 14-53, 89, 16-26, 20-4, 22-24, 41,
24-106, 27-14, 17, 22, 28-20, 29-27, 40,
32-14
スカルノ 19-38
杉野元一 22-33, 31-15, 28, 33-7
スマトラ 11-25, 22-57
ズンガル帝国 28-35
盛世才 29-121
隻脚物語 13-22, 25-1, 33-2
ソロモン群島 15-73
ソン・ゴク・タン (山玉誠) 17-70, 21-4,
19, 30-16, 29, 31-5, 42
ソン・サン 9-61

た行

タイ 2-8, 8-31, 14-67, 16-40, 17-2, 82, 18-5,

[資料二] (小林隆提供)

蒲生先生直筆のペルシャ語教本

مویخی درازی شود و دور درختهای دیگری پیچید و از یک باغ به باغ دیگر میرود - مورا
باید پرس بکنند و گرنه خوب بار نمیدهد درخت مورا رز و تنگ هم میگویند -

طوطی

مریم طوطی داشت که در قفسی زیبا آنرا پرورش میداد طوطی مثل ببل آواز خوش ندارد
اما سخن میگوید هر کس عیارتی را یاد بگیرد و معنیش را نفهمد میگویند طوطی وار یاد
گرفته و بسیار است که آدم چیزی را طوطی وار یاد بگیرد هر کس چیزی را یاد گرفت باید
معنیش را هم بداند مریم طوطی را بسیار دوست میداشت روزی چند مرتبه بسرگشتی
او میگامه و باد خوراک میداد پرستارش میکرد و باوسن گفتن میآموخت طوطی مریم
چندین کلمه یاد گرفته بود آقا بی بی بیا برو سلام رفت آمد -

طوطی را از بندگشان میآوردند - بهمانطور که اگر کسی دست بلانه مرغ بهر دفع
او را نوک میزند کسی هم که دست بقبس طوطی برد طوطی با متعار او را میزند -
مگر به پیر زال

یکی گریه در خانه زال بود که برگشته ایم و بد حال بود
روان شد نمایانسرای امیر خلامان سلطان زدندش به تیر
برون جست و خون از تنش میکید همگینت و از بول جان میدوید
اگر چشم از دست این تیر زن من و گنج ویرانه پیر زن
نیز در عمل جان من زخم نیش قناعت نکوترید و شتاب خویش
از بوستان سعدی است -

品名	数量	価格
天蓬 (テンポウ)	十個	一五〇
巴拿 (バナ)	三十本	一〇〇
ゴロン (ゴロン)	二本	一五〇
ミカニ (ミカニ)	十三個	一七〇
羊ひん (ヤウヒン)	三十七	一〇〇
菓子菓子 (カシカシ)		三〇七
紅茶 (コウチャ)		一六〇
砂糖 (サトウ)		一六〇
菓子菓子 (カシカシ)		四〇〇

菓子配給表
昭和十五年四月一日
小林隆 提供

品名	数量	価格
豚肉 (トノリク)	九斤	一〇〇
白丸 (シロマル)	二斤	一〇〇
焼豆腐 (ヤクドフ)	一斤	一〇〇
豆乳 (マメゴ)	一斤	一〇〇
煎茶 (センチャ)	一斤	一〇〇
砂糖 (サトウ)	一斤	一〇〇
菓子菓子 (カシカシ)	一斤	一〇〇

菓子配給表
昭和十五年四月一日
小林隆 提供

(小林隆 提供)

品名	数量	価格
水月 (スイゲツ)		三三三
菓子菓子 (カシカシ)		三三三

菓子配給表
昭和十五年四月一日
小林隆 提供

品名	数量	価格
菓子菓子 (カシカシ)		三三三

菓子配給表
昭和十五年四月一日
小林隆 提供

菓子配給表 昭和十五年四月二〇日 (作成者 山本哲朗)

[資料三]

氏名	金額	備考	氏名	金額	備考
山本哲朗	1000		山本哲朗	1000	
山崎良幸	500		山崎良幸	500	
青山オーバルビル	1000		青山オーバルビル	1000	
東京都渋谷区神宮前五	1000		東京都渋谷区神宮前五	1000	
...

氏名	金額	備考	氏名	金額	備考
山本哲朗	1000		山本哲朗	1000	
山崎良幸	500		山崎良幸	500	
青山オーバルビル	1000		青山オーバルビル	1000	
東京都渋谷区神宮前五	1000		東京都渋谷区神宮前五	1000	
...

南方會

編集者 山本哲朗
 東京都西東京市東町一三二
 電話 〇四二四二二二八五七
 印刷所 (有) ポピ
 山崎良幸
 東京都渋谷区神宮前五二二
 青山オーバルビル
 電話 〇三二五四六六〇〇九一
 発行日 平成十九年三月三日